顧問
井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂
校訂

國史草木昆蟲攷

自六至十
及
國史外品

附 渚能丹敷

合資會社 日本古典全集刊行會壽梓

萩の大木の事玉勝間十三卷廿五丁にいへり

波行

はぎ　順抄、鹿鳴草の注に、國史用芳宜草三字、楊氏又用鹿鳴草、三字並本文未詳。槃按に、鹿鳴草も芳宜草も女郎花ヲミナヘシ狗尾草エヌコグサ白慈草マタフリクサ鶏冠木カヘデノキの如く漢呼に似て、我國の名なること明らかなるを、順朝臣は蓋し漢呼とやおもひけん（漢呼に似たる和名の考證は、別にしるしたれば、こゝに悉さず）鹿鳴草のうたは、萬葉集中に凡百五六十首ありて、秋に花の咲ちり、雁鹿露などによみそへて、波藝、芽子、芳宜などゝ書たり。鹿鳴草の秋ハギなるはいふべくもなく世によくしれることながら、下に萩の字をときさとす料にいふ也。鹿鳴草は、救荒本草に載たる胡枝子、一名隨軍茶、雍正西湖志に、天竺花、百菊集譜に觀音菊とみえたり、後にふるえにさけるはぎの花、あらきのはぎなどよみて、木本コダチのはぎなりといへるは、萬葉の榛をハギとよみ誤りてよりいでしことば成べし。胡は說文に牛頷垂也、郎下垂を胡といふ、顧炎武日知錄に詳に證引たり（橘黄閑記盡十八丁全載す）波藝ハギの枝は悉く下にたるゝもの故にこそ胡枝子といへることといち

じるし、胡麻、胡椒などの胡とは其義異なり

○萩をよむは、順抄に、尒雅集注を引て、萩一名蕭、注に萩音秋、和名波木。これ萩にもハギの和名あること明らかにして、鹿鳴草と同名なり（此條は欵冬と山吹花とを併せたるとおなじ例え。但其名を倒置せしのみなり）槃按に、尒雅釋草に、蕭萩今本尒雅に萩を荻につくり、注に即萩蒿音秋、疏に李巡云、萩一名蕭、陸璣云、今所謂萩蒿者是也。これ鹿鳴草と萩と異なることしるべし。また按に、順抄、野菜部に、薺菜、一名莪蒿、和名於八木。万葉によみたる菟芽子（ウハギ）とおなじ。また字鏡に、茵陳蒿を加良宇波支。順抄に、菊を可波良於波岐と注したり。これ蒿類にもハギの稱あることしるし。さるをいつよりしてか順抄をよみ誤て、鹿鳴草と萩を一物とおぼえしは、猶欵冬と山吹花を一物とおぼえしとおなじ誤なり、今にいたるまでこれを改るもののなきはうれたかりけり。順抄釋例の略は凡例にしるしたり

はり　榛をよみたり、榛に二等あり、延喜式にハシバミとよみたるは、詩の鄘風に詠ずる榛栗の榛なり、紀及万葉によみたるハリは杜詩に詠ずる榿木、即今いふハンノキなり。さて萬葉に、榛を針、波里、眞榛をマハリ、榛原を針原、また草に土針といふは其葉のかたち波里に似たれ

ば名とせるゝ。また紀に、榛蓁ともにハリとよみたり、記の波理能紀も、紀の榛なるべし。また紀及衣服令に、蓁揩ハリスリ、順抄に、遠江國蓁原を波伊波良、武藏國榛澤を波牟佐波、是蓁榛通用、また掃部をカモリともカモムともよめり、是ハリ、ハム通用のしるしゝ。萬葉集中に榛をハキとよみたるは、同集の芽子及波藝と混じ誤て訓ぜしなり。ことに集中に波里をよみたる哥十首餘あるべけれど、みな花をよみそへたるはなし、さればハムノキなること明かゝ。年山紀聞且久老が槻の落葉などにはやく辨じあかしたるを見つべし

はす　蓮をいへり、後のはちすの條みるべし

ばら　荆棘をよめり、いせ物語に、うばらと書たるもおなじ、また茨をもよめり、今は專らに薔薇を云ゝ。その花のいろ〱咲る時節によりて稱をことにせるもあればいふべし。垂絲バラ一名木香花といへるは其花の香韻世のつねのものに似ざれば、本草綱目營實の條、及び花鏡などに木香とありて、また花鏡に一名錦棚兒、また黃バラあり、一名コヤオキ、花の色黄似レ酒とて酴醾と云と王路が花史にみえたり。按に元來は茶蘼に作りたり、此花の色に似たる酒を酴醾といひ、花の色よりして酒の名をとるとぞ、詳に田藝衡が香宇外集にみえたり、此類

に紅白紫の三色あり、泛て佛見笑に似たり、本草綱目營實の條にみえたり。一種ハトヤバラあり、白辨金蕋にして花また大なるを雪梅墩と云、その紅艷なるを番茶蘼と云、共に花鏡にみえたり。また山茶バラ、一名猩々バラあり、花の紅光これにまされるものなし、是を金沙羅と云、花史にみえたり。またローサバラ、一名ハマナスあり、海瀕に生じ其の實の茄子に似たれば即濱茄の謂之。これを玫瑰と云、花鏡にみえたり。尤侗が外國竹枝詞に歐羅巴國中玫瑰最貴取蒸爲レ露、またオランダバラあり、繭を煮て絲を繰時にはじめて開けるとて是を繅絲花ミ云、花鏡にみえたり。また菩薩バラ有、數英聚開これを十姊妹と云、周文華が致富全書にみえたり。また長春あり、一年の內大氐六回花咲、是を月季花と云、本草綱目にみえたり、一名長春花、花史にみえたり、また同名あり、月々に花さく故に月々紅と云、綱目月季の條にみえたり、一名月貴、一名月記、共に廣東新語にみえたり。また去來宵バラ有、冬月の寒威に咲花なれば半開して缺たる月の如し、故に名けるゝ、是を鬪雪紅と云、また綱目月季の條にみえたりはえ　紀に芽をよみたり、生の義之。万葉にハユルとよみたり、字鏡にはヒコバユと注したり、

ひこばえの條みつべし

はじ　万葉巻二十に、神の御代より波自由美を、神代紀下に、天梔弓今刻木梔弓に作るは誤也記に、波士とよみたり。今筑紫にてハシノ木とて、その實を搾て蠟をとる木あり、いにしへの梔弓もこの木にて作るにや、歌にはじもみぢとよみたるはまさしくこれなるべし。按に今の弓材も專らハシの木を用たりといへり、猶尋ぬべし。奥木順抄に、孫愐唐韻を引て、梓、和名阿豆作、又波之と註したり

はち　記に蜂をよみたり、推古紀に、蜂岡寺ハチヲカとよみたり、皇極天皇二年百濟太子餘豐以二蜜蜂房四枚一放二養於三輪山一而終不二蕃息一。順抄に蜜蜂を美知波知と注したり

はひ　万葉巻十二、紫は灰さすものぞ海石榴市のとよみたり、清記に、市はつばいち、やまとにあまたあるなり、としるしたり。後拾遺集齋宮女御、むらさきにやしほ染たるふぢの花池にはひさす物にぞ有ける。源氏眞木柱の卷、などてかくはひあひがたきむらさきを心にふかくおもひそめけむ。順抄に、玉篇を引て、柃似荊可作染灰者之。注に、漢語抄に比佐加木。按に今丹波國山邊郡の内より山茶の生木燒て灰となしヤマアクとて四方にひさぐよし、これいにしへの遺製なるべし

はへ　蠅をよみたり、萬葉に五月蠅、神代紀に天蠅斫之劍と有、はやくも記にも見えたり

はた　神代紀に鰭廣鰭狹、この鰭は今いふヒレにして幡薄(ハタスヽキ)のハタとおなじ、又すゝきの名義
とおなじ

はと　鴿をよめり、新六帖「入日さす山下陰のむらしはにはとなきかはす秋の夕ぐれ」

はね　順抄に翮を注したり、尒雅集註を引て、羽本曰翮、一云羽根也

はえ　俊頼百首に、ふしづけしおどろが下に住はえの心をさなき身をいかにせん。鰷魚の
ことなるべし

はな 圏

玉かつま四の卷云、櫻を花といふ事。たゞ花といひて櫻のことにするは、古今集のころまでは聞えぬ事なり。契沖法師の餘材抄に委しくいへるが如し。源氏物語若菜上の卷に、梅の事をいふとて、花のさかりにならべて見ばやといへる事あり、これらはまさしく櫻を分て花といへり

はし　箸

貞丈が後院云、古代ハ竹ヲ削テ箸にしたるゝ、大膳式云、箸竹二百三十株。又云、箸竹七十株とあり。是箸に削

べき料の竹をいふ也。姓氏錄卷十三云、竹田連火明命五世之後也、仁德天皇御世大和國十市郡刑坂川之邊有竹田神社、因以爲氏神同居住焉、緣竹大美供御箸、因茲賜竹田連　〔〇二行餘白〕

はちす　紀記に蓮をよみたり、万葉に蓮荷をよみたり、蜂巢の義也。ハスといふもハチスの略にして、蓮房のとなれどもまた蓮花をもいへり、雄略紀に、波奈婆知須ともみえたり。式に蓮子をハスノミとよみたり。順抄に、茄をハチスノクキと注したり、尒雅に其莖茄、字典に、茄青荷字。万葉に、蓮葉をハチスバとよみたり。式に、蓮稚葉、蓮壯葉、蓮黃葉などみえたり。後のうたには蓮の青葉、卷葉、枯葉などゝよみたり。尒雅に、其葉蕸、蕸亦荷也。抄に、藕をハスノネと注したり。式に、稚藕ともみえたり。字鏡に、荷本の白久支と注したり。また躬恒集に、蓮の葉のはひといへるも稚藕なるべし。さて蓮莖中に絲あり、延引は綿軟にして絶ざること蛛の網絲しどし、歌にはちすの糸とよめるはこれなり。この絲を繰とりて紕をかけ紡績以て布を織べし、あだし國にてこの事有をきかず、我國にて天平寶字年の比これを製れるよしみえたり。當時藤原豐成の女中將姬扶桑略志に中將姬に作れり大和國當麻寺にて蓮莖の絲を抽て曼茶羅を織とあり曼茶羅、譯して斯に輪圓具足といふ今當麻寺に藏する所のもの横直凡三尺斗にして、天堂諸仙

の圖を寫し著すと。薩摩國坊津如意山一乘院にもまた此物あり按に貞觀中空海に法印勅贈の宣旨と共に此寺に寄藏す當麻寺の物に比れば大幅にして寬さ四尺餘なり、其圖は大率(おほむね)相似たり、設るに五彩の色を著(ツケ)たり。その金碧の精細神毫に入る、その欵に云「天平寶字七年」の六字泥金にてしるしたり。按にまた新曼陀羅あり、天平寶字の後四百五十餘年にして、保延四年阿波國浦莊にて絹を得て、同五年六月に功成たり。畫工良賀法師源慶法眼、欵文は修理太夫藤原行能なりといふ、けだし畫力の傳ることは、凡そ五百年許なるべし、おもふに天平の世を去ること今既に千百余歲なれば、かの幅も保延の頃に再び傳撰せしかもしるべからず。また按るに、黃檗僧獨湛が輯したる當麻寺織造藕絲圖說一卷ありて、其內に法如の傳もみえたり、法如は中將姬剃髮の後の名也。さてまたわが君氏この君氏は故中納言堤代長卿の中女にして前君の親母たり再度藕絲布紝織せり、事詳に別記あればこゝに略しぬ

はゝこ　輔仁和名に菴蘆子、和名比岐與毛岐、一名波々古と注したり。文德實錄に三月三日の草餅は鼠麴をもちひてこれを製す、其味艾糕に勝るといへり。鼠麴こゝにハヽコよみたり。按に晋の宗懍荊楚歲時記云、三月三日取鼠麴汁蜜和爲粉謂之龍舌粇以厭時氣、字書に粇

屑米餅、これ鼠麹をもちひとせしことは和漢ともにあることをしりたり、けだしはこゝに荊楚の俗をならひたるかもしるべからず、俊頼家集に「君がためやよひになれば夜妻さへあべの市路にはゝこつむなり」彌生といひ、あへといひ、つむとつゞけたれば、もちひに用ひし料なるべし。鼠麹草は江戸の詞にハヽコといへり、これ白蒿のたぐひにして、日向におふるは雪霜をしのぎその苗のかたはらより春はやく若芽の萠いで、新舊の苗母子の並るるにたぐひてハヽコとはいふなるべし。藻塩草に、父子草と書たり、薩摩國人はモチフツといひて艾糕の如くもちひに和せしと。これいにしへの遺風なり〔三月三日艾糕の事は陶設が朝鮮賦の注にもみえたり、是我より彼も傳ふるか、またかれよりわれにつたふるにや〕友人某帯て國史にふけり、年毎に著述ありて木に鐫りたり、頃間えたり顏してハヽコの義を書付てわれにいだせり。其言云、和名抄に本草を引て白蒿、一名蘩皤蒿とあればハヽコは正しく蘩皤蒿の字音の轉じて約りたるにて、且いにしへのハヽコは即白蒿にしてシロヨモギ也とぞ、猶くだくだしき證を引てかきたり。さてこゝにやくなきとながら我門徒の爲めにしるす。槃按に、順抄に引たる本草はおほく輔仁本草和名之、即順朝臣の自序にこれをさして新修本草ともいへり、白蒿、一名蘩皤蒿あるは即輔仁本草に見えたり、蓋し輔仁が唐新

修本草を讀誤たるか、また尓雅を讀ざるか、三字をつらねて一名とおぼへたり、順朝臣もそれに打まかせて、また其まゝに引たる之、さるを某もまた其誤を承且うくるのみならず、共和名を字音をもてときさとすはいたく僻事なるを、已えたりとてわれにほこれり。さるはかたはらいたし、某は人もしりたるが漢土の書を讀ざればかゝる訛をもいひいだせる之。詩の召南に于以采蘩、毛傳に、蘩ハ皤蒿也、是いふべくもなく、尓雅に蘩ハ皤蒿とあるは、皤蒿は蘩の釋なり

はつほ　祝詞式に、初穗をよみたり、倭姫世記に、先穗と書たり、三代實錄に錢の事に所鑄作之早穗二十文と有と士淸いへり

はまな　万葉卷十三に、濱菜と書たり。こは海藻をいふにや

はゝき　萬葉に、地膚をいふ也、字鏡に、荊蒭を注したり

はねず　郁李をよみたり、万葉卷八、家持「夏儲てさきたる波禰受久方の雨打零ばうつろひなんか」此歌の題に詠二唐棣花一とあり、また卷十二の歌に、唐棣花の移安とありこゝに唐棣と書たるはけだし陸璣及末梅菴の誤をうけたり、正に是棠棣また卷四に、翼酷色の變安とよみたり、さてハネズ即郁李の花をよめるなり、後に其明證を記したり

冢万葉集抄六之卷二十丁云万葉集或本裏書云、

唐棣山也 下序如 子如李、赤 子、一名移 移音 子奥 野李也 似白楊 江東呼 鳥夫移 子桃 可櫻 食、抽 邑記云 扶移柯 節滲 根下 垂虛 中森 羅徒 風望 云縣 堅文 檢本頭

色は朱をいふなり、天武十四年紀に、秋七月乙巳、初定二明位以下進位以上之朝服色一、浄位巳上並著二朱華一。注に、朱華此云二波泥孺一。朱華は即郁李なり、郁李今俗にニハウメといふ小木なり（一種八重さくをニハザクラといふ、これもとは櫻桃の名なり、櫻桃、一名を朱櫻、郁李と一類なり）春のすゑより夏かけて葉をしき花を開、そのはじめ蕾めるはくれなゐの玉を緒にぬきたるやうにて、いとにほひあり。露にうるひ雨にしほるゝ時は、其紅艶色頓にうつりけるものなり、これ郁李のハネズなるをしるべし。さて唐棣は郁李に非ず、棠棣の誤なるしるしは詩の豳風に、七月に、六月食鬱及薁、柯楷古義角部豳風の注に、蘇轍云、康棣之類、此説あしゝ、劉楨毛詩義問云、車下李、此説よろし、㮚按に、車下李は棠棣之、棠棣は即棠棣（ママ）にして郁李之、小雅に常棣之華、鄂不韡々。鄂不は花蕚の樹之、韡は説文に盛也、朱傳に、光明也、其花の灼然さしてにほひいでたる事をいふ之。尓雅に常棣ハ棣也。注に、如櫻桃子可食、柯楷古義女部棠棣の注に、一跗輙生二蕚兩々相麗。これ皆郁李の棠棣なる證之。唐棣の常棣にあらぬしるしは左の如し、詩の召南、何彼穠矣に、康棣之華、曷不肅雝。論語に、逸詩を引て、唐棣之華偏其反。尓雅に、唐棣栘、注に似白楊（俗名ハコヤナギまたハクヤナギ）江東呼夫移。古今注に、扶栘圓葉弱帶微風則大搖故名高飛。此喬木にして斯方山野或はこれあり、葉

云陸璣草木疏云唐棣即奥李也。其花或白或赤六月實成云云

袖中抄三巻云唐棣花色のうつろひやすき心あれはとしをぞきふるとはたへすて一云云夏さくうつろひやすき花ありと心得

は白楊と正に同じく春嫩葉を敷(シク)、秋はやく墜、夏月白花をひらき穂をぬき横簇して下にたれ、風にひるがへるもの之。逸詩に偏として其反するは蓋しこれをいふ之。諸國方言にシデノキ、シデヤナギ、シデザクラ、ヤマムロ、シデヤクラ、ヤクラバナ、ザイフリ、ヤマナラシなどいへり。陸璣之をしらず、誤て奥李となす、朱註にも唐棣を郁李也としるして、後人に質(タヾ)さる、後人もまた或は其非を曉(サト)さずして猶郁子と覺えたるもおほし、柯楮古義女部小雅常棣の注に・戴侗謂常棣唐棣棠棣特一物以棠唐常聲相近故通用非也。槃按に、尓雅すでに唐棣と常棣を兩條に出す、これ唐棣は扶移にして、棠棣にあらぬ明證をしるべし

はゝそ　槲也。式に、ホヽソまたナラガシハこもよみたり、今もかく呼て薪とも炭ともなせしもの之。字鏡に、楢を注せしもまたおなじ、萬葉卷十九に、波播蘇葉とよみたるも槲なるべし。順抄に、柞、和名由之、また波々曾と注せしは槲と柞とを混ひたり、柞は椽(ツルバミ)の一名にして槲とはことなり

はゝか　津島方言ハウカの木の眞寫と葉腊とをみるにニハザクラにもカニハにも非ず、別に一種の樹なり、圖譜に載たる圖狀をみつべし。岡田龜卜傳に云、ハウカの木は對馬ばかりに有、

べし云々

記に取 天香山之天波々迦和合三十藤那 其こと あり

花實なし、葉は櫻に同じく、炬となしてよく燃るなり

はりを　順抄に、針魚を注したり

はらか　順抄に立成を引て、鮭魚と注したり。式に大宰府より腹赤御贄を奉ることあり、其下に一隻長者于尺とあり、或はいふ、是鱒之ゝ、また常陸國方言に石鮅魚といへり、一名ナカムい、これを小魚にして腹の少し赤ければいへり、名はおなじうして物はことゝ

肥後國風土記云、昔大足彦天皇誅二土蜘蛛一之時、泊二於賀周里一云云、又有二稲左右潮魚多之、從人吉備國朝勝見以レ鉤釣レ之、多有レ所レ獲、即獻二天皇一、勅曰、所レ獻之魚此爲二何魚一、朝勝見奏申、未レ辨二其名一、正似二鯽魚一耳、應覽曰、俗見二多物一即云二尓陪佐尓一、今所レ獻之魚甚比多有、可レ謂二尓陪魚一、今謂二尓陪魚一其縁也。公事根元元日節會之條云、天平十五年正月十四日太宰府より是を奉ける、是よりして年毎の節會に供すべきよし定置れたるなり、腹赤とはますと申魚の事なり云云

○四字

はにし　順抄に葉曰具錦に黄櫨を注したり

國式に

はしかみ　記に波士加美と清音に書たれど、神武紀の歌に、垣本に植し破頭介彌くちひゞく

加賀國加賀郡波自加彌神社あり、又大神宮四月十四日祭に遠江ノ神戸より進る種(タネ)薑(ハジカミ)といふ物年中行事に見ゆ

囹記傳十九十四五丁云ハジカミといふ名義齒(シカミ)鑒なり

と書たる餌(ジ)は濁音之、薑は味の辛辣のものなれば、口疼(ヒヽク)ゆゑに、端咬(ハシカミ)の義なるにやといへり、いかゞ。おもふにハシカミてふ詞は辛辣の謂なるべし、蜀椒ナルハシカミ一にはフサハシカミ、辛夷コブシハシカミ、呉茱萸カハラハシカミなどいひて、姜のハシカミを本とせり。順抄に、生姜を久禮乃波之加美、俗云、阿奈波之加美と注したり。囹乾薑ハ保之波之加美

はまゆふ　万葉巻四に、三熊野の浦の濱木綿(ハマユフ)とよみたり、今の俗に濱オモトといへる草なるべし、この草の莖は葱に似ていとふとく、白紙をいく重も〳〵たゝみたるが如くなるものなり。今紀伊國花の窟(イハヤ)のわたりの俗人(サト)は御幣草(ミヌサクサ)といふといへり、秋にその葉の白くかはりて下に垂る様、幣帛のごとくなれりとぞ、これけだし臺灣續志に載たる曇花也、呉繼志が着色本草には、花白者名文珠蘭、又曰蟹蕉、花紅者名曇花

はまばひ　順抄に、蔓荊と注したり、濱延の義なり

はゝきゞ　地膚をいへり、今俗にいふホヽキヽ也

○その原のはゝきてふものは、新古今集是則「そのはらやふせやにおふるはゝきゝのありとはみえてあはぬ君かな」信濃地名考にいはく、伊奈の南部に母木(ハヽキ)と呼もの有、薗原の北滴内(ヒイナイ)

と谷川氏が云るは能當れり、躑極も羊くて齒の堅な山にに同じ名を負へりナルとは木になる物なればなり

囲万葉集抄巻六五云、濱ゆふは芭蕉に似てちいさき茎なり、くきのい

路の邊よりみわたせば、つらなれる山のうちに、ことに高き梢みゆ、その所に分入てはいづれの木といふ事をしらず、これをはゝ木といへり

はゝくり　順抄に、貝母を注したり

はまをぎ　秘藏抄に、蘆也といへり

はしばみ　式に榛をよみたり、即榛子、万葉にいふハリにはあらず

はふむし　神代紀に昆蟲をよみたり、雄略紀に、蜻蛉をよみたり。順抄に、跂行を注したり

はへとり　順抄に、蠅虎を注したり、今はハヘトリクモといへり

はながひ　花介也、花のひとひらに似たればいふぞ。白きも赤きも桃いろなるもあり、夫木集に、さまざまの花がひどもおほくよりたるをみて「枝ながらうづまく浪もをらねばやちりぐ〳〵よする千代の花がひ」

はるとり　万葉巻九に、春鳥能啼耳鳴牟とよみたり。槃おもふに、春の日に、もゝ囀の百千鳥をいふなるべし。後の世に鶯をいへるはたがへり、漢土にても周禮羅氏に仲春羅春鳥獻鳩以養、また洛陽伽藍記に、春鳥秋蟬鳴聲相續、また柳惲の陽春歌に、春鳥一囀百千聲、春花

くえともなくかさなりたる之、へぎてみればしろくて紙などのやうにへだてのある之、大臣大饗などには鳥足別つゝまうせんにいくみのまゝ浦よりどのしほらせるとゝいへり

一叢千種名、此皆一鳥をさしていはず、こゝにいふは百千鳥なること明か也。順抄に、陸詞切韻を引て云、鶯春鳥也、これ春鳥は釋文にして鶯は春の鳥ことといへる義なるを、後世竟に鶯の一名となせしなり。猶時鳥をホトヽギスといふが如し、其證を共にいふべし。楊愼丹鉛錄に、靑史子を引て云、梧春木也、柳夏木也、棘秋木也、蒐ハ冬木也、尓雅に蕣ハ春草といへるもまた釋名にして、一名にはあらず。それ尓雅一書は六經中庶物の㒵を訓詁し、鳥獸草木も詩三百風雅頌の名物を釋せる文也、釋草中に、荼ハ苦菜、駁歩角切九葉、權ハ黃英、菆音輙小葉、蘦ハ大苦といへる屬はこれ釋名の文なること明か也。蕣、椿草といへるも卽しかり、さるを宋の邢昺より竟に一名となせしとしるべし○時鳥またしかり、南史陶潛傳に見樹木交蔭時鳥變聲、陸璣詩に蕙草饒淑氣、時鳥多好音、劉斌詩に春林已自好、時鳥多和鳴、後世詩人用ふる所皆こゝに仿へり、これ注釋を候ずして時鳥は春鳴の百鳥なることをしりたり、是また前にしるせる春鳥にして、こゝにいふ百千鳥なるを竟に姉歸の一鳥に歸したり（姉歸は即子規也、柳二州が記にみえたり）

はやぶさ　記に波夜夫佐、紀にも破夜歩佐とみえて、夫歩みな濁音也。順抄に、鶻を注したり、たかの條を見るべし

校云、同ジ例獸アリ、一ハ衍カ

はこどり　清記の抄に説なし、たゞある説を引て、はやこ はやことなくゆゑに早來鳥といふ、といへるのみにして、證なし。源氏物語河海抄に、呆鳥をよみたれごたがへり。呆鳥はカホドリ之。また箱鳥と書て、万葉にありこ注したれど、萬葉には有ごも覺えず、按に六帖に「鳥かへすものにもかもやはこ鳥のあけてくやしき物をこそおもへ」また「みやまぎによるはきてなくはこどりのあけば歸らん事をこそおもへ」また源氏若菜の卷に「太山木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花のいろにあくべき」此らのうたによりておもへるに梟にや有けん

はねうま　順抄に、騬を注したり

はたつみ　大同類聚方に、石龍芮をフカツミといへば、畠におふる芹に似たるものは應に毛莨なるべきか、いまだしらず

はまびし　輔仁和名に、蒺藜子を注したり

はせをば　順抄に、芭蕉注に、巴焦二音、和名發勢乎波。古今集物名に、心はせをば人にみえつゝとよみたり　〔○以下七行余白〕

後院云或說にまこもの若名とふ、又一說に田字草とて四葉有浮草と云、按に堀川百首杜若の題公實の哥「花かつみまじりにさけるかきつばたたれしめさしてきぬにするらん」此歌花

はなかつみ　万葉巻四、中臣女「をみなべし咲澤(サキ)に生る花勝見かつてもしらぬ戀もするかも」巻十に、をみなべし咲野に生ふる白管自、おみなべしの咲ころにつゝじの咲けるとなし、さればこゝのをみなべしは但咲といへる詞の因によりたるのみ、これ序歌の體にして、山菅の實ならぬと同例之。さて又宣長は咲澤を大和國なる佐紀鄕なりといへり。われおもふに集中に、おみなべし咲野、かきつばた咲沼とよみたる儀あれば、地名ともおもはれず、花かつみは集中に但この一首のみなれば、蓋し或國或鄕の方言ならんか、今其名はかく物に殘りたれど實物ははやくかくれたれば考るによしなし、六帖などにもよみたるは其物とみたるやうなれど、おほくは萬葉の歌にすがりてよみたるなり。六帖に「きみがおる八重山ぶきの花かつみかつみる人ぞ戀しかりける」槃おもふに、平の宮の比に黃色なる花かつみてふ草ありしにや、後にきくことなし。けだしはをみなべしを實物こ心えて、中とみのいらつめの歌にすがりてよみしにや、如何。古今、戀四、よみ人しらず「みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人の戀しきやなど」あさかの沼のはなかつみをよみたるは、此うたはじめなるべし。俊賴散木集に、花がつみといへることをあふ人のよみたりけるを、いかにいふ

かつみに交りてかきつばたの咲るをよめれば、花かつみはまこもなるべし

校云、古今、かつ見る人に戀やわたらんトアリ

宗齋隨筆に、花かつみは住吉慶用云、天滿天神の像の

事ぞとたづねければ、ようもしらぬことをしりがほにいふときこえければ、心のうちにおもひける「鴨の居る玉江におふる花がつみかつよみながらしらぬなりけり」今人或は蔣カツミ也といひ、藻の花なりといひ、田字草なりといひ、四ひらのカキツバタなりといへり。皆いにしへに因あるか、われはえしらず。再びおもひよするに、さき澤にさく花かつみとよみたれば、咲も花を實字にして花の咲にほふみくさなるべし。あさかの沼のかつみのこもなるとは曾(カツ)て明かなり、これを花がつみとよみしは、かつみてふ名あるゑむによりて、一物こや心得たりけん、さりこてもこもにはめでみるほどに咲ける花もみえねば、あさかの沼の花がつみにさくさよみつゞけたる歌はわれはいまだ心えず、されば中臣女のよみたるものと、あさかの沼の花がつみとは、名のみおなじうして、その物はことなるべし。六帖の題にも、こもと花がつみを二條に分ていだしたり（六帖のうたはならの宮の末より、平の宮のはじめつがた、次に寛平の末までのうたをのせたるよし、眞淵いへり）さて文公卿の袍のもやう調度の蒔繪に、藻はによひらの花形をうつし、且は四條家のめじるしの紋形も、よひらの花なれば、花かつみといへるよしにて田字草ことおしあてたる說あり、げにもさるべけれど、うきぐさの水におひたるを、いにしへに咲とよみたる例のありしにや、われ

袍の文藻花かつみを圖がく此文藻は土佐光長が畫ける年中行事の繪にあり

はいまだしらず、猶古學に老たる人にたづねん

○蔣をかつみといひそめしは蓋し長明が無名抄、能因が歌枕などより書にのせたるなるべし、其前にはみゑ事なし。石間集、弁内侍日記に「かつみおふるあさかの沼もまだしらでふかくあやめとおもひけるかな」これ今いふマコモをよめると明か也、陸奥國にて今もマコモをカツミ、また或はカツキといふといへり、越後國にてはガツボといひ、美濃國にてはカツコといふこといへり

○藻をかつみといへるは、公卿の像の袍の文藻の葉に四瓣の花紋あり、これまさに柳葉藻と田字草なるべし、其寫しは今佐吉慶舟が家に藏したりとぞ、蓋しこの文藻よりモカツミの名は後に唱へたるにや、いさしもふるく物にみえたるにや、われはいまだしらず。また土佐光長の畵たる年中行事の繪にも、四瓣の花形に藻を取合たるあり（圖は圖彙中に有）近來この形を錦綾に織なして、これを花がつみと呼なせるは、蓋し好事の人のおしあてなるべし

○田字草をいふは、蓋し藻カツミの文藻の形にこの草の葉ひらに似たればいひそめるか、下總國　郡布施沼のわたりにてカツモといふも鄙ことばにカツミの訛り轉りしなるべし、ふるくよ

圃玉かつま四の巻云白氏文集牡丹芳とい

りかくいへるには非ずなん。さて四條家のめじるしに四辨の花形あり。これかつみなるよし、いにしへ公卿の服の文藻にもよしありて、それこも決むべけれど、かの文藻をふゝくにハナガツミとしるしたる明證あらまほしきなり

○四辨のかきつばたをいふは、陸奥國人藤岡某其著ありて木にゑりたり。蓋いにしへに因ある說か、われはいまだそのいづゐ所をしらず

はまつゞら　萬葉卷十四に、駿河の海於思敝爾於布流波麻都豆良とよみたり、濱べにおふるつゞらならんこいへり、また或は馬鞭草也といへれど、この草は原野におほく濱べにはまれなりけり

はたずゝき　すゝきの條にしるしたり

はなずゝき　同上

はつかぐさ　牡丹とよみたり、藤原忠道の歌を清輔朝臣袋草紙に「咲しよりちりはつるまでみしほごに花のもごにてはつかへにけり」白居易の詩に、牡丹開落二十日と云句によりてよみたりといへり

ふ詩に花開花落二十日とあるよりつけたる名なるべし
夫木集に、里人や若なつむらんにたつもり深山も今は春めきにけり
按云、深山刊本外山トアリ

はたつもり　六帖に「我戀はみ山におふるはたつもりつもりにけらしあふよしもなし」新六帖の題に令法と書たり、歌に「はたつもりつもりし雪も消ぬれば賤がすさみに若菜つむらん」今能登國人は春の末より夏かけてりやうぶこいへる木の芽をつみとり、ゆびきさらし乾貯て襲炊の糧(カテ)に賦(アテ)けるとぞ、按に安藝國人りやうぶといへる木の芽を糧に用ひしをみるに、日向國人のつきでといへるものにして、江戸の俗稱にはなゆかだこいへるものなり。近來唐山人は掌蓮と呼也、或は救荒本草に載たる山茶科をりやうぶといへり、此説いかゞ。さて令法とはもと田穀をおろしける其分量の名目也、田人(タミ)の辭にこれを畠賦(ハタツモリ)といへり、されば新六帖に、令法と書てはたつもりとよみたり、げに理義也。また糧賦の字音と令法の音便と通じたるこゝろあるべし。猶よく後にたづねん

はひまゆみ　順抄に、杜仲を注したり。今はソマユミ、ハマヽユミ、ヒメマユミ、カミソリマユミ、オニマユミなどあり。さて今いふマユミは弓材に充つべきか、覺束なし、いにしへ槻弓にむかへてよみたれば、今の柔木とはことなるべし。まゆみの條みつべし。凡杜仲のたぐひに延蔓(ヘフ)ものなし、されば杜仲にハヒといへる詞をかうむらせしは、必ず蓋しは杜仲に似て延蔓せし木

閑藏玉「大内や西雲山にはつよ草いくとせ人になイふれてたつらん」

閑藏玉「一年ごとにみどりの色も初見草かはらぬ色のそにやめづらん

閑藏玉

を、古人誤て杜仲とおもひたがへるなるべし

はみつばき　莫傳抄に、かしはの葉之といへり、葉見滑木の義にや〔二閑藏玉〕

はつよぐさ　莫傳抄に正月三日大内にてうゝる門松之といへり

はつみぐさ　莫傳抄に松之といへり、また卯の花とも萩とも菊之ともいへり、藏玉おなじ

はつなぐさ　莫傳抄に、冬梅之といへり

はるずゝき　藏玉集に柳之といへり

はなかうじ　花柑子也、夫木集、慈鎮和尚「この程はいせにしる人音づれて便り色あるはなかうじかな」

はたおりめ　きりぐ〳〵すの條にあはせしるす

はなちどり　万葉卷二に、日並皇子尊殯宮の時舍人等慟傷作歌に「島の宮池のうへなる放鳥あらひなゆきそ君まさずとも」また六帖の「はなちどりゆくゑもしらずなりぬればはなれしとぞくやしかりける」

はなみどり　藏玉集に鶯之といへり

「ふる雨の露に亂るるはそすゝきこずゑに秋のかせを見るかな」柳トイヘリ

輔仁和名には、天名精和名波末多加奈、一名波末布久●佐久と注したり 陵云、刋本久ノ下、良アリ

はまたかな　順抄に、本草を引て、葶藶子、注に和名波末太加奈、一云阿之奈豆奈、又云、波末世里。今按に武藏國茬原郡、下總國葛飾郡等の麥圃の中、麥と同じく生じ麥と同じく枯るゝ草にオホナヅナといへるものあり、薺の稍大にして花謝して莢を結ぶとに　葶藶枯中夏、また禮の月令に四月靡草薺死、鄭玄注に、薺は葶藶類、これこゝにいふオホナヅナと

はまあかな　輔仁和名に、茈胡を注したり

はますかな　輔仁和名に、防風、和名波末須加奈、一名波末尓加奈と注したり

〔○以下六行並次頁白丁〕

はちすのはひ　字鏡、順抄并に藕を注したり、卽藕蔤之、はちすの條を見るべし

はなたちばな　花橘之、崇神紀に、かくはし波那多知波那とよみたり、記にもみえたり、たちばなの條にしるしたり

はまぐりがひ　桑家漢語抄に、濱栗と注したり、卽文蛤也、由家集に「今ぞしるふたみの浦のはまぐりをかひあはせとておほふえけり」

〔○以下二行並次頁白丁〕

はびろくまがし　記にみえたり、鐵櫧なるべし

〔○以下九行并次頁白丁〕

はびろゆつばつばき　記にみえたり、山茶を讃へていふなるべし、即葉廣嚴葉山茶也

〔○以下八行非表資白了〕

比行

ひ　記に檜をよみたり、繼體紀に莽紀さく避のいたど、万葉卷一に、眞木佐菩檜の嬬手とよみたり、眞は即眞秀の義之。こゝに眞木、また檜とつゞけたるは、今いふヒノキなるべし、嬬手といへるは、杣人の木造せし木をいふといへり。その製造れる柏の材なり、嬬をツマギといへるも同じこゝろ之。また紀に、檜者可以爲瑞宮之材ともみえたれば、こゝにいふ檜は漢土にいふ柏之。檜も柏も相近けれど、わがいにしへに今のヒノキを檜といへり。さて記紀ともに柏をカシハとよみたるをおもふに、ヒノキの正名にて、これを本として諸木の葉をいへり、即堅葉また食敷葉といふ義も一木の稱にはあらず、倘つばらにかしはの條にしるしたり

ひえ　紀記幷に稗をよみたり、字鏡、順抄にもまた稗を註したり、凡上世は類をもて物に命ず、故に名はおなじくして品のことなるあり、猶稊を糯米とせしが如く也。ヒエは稗子也、稗は

今のノビエ之。今これにむかへて䅘をマビエといふ、マビエの外に龍爪粟、鴨爪稗等あり、正字通、また救荒本草、東壁食物本草などに弁じたり。また稗にも早稗、水䅘の別あり、万葉卷十二に、上に種蒔比要こよみて、ヒエは高燥の地によろしきゆゑに、山野の材木を燎夷て、その木灰を肥こして䅘子を播すゑ。字鏡にいふ不耕而種を燒蒔とも荒蒔こもいふ、日向諸縣郡以北肥後五家の莊に至ては連山波濤にひとしく、絶險狹隘にして稻田をつくるによしなく、樵牧時を知りて、前にいふ燒蒔を業とせり、土俗これを木場稗といふ、卽木灰䅘なるべし。按に張淏が雲溪雜記に云、沅湘間多ニ山農一家惟植レ粟、且多在ニ岡阜一每欲レ布レ種時則先伐ニ其材木一縱レ火焚レ之、俟ニ其成ヲ灰卽種ニ于其間一、如レ是則所レ收必倍、蓋史所レ謂刀耕火種也。これ寒鄕瘠土の地、人智の施す所、和漢一轍にいづるがごとし

ひる　記に蒜をよみたり、万葉卷十六にも、醬酢蒜都伎合而とよみたり、齊明紀に、靑蒜あり、式に蒜英合漬あり。大蒜はオホヒル、小蒜はコヒル、またメヒル、獨子蒜はヒトツヒル、澤蒜はネヒルなり。源氏に極熱のさう薬とあるは六日ひるのことなり。圖澤蒜賦役令

○水蛭を注したるは順抄にみえたり、馬蛭、一名馬蟥を無末比流、草蛭を加佐比流と注した

按云、云以下「白小、魚名也」ト刊本アリ

り。草蛭のやゝ大にして、樹上にありて金線文あるもの俗にカウガイビルといふ、是段柯古が雜狙に載たる度古なり。また泥蛭あり、山谷の池沼に生じて粗大也。また石蛭あり、堅くして小也。羅願が尓雅翼に載たる蠣蟆也

○蛾をいふは俗語也、本名はヒヾル也

ひし　應神紀に、かはまたえの比辭餓羅ごよみたり、菱殼也。万葉卷七に、浮沼池菱採、卷十六に、菱のうれごよみたり。四角ノ爲レ菱兩角爲レ蔆、々また薩にもつくる

ひゆ　順抄に、莧を注したり、艸冷の義にや。大氐五色あり、本草諸書にも載たり、雁來紅また莧の類にして五色莧といへり、藜はアカザ之、またヒユの類なれば灰條莧ともいへり

ひを　字鏡に氷魚をよみたり、順抄に、鮊を注して云、俗云二氷魚一云々、小白魚名也、似二鮊魚一長一二寸者とみえたり、今云シラス、トロメなどの類なるべし、式に比佐魚一斗五升とあるもこれなるべし。また式に、近江御贄に氷魚あり、万葉卷十六にも氷魚をよみたり。按にヒヲは小魚の通稱之、ヒメ、ヒナ皆細をヒといふ之。新六帖に「ひをのよるあふみの海も風さえぬたなかみ川や網代うつらん」

ひつ　式に氷頭合作あり、これ魚頭脆軟骨之、鯨のカブラボネといふも軟骨なり

ひめ　順抄に、切韻を引て、鳹を注したり。鳹、音黔、又音琴、白喙鳥也。下學集にヒワといへり、また伊豫風土記には、鳹をヒメトリとよみたり、抄にはイカルガと注したり、或はいふ、風土記のヒメは抄の鵤にしてシメなりといへり、いかゞ、尙其國人にたづねん

ひは　順抄に、枇杷、注に琵琶二音、此間云味把　〔○以下六行余白〕

ひさこ　記に、瓠をよみたり、用明紀に束髪於額とみえたり、いにしへの俗に、小兒とし十五六までの間は髪を額に束、十七八間は分て角子と爲といへり。さて束髪をヒサコバナとよみたるは、瓠の花に似たる故なるべしといへり

ひしき　順抄に、鹿尾菜を注したり、いせ物語にヒジキモとよみたり

ひかげ　記に、日影、神代紀に蘿、注に此云比舸礙、記には蘿をコケとよみたり、ヒカゲは女蘿之、ひかげのかづらの條をむかへみるべし。古語拾遺に蘿、葛、比可氣とよみたり

ひつち　順抄に、穭を注したり、おろかおひの條見つべし

ひのき　すでにひの條にしるしたり

補　夫木集に師光百數に

ひさき　年山紀聞に云、御釋に云（義公釋万葉集ありと聞つ、其中の御釋なるべし）久木は、ひさしき木にて、老木の義なり、楸にはあらず、万葉第十に、梅櫻をよめる間に「去年咲し久木今咲いたづらにつちにやおちんみる人なしに」といふ歌の挾(ハサマ)れたるは、梅櫻の内をよめるなり、また十一に「浪間よりみゆる小島の濱久木ひさしくなりぬ」とよめるも楸なりともおもはれず、皆久木とのみ書て久しくとつゞけたり、代匠記おなじ。眞淵が万葉百首解にはアカメガシハの楸となせり、これ古きまゝに順抄によるならん、いづれもよきによるべし。槃おもふに、楸には咲といふべき花なし

ひむし　仁徳紀に、夏虫の火虫の衣ふたへきてとよみ、また万葉巻九に、夏虫の入火之如ともよみたり、こは孟郊詩にいふ瑞蛾、また陳中師がいふ燈蛾なり

ひゝる　持統紀に、白蛾をよみたり。順抄に、蛾を注したり。蛾蠶作飛虫也、また蛹をもよみたり、蛹は蠒内老蠶也、とみえたり、今の俗はなべてヒルといへり

ひたき　清記にみえたり。この鳥今はルリヒタキ、キヒタキ、ヤマヒタキなどの屬あり

○ひばり　記に、比婆理と書たれば婆は濁音之。万葉巻十九、家持の歌の題に、鶬鶊と書た

すみかさだめよひたきどりなれがやどりも庭にみゆめり

り、歌にも記にもかく書たり、卷二十にも、安我流比婆理こよみたり、順抄に、崔禹錫食經を引て、雲雀、一名鶬鷵と有、按に丹方に、雲雀、禹錫云、貌似雀而大、是鳥春夏在レ陽、秋冬在レ陰、陽時善鳴、陰時不鳴、吸陰氣而登天、含陽氣而下地、翔於雲陽而咽氣、故以名之、其音密々然似人矢箭注に、和名比波利、これ爾雅に載たる鷚天鷚ナリといへるもの也、鄭樵が昆虫略に云、俗呼二告天一後世に告天子、叫天兒などいふ名もあり、世おほくこの名を呼べり、雲雀をわが國の稱とおもへるはたがへり、卽漢土の古名なるを

ひよこ　雛をいへり。またヒ、ナともみえたり、清記に、鷄のひなの、ひよ〳〵こかしがましく鳴と書きたり

ひすい　翡翠の字音也。源氏椎が本の卷に、いろなりこかいふひすひだちてと書たり、契沖が說に、るりいろを書誤りたるにや、順抄に、尓雅集注を引て云、鴗ハ小鳥之、色青翠而食レ魚、江東呼爲水狗（當狗誤）注に、和名曾比、私記用二此字一、文德實錄に魚虎鳥三字を用ひたり、今按、魚虎見兼名苑等、舊事記には、翠鳥とも書たり、俗にはソミドリともソニともいへり、埃囊抄にセウビとみえたり、深山の溪澗などにあるをミヤマセウビともヤマセミともいふ、セミはセウビの

約るゝ。この鳥は渚さきなどにありて、魚を捕ものゝ。川にあるをカハセミこいふ、これは魚狗ゝ

ひくれ　式に、榑をよみたり、榑、音轉、正字通に、楚人謂圍爲レ榑、楚辭九章注枝剡棘圍貝棟分、是柏材のまろきをいふゝ、今も凡て圓材をクレギこいふゝ、さて木の直理をうるにはクレキを十字に裂て、それよりまた車輻の如くに裂ものゝ、これクレギの用なり

ひづめ　順抄に、蹄を註したり、音提國日蹄日甲、甲和名豆米　〔○以下五行並次頁白丁〕

ひめゆり　万葉巻八に、夏野の繁見に開ける姬ゆ理の、とよみたるは今の山丹百合なるべし

ひこばえ　字鏡に蘖再生と注したり、順抄に、蘖を注したり、蘖はまさに糵の誤也。蘖或は蘗に作るもまた誤也。ヒコは曾孫をヒゞコこいふが如し、ハエは生ゝ。また杪の字もヒコエこよみたり、字鏡に、木の細枝こ注したり、その杪の小なるをいふゝ。さて蘖再生をいへるも、万木の蘖生よりいでたる名ゝ。再生稻は廣韻にいふ孫稻也。新古今集、曾根好忠「あら小田の去年のふる根のふる蓬今は春べとひこばえにけり」これ草にもいへり。また前漢天文志に、闔中蒲ニ桑楡蘖生一春レ保禾野生日レ旅

袖中抄云、ひじき物云云六味菜云々世俗ニハひしきといふ是ゝ

ひすきも　順抄に、鹿尾菜を注したり、いせ物語四ヒジキモと書たり。干杉藻の義なるべしといへるはいぶかし。是閑書に載たる羊栖菜なるべし

ひえぐさ　新六帖に「穂にいづる夏田にまじるひえぐさのひきすてられて世をやすぐさん」これ莠の類にして狗尾草なるべし

ひるがほ　藻塩草に旋花をよみたり、輔仁本草に旋花を波也比止久佐と注したり、はじめ隼人國よりいでにしにや、凡てあだし國より來れる草木にエビスの名を負る如し。さて晝顏の名は後に出しにや、古き歌にもまた後の歌見る所なし

ひゝらぎ　記に比々羅木、字鏡、續紀并に杠谷樹をよみたり。順抄、木類に本草云、黃芩、注に和名比々良木、漢語抄云、杠谷樹、注に杠音江、和名同上、一云巴戟天草類に亦出してヤマヒヽラギと注し　おもふに記のヒヽラギは即杠谷樹にして狗骨なるべし。游清云、按るに古言に疼、響、疹　脗などいふは今の俗にヒリ〵イタム、ヒリツクなどいふと同じく、かなたこなたヒヽキイタムをいふ、杠谷樹の葉はかど〵しき物にて、心もなく手などふるれば、針如刺の人をふさして、いこく〵動痛ゆゑに、かくは名付しなるべし、蕁麻をイラクサともイタ〵グサともいふと同じ

例なり、是も薬に刺有て、人をさすゆゑに此名あり。字鏡に蛆をイラムシといふも、今の毛虫にて、此毛にふるればいとくヒヽラキて堪がたき物ぞ。是らにてヒヽラギの名義をさとるべし

びらうげ　桃花蘂葉に檳榔毛輿と書たり。このビラウゲてふものは、いにしへより日向國檳榔島に産せる蒲葵葉なり（檳榔島今はビラウ島といふ）今も侍進御の用となりぬ、またその島のわたり志布志といへる地にて造れる蒲葵團扇をも今にビロウウチハといふぞ。續紀天宗高紹天皇八年、渤海使加附檳榔扇といへるも、こゝにいふ蒲葵扇なるべし。さて蘂葉にいへる檳榔毛はまさしく蒲葵なるを、檳榔とせしは、はやく蒲葵のおふる島を訛て檳榔島と名ぜしぞ、そはいにしへ蒲葵てふもの、いまだつばらならねば檳榔と思ひまがへるなり、式に檳榔馬蓑としるしたるも、また蒲葵なるべし

ひをむし　順抄に、唐韻を引て、蜏、朝生暮死虫也。注に云、比乎無之、ヒヲは日終の義なりといへり。このむしあしたになりて、ゆふべにうせけるものなればいふといへり。また氷魚虫の義ともいへり。源氏橋姫の巻に、ひをむしにあらそふこゝろにてと書たり、八雲御抄

に、夕べに軒などにみだれとぶものと、夕ぐれに命かけたるといふもおなじといへり。按に、伊豆國人いふ、春より夏かけてうら〳〵なる日に、河のほとりに朝日に、霞のやうに聚にむれいでける小虫と。形は蚊子のやゝおほいなるが、色は水紅にしていとうつくしく、あしたにいづるものなれば土俗らは朝良とも、かげろふともいふ。ゆふべにはいづちにかきえうせけりといへり。されば日々におはる虫なるや。春曙抄に、かげろふとおなじ物にやといへるはあらじ。淮南道應訓高誘注に、朝菌朝生暮死之虫也、生ニ水上一狀似ニ蠶蛾一一名慈母、海南謂ニ之虫邪一、また尓雅翼に、今水上有レ虫羽甚整、白露節後即群浮ニ水上一隨レ水而去以千百許宛陵人謂之白露虫、これまた朝菌のたぐひなり、其の俗に蜉蝣といへるものをヒヨムシとなせしもまたたがへり

ひきまゆ　順抄に、獨蠒を注したり

ひぐらし　万葉卷十に、日倉足はこきとしなけど、また同卷に、芽子花さきたるのべに日晩の鳴、とよみたれば晩蟬也、即茅蜩、順抄にも尓雅の注を引て比久良之と注したり。新六帖「夕日影秋とおぼゆる深山邊の梢さびしき日ぐらしの聲」

ひなこり　六帖に、業平のうたこて「ひなとりのかたきりよわみこはれぬはすごもりながらねをのみぞなく」この歌によれば雛鳥なり

ひえどり　游湔云、順抄に云、崔禹錫食經云、鵯〔音卑一音匹、和名比衣土里〕貌似鳥而色蒼白者也。尓雅集注云、鵯一名鴨鶋〔匹居二音〕土御門院百首御歌に「籠の中にまだすみなれぬひえ鳥は心なくても世を過すかな」源仲正家集に「むれてゐる春ひえ鳥の水はみに枝ふみたるゝきしの山吹」是今世いふヒヨドリなるべし、ヒエ、ヒヨ同音にて移り來し之。今その鳴を聞にヒイヨ〳〵こいと長く聲を引て鳴之、ヒエの名は是より負し事いちじるし。また漢字の義を考るに、是も鳴聲によりて卑字に鳥をそへて鵯こは作り出し之。或人本字は䳺也といへり、〔しか有ても言は同じ〕鴨鶋も同じ、和漢通名鷦、鷯、蝦蟆などゝ同例也。槃按に、尓雅に譽鴨鶋、注に鴉烏也、小而多群、腹下白、江東亦呼爲鴨烏、疏に不反哺者謂之鴉烏、說文字苑林皆云楚烏是也。また說文に楚烏一名譽、一名卑居、秦謂之雅、々音鵶、これ鴉こおなじ、詩の小弁に弁彼譽斯、朱傳亦郭註によるこ、楊子に頻々之黨甚於譽斯これ亦卑居也、卑居は卽譽にして鴉なることを聞かえ。郭注によりてこれをいはゞ斯分の俗に云ミヤマガラス一名菲塢鳥の屬之、今云ヒヨドリこ鴨鶋こは正に別物之

囲古事記神武の巻歌に知佐加紀徴能といへるも是之、

ひさかき　順抄に、柃を註したり、眞サカキにむかへて非サカキといふなるべし、ムロありてヒムロあるがごとし。ヒの本義は傍なるべし、傍をヒとよむはフヒの略也こいへり、此木を灰こなして染用に入、はひの條をむかへみつべし

と傳に云り、田中道麿云、今近江彦根のあたりにてチサカキと云木あり、尾張にてはシラシヤケ、美濃にてはビシヤカキと云り、又伊勢にてはミサカキともビシヤコともいふ、加賀にてはチシヤカケといふ、黑く小き實の甚多くなる木之、是に大小二種ありて、實の多きは大なる方なり、小きはいと低くむらがり生て、春の若葉の色いと赤し、順抄に柃字を當たるは未詳

補

校云、いろいろにて、刊本いろへてニ作ル

ひねずみ　順抄云、神異記曰、火鼠、和名比爾須三、取其毛織爲布、若汚以火燒之、更令清潔矣。竹取物語云、今ひさりはもろこしにあなる火ねずみのかはごろもをたまへ中略此かは衣をいれたる箱をみれば、くさぐのうるはしきるりをいろいろにてつくれり、かは衣をみれば、こんじやうの色之。けのすゑにはこがねの光しかゞやきたり、寶とみえ、うるはしきことたとふべき物なし、火にやけぬことよりも、けうらなる事かぎりなしと云云

補　校云、本草和名ハ比岐佐久良ニ作ル

ひざくら　六帖「あづさ弓春の山べにけぶり立もゆともみえぬひざくらの花」或云、輔仁和名、燕夷をひさくらと注したり、疑は是ならんか　〔○以下六行余白〕

ひつじぐさ　順抄に、白鮮を注したり、白羊鮮ともいへればなり本ノマヽ

ひとよぐさ　莫傳抄に、すみれなりといへり、万葉巻八、人麻呂「春の野にすみれつみにとこし吾ぞ野をなつかしみひとよねにけり」とよみたる詞をとりて名とせしならん

ひとりぐさ　莫傳抄に、つゝじ之といへり、また鶯のとびかゝりたる草ともいへり

ひむろぐさ　莫傳抄に、蘆也といへり

ひこはぐさ　莫傳抄に、すみれ之といへり

ひさきぐさ　莫傳抄に、松也といへり

ひさみぐさ　莫傳抄に、松也といへり

ひさまぐさ　藏玉集に、松之といへり

ひろみぐさ　藏玉集に、櫻之といへり、ヒロミは尋見之

ひかりぐさ　藏玉集に、螢のやどるくさ、火借の義之、姫百合之ともいへり、光の義之

ひめなごり　秘藏抄に、鷊ゝといへり

ひらぶがひ　記に、比良夫貝こみえたり、平介(タヒラキ)とおもひしに、武藏本牧の濱にヒラブ介こいへるものあり、その殼いと薄く、細理ありて、うすぐろき色ゝといへり、されば記にいへるはこれなるにや、尙考ふべし

ひきよもぎ　輔仁和名に、菴藘子を注したり、はゝこの條むかへみるべし

〔○以下六行幷ニ次頁白丁〕

ひかげかづら　記にいふ日影なるべし、万葉卷〔○十九〕に「足引の山下日影かづらげるうへにや更に梅を慕(シヌ)ばん」順抄に、唐韻を引て、蘿は女蘿也。私記に、ヒカゲといふと注せり。神代紀にも比舸礙と注したり、謝肇淛が文海披抄に、樹衣といへるこれ也、ひかげの條みるべし

ひぐらしくさ　藏玉集に、撫子ゝといへり

ひしこいわし　式また順抄幷に鯷魚をよみたり

ひきさくら　輔仁和名に蕪夷を注したり

ふち　万葉巻十に、藤者散去而、巻三に、藤波（ナミ）の花は盛に成にき。順抄に、藤を布知と注したり、紀に藤花とも布潤葛ともよみて、抄の知も紀の遅も皆清音なるを明かなり、後世には濁音によめれば、久老いはく、藤のチは必清（スム）べきにやとおぼしきことあり、古今集に、わが宿の池の藤浪とあるも、淵に通はしたるつゞけなるに、御撰集にも「かぎりなき名におふ藤の花なればそこひもしらぬ色のふかさは」後拾遺、春下、つらゆき「棹させど深さもしらぬふちなれど色をば人のしらじとぞおもふ」こあり、土佐國にては、今猶ふちのちは清むとぞ、其國人いへり

校云、吉魚をフナと訓しは誤にてコナなり

ふな　順抄に、鮒魚を注したり、万葉巻十に、吉魚をよみたり、巻四（三十五ウ、おきへ行へに〔〇脱〕今やいもが爲わがすなどれるもふし東鮒）に藻（モ）臥束鮒（フシツカ）ともよみたり、履中紀に、鯽魚磯別王あり、仁賢紀に、鯽魚女あり、鯽こゝにフナとよみたり。按に鯽は鰿之、鰿は即鯽也、音迹。またシブナあり、小にして色黄也、食療本草にいふ鰤魚也

ふき　款冬をいへり、次のふゝきの條にしるしたり

ふゝき　古くは蕗をいへり、今は款冬をもいへり、さるを世の歌人、万葉の山吹の花とおもひまがひて改ることなきは、順抄の例をわすれてよみ誤たるなり。例の略は凡例にしるしたり、蕗は款冬の園生なり、ゆゑに抄にも園菜部に收めて和名不々木と注し、款冬は蕗の野生なれば草部に入て、和名夜末不々木、一名夜末不木と注したり。式に蕗を布木とよみたるも共に不々木の約にて、けだし當時の俗名なるか、これ一物なれど家園と山野のふたつを分たること明かなり、ヤマブキを今のツハブキと決(キハメ)たるあり、もしツハブキは抄にいへる款冬ならんには、蕗も即園生のツハブキなるべきを、いにしへよりツハブキを培養して菜蔬となせしためしをしらず、またおもひたらざる說なり、ツハブキは款冬の葉に似て、葉に艶(ツヤ)あるものなれば、それが名をかりたるなり。その草の性は更に別物(コトモノ)なり、ツハブキは史游急就篇に載たる槖吾なり、牛蒡をウマフキ、芡をミヅフキなどいへるも、その葉の醜(タクヒ)せるをもていふなり。契沖が和字正濫に、字書に蕗字なしといへるは誤なり。正字通に、蕗、音魯、香草也。別錄に、甘草、一名蕗草、楚辭七諫に菎蕗雜于廏蒸、契沖の博洽たま〳〵これをわすれたるなり

ふとゐ　順抄に莞を注せしは於保爲の俗名之、今仙臺より編ていだせる大藺席(オホヰムシロ)これ之、世あやまりて是を十府乃菅薦と唱へり、今の俗にマルスゲこいふ。升菴丹鉛錄云、水葱生二水中一如レ葱而中空、又名翠管、王維詩水驚波分翠管靡是也、此草可レ爲レ席。唐六典東牟郡歲貢水葱席六領、救荒本草にも亦水葱を載たり、卽この種なり。我にいふ水葱はナギにて和漢同名にして物こと之

ふぢな　順抄に、蒲公草を注したり、この花鼓槌の形(カタチ)に似たれば、名こせるならん、今はタンホヽこいへり、卽蒲公英也

ふゝき　順抄に、黑貂を注したり。源氏末摘花の卷に、うはぎにふゝきのかはぎぬをいときよらかにかうばしきを着給へり、と書たり。抄に、拾遺を引て、中宮安子 ふゝきのかはぎぬを高光少將入道橫川にすみけるに遣しける歌に「夏なれど山は寒しこいふなればこのかはぎぬは風をふせがむ」

ふみて　順抄に、筆を注したり。またフンデともいへり、文書(フミ)の手(テ)之といへり、いかゞ

ふかつみ　順抄に、石龍芮を注したり、式も字鏡もおなじ。按にフカは深(フケ)也、天武紀に深田を

不觸多とよみたり、ツミは柘之、抄に柘を豆美と注したり、この草喜て埿田におひて實の樣は柘の實に似たればいふなるべし、本草經、石龍芮、一名地椹、椹は卽桑也、柘もヤマグハなれば、その義和漢おなじ、今の俗にタヽラヒといへり、タヽラヒはタヽラメの誤也。その義はたゝらめの條にしるしたり

ふちのき　万葉卷十六に、葛英に延おほと禮流屎葛とよみたり、葛英の英は莢の字の誤りなるべし、されば皀莢樹なるべし、皀莢の樹今はカハラフヂともいへり

ふとむぎ　順抄に、大麥を注したり

ふきくさ　藏玉集に、菖蒲也といへり

ふすたけ　ふせたけともみえたり、伏竹也、弓の名之。賴政家集に「おもはばや手ならす弓にふす竹のひとより君にはなるべしとは」また夫木集に知家「梓弓すゑまでしらずふせ竹のはなれがたきもちぎる中かな」さて竹を弓に伏しは陸奧國前九年の戰の比にやつくりそめたりけん、今も其の國人はその故物を藏たる家あり、われその半折をえて親しくみるに、表に竹をふせたると、俗人はこれを十万弓といへり、秀衡の武備にふけりてつくり給へると

いへり。その竹は栗原郡末野村におひたるを伐て十万張を設たりとぞ。今十万坂といへる地名もその緣といへり。また同郡金城村金田八幡宮にもその弓を藏たり、その傳記には、むかし賴義朝臣の造給へる十万弓なりとしるしたり

ふくろふ　字鏡、順抄幷に梟を注したり、陳正敏が遯齋閑覽に、謂レ鵩爲レ梟とみえたり、鵩か即伯勞なればフクロフは伯勞の轉音にやとある人いへり

ふゝごり　順抄に布穀鳥を注したり、今俗にカコドリまたカツカウドリともいへり

ふくろう　補

源氏物語夕顔の卷に、けしきある鳥のから聲になきたるもふくろうはこれにやとおぼゆ云云西行集に「山ふかみけぢかき鳥の音はせでものおそろしきふくろふの聲」　〔○以下數行余白〕

ふかみぐさ　丹方、輔仁和名幷に牡丹を注したり、式また順抄おなじ。奥義抄に「ふかみぐさ庭にしげれる花の香をわれかきてへようけもちの神」また年山記聞に、實業卿の牡丹の序幷に短歌あり、その歌に「ふかみぐさちひろの竹の園圃には花も世に似ぬ色香みすらし」さて他の國にては漢の時に牡丹を木芍藥といひ、蓋しはじめて北齊にいたりて牡丹と稱し、

校云、われかきて圀安刊本いへよ

きてニ作ル

その花を畫しこと通雅且雜俎等にみえたり。詩に詠しははじめて謝康樂にやとおぼゆ、其詩に簡水際牡丹多。たゞ醫方に於てははやく後漢の時にやいでけん、本草經に載たり。歐陽永叔が序に、牡丹初於花中不爲高弟褒斜道中與荊棘無異土人採以爲薪、この說奇之、地勢によりてはさるともあらん、唐則天已後洛陽牡丹始盛といへり

ふちばかま　順抄に、兼名苑を引て、蘭、注に、和名本草云、布知波賀萬、新撰万葉集別用藤袴二字。源氏藤袴の巻にも、おなじ野の露にやつるゝとよみたり、あらゝぎの條をむかへみつべし。允恭紀に、採二一根蘭一擬レ蠛。大膳式に干蘭あり、楚辭九哥に澧有蘭、是蓋しこのフチバカマなるべし

○菊をよみたるは、きくの條に記したり

ふしよぐさ　莫傳抄に、すゝきえといへり

ふたばぐさ　莫傳抄に、すみれえといへり。また御蔭山に生るアフヒグサをいふといへる說あり、御蔭山は諸葉草のいづればこそ御坐とも二葉とも山の名に負へれば、その草はもとより二葉づゝ相値て萌いでければ、二葉草といへり。家隆卿「ちはやふる神代をかけてあふ

ひ草君に二葉の影やそふらん」また類題に、雅世「玉くしげ二葉のあふひ明日よりや残るみあれの山の下ぐさ」などよみて、うちつけに二葉草とよみたるはいまだみず、されど世々の撰集のおほきが中には有つらん

ふくきぐさ　莫傳抄に、あやめをいへり

ふたきぐさ　莫傳抄に、ふぢをいへり

ふみゝぐさ　藏玉集に、荻をいへり

ふるえぐさ　藏玉集に、萩をいへり

ふするこり　藏玉集に、猪をいへり

ふたごもり　万葉卷　に「ひとつまゆにかくふたごもりせまほしみくはこきたれてなくをみせばや」奥儀抄に云、ふたごもりとはおなじまゆに蚕のふたつこもれるをいふと

ふたまかみ　順抄に、蘇敬本草の注を引て、杜蘅、一名馬蹄香、注に、和名布太末賀三、一云豆布禰久佐。槃按に、杜衡、細辛はいにしへ蓋し一物なり、尓雅釋草に、杜、土鹵。注に、杜衡也、似葵而香。疏に、香草也。西山經に、天帝之山有草焉、其狀如葵、其臭如靡蕪、名杜衡。離

騷に、雜三杜衡與二芳芷一冀二枝葉之峻茂一兮、願竢レ時乎吾將レ刈。藝文類聚巻八十一に、本草經を引て、杜若一名杜衡、唐本注に云、杜衡葉似葵形如馬蹄、故云馬蹄香（草に葵といふものは本草經に載せる冬葵なり）杜衡は卽香草にして、其苗葉をいふ。また按に、山海經に、浮戯云多少辛、管子に、丘沃之山群藥生少辛是矣。本草にこれを細辛といふは其根纖細にして味辛きがゆゑに名とせしなり。淮南子に杜衡亂細辛といふもけだし其葉の正に相おなじければなり。今こゝに此二草ともにあり、其香各となり、所云杜衡細辛は古今二種なると異なし。さて予が臆をもておもひよするに、杜衡は元是香草の名なるを明なり、芳香なきは杜衡にあらず、葉の形ち馬蹄に似て香氣あるは卽今いふ細辛なり。また細辛に似て其氣辛臭なるものあり、今これを杜衡といふは、古經の說にかなはず。いにしへ名物を論ずるものに其花葉の韻致を詳にして比興の意を釋するを旨とす、醫家にありても其氣味効用を宗となせば、名物の學とは相反せしなり。因て彼と是とをおもひ合するに、葉の馬蹄に似て香あるは、卽いにしへ經史に所云杜衡也。其根は醫に所云細辛なり、其根苗名をことにすといへども實は一物なるべし。今人所云杜衡は一種の草にして、傍なるものならずや。夫名物をいふものは主療の事に及ばず、主療を業とせしも

のは恐く比興の意を詳にせざれば、或は一物別れて二名となるもなしといふべからず

〔〇八行余白〕

ふたごせぐさ　大麥なりといへり。田家の哥に「しづが蒔ふたごせぐさのひたり巻さ月の頃はにぎ合にけり」麥の穂は左にまつひて胎るゝが、さ月にはその穂房のしまり合とをいふなるべし

佛法僧　新六帖に光俊「松の尾の山しづかなる明ぼのにあふぎて聞ば佛法僧鳴」又正治百首に、慈鎮「我國はみのりの道のひろければ鳥もとなふる佛法僧かな」猶よぶこどりの條見るべし　〔〇次頁白丁〕

反行

べに　順抄に、釋名を引て云、經粉、經赤也、染使赤所以著頰也、今按經即赬也。注に、和名閉仁。源氏末摘花の巻に、女を書給ひて、はなにべにつけてと、また常夏の巻にも、べにといふものと書たり。今は紅藍花を釀して造れるものゝみ、いにしへいへる赬粉は今の臙脂とも

おもはれず、いまだ古き造法を聞しえず、醫方中に於ては魏峴が家藏方に坯子散あり、その方中に乾燕脂を用ふ。按に郭子章が稀痘方論に、乾燕脂乃洗花匠舖内紅膏子對菉豆粉成坯者也。釋名にいへる頳粉けだしこの類にや、こゝにも畫彩鄒中に延紫こ號せるものあり、一種の紅紫色なるものを蚌粉に和調へて錠こなせしものあり。また坯子燕脂の類なり。これらはいにしへの頳粉の造方にや。さて他の國にて茜、また蘇木にて燕脂をかもしこるとあり、こゝにては近來より雁來紅の葉をかもして紅を造るこいへり

へみ　順抄に椐を注したり、是靈壽杖えこいへり。按るに靈壽は蓋し贊辭也、不老延年などといへるにおなじ、後漢禮儀志に、民七十者授レ之以二玉杖一こいへるもまたほめたる詞え。靈壽をも木の名とせしは、はじめて郭景純が尓雅の解にみえたり。今丹後にへみこいへる木あり、一種の腫節藤也、いつはあれ好事のものこれを靈壽こ決たり

○蛇をよめるは記にみえたり、順抄おなじ、一云久知奈波、私記に乎呂知、さてへみは反鼻の字音えこいへり、されど抄に、蝮蛇一名反鼻こ有て、注に和名波美こいへれば、つねの蛇こはとえ、しかはあればいにしへ蛇はその類の泛稱なれば、反鼻の音をも用ひたらめ、古語拾遺

に、古語に大蛇謂二之羽々一とみえたり、今へびといへるは轉訛之、蛇の種類はくちなはの條にしるしたり、むかへみるべし

○十月は伊奘冉尊神去給ふ月にて、出雲國に葬(フサメ)まつるより、衆神爰に會參す、さて祭禮にさまぐ\神異どもあるが中に、海上より小蛇白浪に乘り濱べにより來ることあり、必十月十一日より十五日までの間にあり、其大一尺ばかり、こがねなす色いとうらゝかなり、土俗龍蛇と稱へり、例年卜定め神人預め潔齋して海つべにいゆきて、その游(オヨ)ぎ來けるを待えて、玉藻を以て袖さし向ければ、おのづからきてその藻の上に蟠こゞまるよし、これを六角の折敷箱へ納め、標繩を張、神前に供ふるゝ。この事新千載の例にして、今にいたるまでかつて廢絶なしとなん（この全圖は圖叢に出す）按にこれ續修臺灣府志に載たる海龍なるべし、琉球屬島永良部(エラブ)島海中に產する永良部ウナギといへるものも、亦此大なるものゝ。徐葆光みて海蛇と名づけ、中山傳信錄に載たり

へそ　順抄に、卷子と注したり、漢語抄云、續麻圓卷名也　〔○一行並次頁白丁〕

へなだり　介の名なり、兼好が徒然草にみえたり。金澤の土俗今は夜啼介といへり、赤ニシ

に似てやゝ長く嘴の先尖り、その𩑛(フタ)を末となし衆香にまじへ焚ば、その香氣をあつめ調といへり、ひとり焚は臭し、本草拾遺に載たる甲煎これ也、福州府志に載たる香螺もこれ也

〔○以下六行並次頁白丁〕

保行

ほよ　万葉卷十八に、あしひきの山の木末(スヱ)の保與とよみたり。順抄に、寄生、一名寓生、注に和名夜止里木、一名保夜と。輔仁和名に、桑上寄生、和名久波乃岐乃保也。是醫方書にいふ半兒藤なり

ほや　順抄に、老海鼠を註したり、主計式に、貽貝保夜交鮨あり。ホヤは雨航雜錄に載たる石勃卒、一名來魚。これ寄生虫なればホヤといふなり

○寄生草をいふは前にしるしたり

○かずのこをもいふといへり。和訓栞に云、蝦夷人はカズノコをホヤといふといへり、カズノコは朝鮮の柳成龍が懲毖錄に載たる青魚の鯽なり、漢土にいふ青魚とはヿなり

囲玉かつま六の卷に云、肥前國佐伯の海にほやといふ物あり紫色に

て海鼠の如くなる形したる物ゝと佐伯の人かたれり、然らば土佐日記にほやのいずしとあるは、それを飯ずしにしたるなるべしと或人いへり

〔○以下七行余白〕

ほだて　万葉巻十一に「わが宿の穂蓼古幹採生之實（フルカラツミハヤシミ）のなるまでに君をしまたん」

ほわた　穂綿也。今ホウレイワタといへるは穂入綿てふとの約りたるなり、いにしへは蘆の穂をわたとなしたるとぞ、今の草綿は延暦にしつたへたるよし、尚わたの條みつべし

ほたる　順抄に、螢を注したり。神代紀には螢火をよみたり、源氏螢の巻に「聲はせでみをのみこがすほたるこそいふよりまさるおもひなるらめ」ほたるは火垂の義なりといへり

ほしゞ　順抄に、脯を注したり、乾肉ともみえたり。字鏡に腒を注したり、式には脯魚と書たり

ほはら　順抄に、鰾を注したり。童蒙頌韻に腴をよみたり、ホソハラの義なるべしといへり。俗にはニベといへり、鹿にもニヘあり

ほそき　主殿式に槾椒油あり、槾椒をホソキとよみたり、こゝの槾椒は何てふ樹をさしたるにや、蔓椒をいふか、槾の字いまだ詳かならず。按に、順抄に、蔓椒、注に、和名多知波之加美、一云保曾木、されば式の槾は蔓の誤之

ほろし　輔仁和名に、白莫を注したり、白莫は白英の訛なり

ほそち

淸愼公集云「ぬす人はほそちを見ても雨ふればほしうりとてや取かくすらん」和名抄に、熟瓜、保曾知、俗用二熟瓜二字一、或說に極ク熟シ蔕落之義也とあり。ほそちはほぞおちの略語にて、瓜の至極うみたるを云也、今俗にまくはうりと云物也、それを甜瓜(ウリ)の本名と心得るは非也、美濃國本巢(モトスノ)郡眞桑と云所にて作る甜瓜を眞桑瓜と云、味すぐれてよき故賞味する也、甜瓜と書てカラウリと讀、唯うりと斗も云也、白瓜キウリ其外さま〲の瓜と云付る物多き中に、只眞桑のみを瓜といふ事は、花の中に櫻をのみ花と云如し」貞丈後院云り

〔○以下並次頁白丁〕

ほゝづき　順抄に、酸漿を注したり、頰突の義なるべし。輔仁和名に、奴加豆支こ注したり、額突の義なるべし。叩頭虫を額突虫こいへる例もあり、額突は卽稽首の事也、日本釋名に螫のつく故にいふこいへり。亡友眞國が云、虻を字鏡に奴可我こいへり、さて酸醬には殊(ヨク)虻なごのつきて汁をすふものなる故に、ヌカヽ著(ツク)の義にて、一名ヌカヅキこいふなるべし、是によりてホヽヅキこいふ義を考ふるに、卽虻著こ云義にやあらん、上古虻蜂などの類人身を螫虫をばすべてホヽ虫こ云之。紀に、波賦武志こあろこれ之。ハフ虫をホヽ虫こ云はハもフもホも親

守部云、頬側の義にて、彼ノ口に含て呑が如くして鳴すより云語なり

しく通ふ音なれば也。また式の大祓詞に、昆虫乃災と有、昆虫を縣居は蛇の類といはれ、鈴屋は虫はすべてはふものなる故に云といはれつれど、飛虫もいと多かれば、這意義のみ、故眞國ははふ虫をすべて人身を螫虻、蜂、蛇、蟻、螻の屬をさしていふと思へり、その證は雄略天皇大御歌に、たくふらに阿武かきつきつその阿武を阿根豆はやくひ波賦武志もおほ君にまつらふながかたはおかむあきつしまやまと、とよみ給ふハフムシはこゝには蜻蛉をさゝせ給へるやうなれど、凡てその人を螫虻蜂などのわろ虫どもをおしこめてのたまへるなり。此大御うたの意をよく〳〵味はふべし。さて字鏡、和名などの書に、フヽ虫といはれたれど鏡柴の方にて蠶をホヽといへるにや尋ぬべし。またホヽツキの義はヌカツキとは別儀にて、此實はいにしへより童などの口に入て吹ならす物にて、即含吹の義にや、そは外の吹物とはたがひて口中に含みて吹鳴せる物なれば也。含をホヽ、フヽ、クヽ、などいにしへ也。前よりも安らかなるにや、いづれにも好むかたに從ふべし、われと眞國といとも親しうまじらひたれば、

その名代に此に此說をしるしつ

ほだわら　海藻にいふ穗俵也。これ益部方物記に載たる眞珠菜なるべし

ほこすぎ　万葉卷十六に、鉾椙(スギ)之末(ウレ)にとよみたり、椙は榅の誤也。鉾榅は弱杉なりといへり、いかゞ

ほしいひ　順抄に、糒を注したり。糗もおなじ。字鏡に、餱を注したり、字書に乾飯也とみえたり

ほらがひ　寂蓮が歌に「山ぶしのほらふく嶺のゆふぐれにそこともしらぬすゞのうは風」法華經に法螺と書したり、或は轉じて寶螺ともかけり、異物志に梭尾螺、玉斫三才圖會に吹螺、潛確類書に梵貝、武備要略に哱囉とみえたり

ほしがめ　土鱉をいふ也、或云出沒の義也、式の御贄の下に、大和國干鱉とみえたり、こゝにホシカメとよみたり

ほそくみ　輔仁和名に、半夏を注したり、式には加多保曾とよみたり

〔〇以下五行幷次頁白丁〕

ほとゝぎす　万葉卷九に、詠霍公鳥一首の生卵の中に霍公鳥獨生てさが父ににては鳴ずさが、はゝににては鳴ずうの花のさきたるのべゆとびかへり、と萬葉集中には皆霍公鳥と書たり

順抄には、鶚鵙鳥、今之郭公、和名保度々木須と注したり、されば郭霍通じて書たるか、されどいづれの書にかく書そめしにや　按に、鶚鵙は尒雅の鵙鳩にして、今云カシドリのたぐひなり、詳に予が園志にしるしをあげたり　また時鳥と書てホト、ギスとよむことは、はふとりの條にしるしたり。さてホト、ギスは秋より春までは朽木のうろなどに蟄るといへり、古歌に「おく山の朽木にこもるほとゝぎす夏を待てや音には鳴らん」このうた何の書に載たるか未考　信濃國人いふ、秋わたれるを捕てみるに、皆オホムシクヒなり、舌の赤きは老少のたがひそ。伊豫國人いふ、秋にいふオホムシクヒは杜鵑なり、これ信濃國人の說ごにたり、また伊豫吉田の人はホト、ギスとムシクヒはをなり、ムシクヒはおほしホト、キスはをにまれそといへり。猶尋ぬべし

○讃岐國にはホト、ギスの玉鉾といふものあり、木の葉を卷まとひたるものなり、是ミノムシの類ならんといへり

【頭註】

囲江談抄第三云

戸部卿談曰、郭公者非貞也、貞者予タル鳥乎云、保止々岐凡、保止々岐凡止云也。貞霄郭公鳥者、隱居於卯花垣云コトコトシト云也。又万葉集云、霍鶴鳥者鶯子也。昔人宅之樹蔭ニ造巣生子、漸生長之比、近臨見之、自鶯頭大

鳥、羽毛衝具ニ八、孤其羽、即有思之間、ホトヽギスト鳴去了云 云

圏玉かつま四の巻に云

ほとゝきすを時鳥と書事、文選の悲哉行といふ詩に時鳥多ニ好音一とあるは春の事にて、春鳴もろ〳〵の鳥を時鳥といへる也。されば ほとゝきすを時鳥とかくも、その鳴ころ然いへるが、つひに名のごとなれるにや

ほゝがしは　字鏡、順抄并に厚朴を注したり、字音に非ず、万葉巻十九に、見ニ攀折保寶葉一歌、講師僧恵行、「吾せこがさゝげてもたる保寶我之婆あたかもにるか青蓋（アヲキヌガサ）」また同巻に保々我之ともよみたり　〔〇以下七行并次頁白丁〕

ほゝそがしは　式に、槲をよみたり、はゝその條にしるしたり

ほやのすゝき　すゝきの條にしるしつ

安政寅十二月令書写畢

青木

國史草木昆蟲攷卷七

末行

まき　繼體紀に莽紀さく遊のいたどを、神武紀に被葉之浮流、注に被此云磨紀、順抄おなじ、輔仁和名に彼また被に作る、ともに誤之。万葉卷三に、眞木之立荒山中に、また眞木葉のしなぶせの山、これ今云ヒノキにして柏之。すでにひ、またかへの條にしるしたり

まつ　松をよめるなり、契沖云、千年をふる物にて行末を待こゝろにや名付たれといへり。眞淵は眞常(マト)の木といふ歟、在る中にもとことはをいへる也。また或はマツを群突の義之ともいへり、いにしへマといひしにはむらかる義あり、ツは突の義なり、葉の先の針のやうなればなりといへり。遊清云、松は葉のしみゝにまつひたれば名付たる歟、マツル、ともマツハシノキともいへり、またツとト同音なればマトフともマトハルともいふ、圓をマトカといふも、物のよりまとひたるを云之、たゞ丸き義と思ふはたがへり、角ある物はよりがたく、丸き物はよりやすきゆゑにやがてまとふといひて、丸き義とはなせしなり　万葉集に松を圓の假字に用ひたるもその義の同じければなり、卷十に高松(タカマツ)之野邊(ヌベ)ゆきしかば、また高(タカ)

松(マト)の野上之草替、また高松(マト)野山司の云云是ら也、契沖師の說は後世人の心よりいひ出る說にて、假名の古義をわすれたるなり、眞淵翁の說はトの字にのみつきてマの字をいはねばたがへり、すべてかゝる物の名は上の字にこそ深き理りはあれ、夫をさしおきて、下の字にて義を求めんはいたくひがごとゝ。游清この說よくえたればこゝにしるしつ

まめ　紀記に大豆をよみたり、順抄に烏豆クロマメ、鵲豆ソヒマメ、珂孚豆ヰヂコマメ、大角豆サヽゲ、小豆アカアヅキ、この本條むかへ見つべし。野豆ノラマメ、藊豆アヂマメと注したり、乾隆中に鄂爾泰張廷玉同纂せし欽定授時通考に數等の菽類を載たり、實に一大豆譜也。顧炎武日知錄云、戰國策張儀說韓王曰、五穀所生非麥而豆民之所食大抵豆飯藿羹、姚宏注曰、史記作飯菽而麥下文亦作菽古語但稱菽（欒また按に詩の豳風七月ニ亨葵及菽）漢以後方謂之豆

ます　式、また順抄に、鱒を注したり

まい　順抄に烏牛を注したり

まな　記に爲ニ鳥(トリノ)遊ニ取レ魚(マナコ)云云とありて、魚をまなと訓ぜり、うを條見るべし〇又記に、獻大之眞魚作也とも見へたり　〔〇以下三行余白〕

ますげ　万葉巻十六に、眞菅よしとよみたり、すげの條にくはし

まくさ　芒(ススキ)、麻花(ヲバナ)、茅(チ)、萱(カヤ)などをいふなるべし、みくさの條をむかへみるべし

○また薦をもよみたり、馬草をいへり

まくず　万葉巻六に、眞葛延ことよみたり

まさき　記に眞拆、紀にいふマサキヅラなるべし

まゆみ　順抄の檀を注したり、記に麻由美とよみたるもこれにや。万葉巻三に、水篶かる信濃の眞弓とよみたり、また巻九に、檀弓をよみたり。按に禮の篇名によりしると明かなり。さて檀は紫檀、旃檀などゝて良木の稱にて、檀を弓材に充しはすでに禮にみへたり。こゝにこゝの檀あることをしらず、檀をマユミといふもまた眞木(マキ)、眞金(マカネ)の眞とおなじく秀眞(ホツマ)の義なれば、今こゝの俗にいふ柔木のマユミの屬にあらざるとまた明かなり。さてわがいにしへに用ひしは槻弓、榜弓にて、余いにしへの遺弓をみるに、おほくは槻弓也。是眞弓てふ名は良弓の泛稱なるにあらずや。さて又梓弓の梓も禮の篇名に梓人と有て、また木王ともいひ、彙苑に室有此木則餘材不復震ともみへて、彼のいにしへの良木なることまた明かなり、木草諸

注に說ける梓と更にことなり。こゝにいへるアヅサてふものは雜木にして、材には充らず爪木(ツマキ)などに料(マウケ)るのみなり、されば檀も梓もこゝにそのいにしへその美稱を借たるにやあるらん。輔仁康賴また順抄などに杜仲をハヒマユミと注せしは、凡て杜仲の類にはその小枝(サヒノ)に柧棱(ソハ)をおひて箭羽ありければユミの名をおひたるならん、これは雜木にして弓に造べきものにあらず。六帖に貫之「つきふせてみれどあかぬはくれなゐにぬれるまゆみのもみぢなりけり」これは今もいふマユミなるべし。はひまゆみの事はその條をみつべし

まより　順抄に、石炎螺を注したり

まとり　万葉卷七に、眞鳥住宇名手の神社。眞淵云、眞鳥は鷲をいふにあらずや、かの眞鳥の大臣の名もあるかしは有ぬべき也。さて卷九に、鷲の住筑波の山とよみ、また集中に筑波嶺に賀我鳴和之ともいへるをむかへみるに、雲梯(クナテ)の神社(モリ)は、いと／＼神代より傳りて、あらたなる事と聞え、世に殊に木深くて鷲の住が故に、何となくよめるにやあらん。或人云、上總國にてカモメをマトリといふといへば、ふるくいへるマトリはカモメなるべしともいへり、猶考べし

ましら　梵語に猴をいふといへり。古今俳諧哥、躬恒「わびしらにましらな鳴そ足曳の山のかひあるけふにやはあらぬ」。四十二の物あらそひのうちに、四位の少將嶺に鳴猿の聲と鹿のなく音といふ事を「うきことはましらのこゑに聞えてつまこふ鹿の音こそつらけれ」

まくろ　後紀に鱺をよみたり

○魚にいふは金鎗魚也、享保複言にみえたり

まくり　なのりその條にしるしたり

まかみ　万葉卷二「おほくちのまかみのはら」とよみたり、豺狼をいふなるべし

ますゞ　すゞの條をみつべし

ましこ　十題百、寂蓮、しくれこし梢の色をおもひこや枝にもきゐるてりましこかな。何鳥にや、鵐ミ云字を用ひたり　〔〇二行余白〕

まるすげ　詩經古訓に莞をよみたり、ふとゐの條にしるしたり　玉勝間十三卷十九丁に云、まるすけと云ふ草、世にかやつり草といふ草の小きやうなる草の、田に生て田夫のいたくいとふ草あり。美濃國にてこれをまることいふ、三河國にてはまるすげといふよしえ。まろこ菅と哥によめる物にはあらじか

まつたけ　夫木集に、まつたけがりとよみたり、即松蕈也。予嘗て蕈譜をゑりたる比、偶韓

人の一詩をみたればこゝにしるしつ。栂月堂金鰲録に載、摘松蕈詩に、蕈花因レ隰敷ニ峯鬆一蕈笠初抽氣味濃熊掌猶難當レ避レ席金齏士糝抗ニ塵客一偏宜山舍僧厨粥那及官家禁內　作レ腊作羹但不厭秋來爲齋禦ニ冬供一

【頭註】貞融つたがぬ舟云

松茸いとをかし、まつの下かげにのみおふとおもひしに、さゝ竹のひたおひにおひしげれる中、つゝじの根にこもりたるよ、夕日かげに笠たてゝ道もせにいでたるいとくをかし。しめじ（ち歟）は霜ふり千本といへるいとめでたし、初たけはめでたけれどむしばみたるがおほきぞにくき。金たけ、鼠たけものげなし、雪たけ神無月ばかりこれたてまつれ給へなどいひて、やまざとびとのもとより消息して得させたる、いとありがたくまためでたし。岩たけ、皮たけ精進のをりなどいはんかたなし。桐桑などの木にいでたるもをりにふれてはおかし

まてがひ　順抄に、馬蛤を注したり。今の俗にいふものは閩書に載たる竹蟶なり。さて馬蛤の形ちは馬刀の如くなれば、即一名馬刀、その字音を呼なり、馬刀は本草經に載たり、諸注をみるに蚌に似て小なるものなり、今の俗にタケガヒ、エボシガヒ、カラスガヒなどゝいへるものなり、今マテといひしは細竹の如く牒をひらけば竹をふたつにわりたるやうなるものにして、經の馬刀にてはあらず、嘉祐本草に載たる蟶なり

まぐなき　允恭紀に、行山採一根蘭、撥蠛、注に此云摩愚那岐、順抄に末久奈支。按にマクナキとはマダヽキのことにて瞬の義なるよし、また按にマクナキのマは目也クナキはクラマキ（昧闇）の略語なり、目たゝきすれば目くらくなり明になるをいふなるよし安齋随筆に見えたり。さて蠛てふ虫は甚の細虫にて、俗に云ムセヒ、ヌカ、ブトなどいふ虫の類にて、鬱積の處に生るものなり。けぶりの如く群て人の眼前にさえぎり、めまぎらはしく、瞬するに堪へざれば、竟に虫の名に負るなるべし。またおもふに、摩愚那岐は目昧の義にや、いかゞ、尚考ふべし。源氏明石巻に、まくなぎつくらせてさしおかせけり云云、是は五節の君の一人を、源氏の方へ參らする時、その使何方よりともいはずして、まくはしばかりしてさし置たるを云、諸抄にもまくなぎとはまたたきを云、瞬の字といへり。また按に、蠛蠓生酒醯中、似蚋而小、列子蠛蠓朽壤上因雨而生見陽而死。又蔑蒙二字はともに暗き義あればマクラキかたによしあり

まつむし　松むし鈴むし古今まがへりければこゝに併ていふ。はやくはチンチロリンとなくをまつ虫となし、リンリンとなくを鈴虫となせり。後には復これとたがへり。夫木集十四、延喜七年亭子院御門御時、西河行幸せさせ給ひけるに、忠峯の和歌序に、松虫の聲を琴の音

校云、源氏物語ノ歌桐壺の卷なり

にたとへ、鈴虫の聲を水の音にたとへたり。槃おもふに、琴の音は眞の鈴虫の聲にちかし、水の音は眞の松虫にちかしと。溪雲問答に云々此御說いづれをいづれとさし玉ふや、今これを詳に考ふるに、リン〳〵と鳴は松蟲にて、其虫黑色、チンチロリンと鳴は鈴虫にて、其虫油色（玄を以て黄を交ゆるを油色と云）謠曲野々宮、鈴虫の雨條に、松むしの聲リン〳〵とあり、花鏡に金鍾兒其聲則發稜々如小鍾（全文下にいたす）こゝに云發稜々、唐音にてテンリン〳〵なれば、この金鍾は正に松むしなり。且云、黑色また一證なり。鈴むしの聲はげにきんの音にちかく、和歌にもふり、ふるといふ詞のよせおほければ、鈴に因ある事明かゝ。夫木集十四「ふりたて・ならしがほにぞ聞ゆなる神樂の岡のすゞむしの聲」源氏鈴虫の卷に「すゞむしの聲をかぎりにつくしてもながき夜あかずふるなみだかな」またむかし豐臣秀吉公、我隼人國に臨戰の時、國人新納忠元、公の御前にて酒給はりける、其席に細川幽齋ありて、忠元の上鬚のいと鋭なるをみて「頬ひげをちんちろりんとひねりあげ」と興じければ、忠元その詞に續て「はなのあたりに鈴虫ぞ鳴」とすさみけるとなん、此頃から薩摩國人は眞の鈴虫をしりたり。浪速にては歷長の頃の童謠に、よるは松虫チンチロリンとうたへるよし、これは鈴虫と松虫とおもひたがへる

なり。今も所によりかくおぼえたるもあり、また花鏡にいへる金鐘をすゞむしとおもひ定めたる論もあり。鈴虫は雑字簿に月鈴兒とあり、これは我國人のつくれる稱なるべし。年山記聞に、松むし鈴むしはおの〳〵聲によりて名づけたり、色をもていはゞ、黒きは松虫、偶色は鈴虫。是よく其眞をえたり。陳淏子花鏡に、金鐘兒似ニ促織一身黒而長、鋭前豊後、其尾皆岐、以レ躍爲レ飛、以レ翼鼓鳴、其聲則磴稜々、如ニ小鍾一（袁劉二氏の志にも皆云其聲磴稜々とあり）

【頭注】

園藤草芳樹寄居戯語甲辰卷三十八丁云

市に立て松虫求めんとおもはゞ鈴虫をと云べし、鈴虫求めんとおもはゞ松虫をといふべしと何にかありけんやんごとなき人のかゝせ給ひし物に有しやうにおぼゆるは、リン〳〵と鳴を松虫、チンチロリンと鳴を鈴虫と心得させ給へるなめり。はやく猿樂の謠曲にも、これ松虫の聲はりん〳〵としてと見え、また入江昌喜が幽遠隨筆、安藤爲章が年山記聞などを初、近頃の說もおほかた皆然なれば、かくの給へるもことわりなりけり。されど猶誤にぞあるべき。今此をつばらにわいだめいはんとするに、先其聲をもて定んには、源氏の篝火の卷に、弁の少將ひやうし打出てしのびやかにうたふ聲鈴虫にまがひたりとあるは、うたふ聲のリン〳〵と聞えて韻のめで度を鈴虫にたとへたる物なり。いづこにかチンチロリと聞ゆるうたひ聲のあるべき。又今巫のふる鈴の音などこそチンチロリともなれど、古への鈴は、其聲リン〳〵としていとさやかなりけん、古歌にも後拾遺集に「とやかへ

りわが手ならしゝはゝ鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲」月詣集「鈴虫をみかりの鷹のおとかとて野べのきゞすや草がくるらん」など鈴の音によせて詠る歌共かれこれみゆ。和漢三才圖會に鈴虫のことを眞黒似二松虫一而首小尻大、背窄腹黄、鳴聲如レ振レ鈴、言二里々林里々林一と見え、また同書に松虫ハ褐色而長髭腹黄在二野草及松杉籬一夜振レ羽鳴聲如レ言二知呂林知呂林一甚優美也と見ゆ。これリン〳〵は鈴虫、チンチロリンは松虫の證也。その性をていはんには、源氏の鈴虫の巻に、秋の虫の聲はいづれとなき中に、松虫のなんすぐれたるとて、中宮のはるけきのべを分て、いとわざと尋とりつゝ、はなたせ給へる、しるく鳴傳ふるこそすくなかなれ、名にはたがひて、命の程はかなき虫にぞあるべき、心にまかせて人きかぬ奥山はるけき野の松原に聲をしまぬもいとへだて心ある虫になんありける。鈴虫は心やすく今めいたるこそらうたけれ云云、この文は女を虫にたとへて源氏のゝ給へることを書るにて、されば松虫をいとへだて心ある虫になんとの給へるも、野べにては花やかに鳴と、とりてもてかへれば聲をもたてず、程なく死て、庭にうつすまもまたずはかなきが、この虫のさがなるを好み飼ふ人につれなくへだてある事にしたるものなり。今かのリン〳〵と鳴を松虫にして、この源氏にあはせ試むるに、彼虫の様にかなはず、また鈴虫を今めいたりとほめ給へるも、人め近き庭にても聲をしまず鳴て、はづかしげなきを、女いものつゝみせぬになずらへ給へるなり。これはたチンチロリンを鈴虫にしては、更に文にいへるにたがへり。よく味ひてさとるべし。かゝれば市にて虫かはんにも鈴虫をとおもはゞ鈴虫といひ、松虫をとおもはゞ松虫といひて、いたつかはしくかへさまにいはずともたがふことなからん、よそは知らず、此國にてはものしらぬ女わらべなどは

校云、豆のくきカ　古今集大歌所御歌　み山には霰ふるらしと山なるまさきのかなさし

今も猶リン〳〵を鈴虫、チンチロリンを松虫なりと思ひたるを、中々に書よむともがらなん、しか野中ふる道ふみたがへためれば、かくこちたきまでろうじたゞせるゝ。さるは世のことわりあきらめしれる博士のまへにては語り出べくもあらぬいとはかなきすさびなれど、かゝる鳥虫の音をさへ何くれとさだむるも哥よみのえすぐし、やらぬくせにしあれば、みん人とがむるとなかれ。まことや松虫と云名の意は、上に引る源氏の文に、はるけき野の松原に聲をしまぬもとあるが如く、むねと松かげなどになくより、つけたるにぞあるらんかし

まさかき　さかきの條をみるべし

まきくさ　輔仁和名に、地膚、和名爾波久佐、一名末岐久佐と注したり

まめがら　豆のくさなり

まさきづら　繼體紀に、妹尒まかしめ麿左棄逗囉、また眞榮葛（サキクノ）とも書きたり。今いふマサキノカヅラといふものは、本草拾遺に載たる扶芳藤也、俗にツルマサキと云、玉椿（タマツバキ）に似て蔓纏するものなり、また今いふ冬蔦とて本草拾遺に載たる常春藤にや。万葉巻七に、冬薯蕷都良尋てゆければこよみたるもこれにや

まつのこけ　順抄に松蘿、一名女羅を注したり、また一云サルヲカゼこも注したり。六帖に

づら色づきにけり又序にもいへり
校云、ものをこそおもへ刊本戀る此頃ニ作ル

「あふ事をいつかその日とまつの木の苔のみだれてものをこそおもへ」また元輔家集に「松のこけちとせをかけておひしげれ鶴の卵のすともみるべく」尙こけの條にしるしたり

まろこすげ　淸記に、うきぐさとつゝけたり。莞をまろすげといふにむかへ見るべし、または藺草をいふにや、ミクリ也といへるはあらじ

まつみぐさ　莫傳抄に、藤也といへり

まつなぐさ　莫傳抄に、葛なりといへり

ますほがひ　眞蘇芳介なり。櫻介に似ていと赤く、また細少也。山家集に「しほそむるますほの小がひ拾ふとて色の濱とはいふにやあるらん」また螺の類にいへるは濫名なり

まくらがひ　寶介に似て旋結はふとく、唇の先は小之、文理は種々あり、野史に大江千里の歌なりとて「舟とむるいその浪ぢのまくらがひかひある夢にあはざらめやは」

まなばしら　記の雄略の段に、ひれとりかけて、麻那婆志良、をゆきあへ、とよみたり。或人いはく、鶺鴒なり。按に字鏡に鴭を彌左古、また万奈杜と注したり。また鳷を加利、また万奈杜、また鷃求魚反を豆々万奈杜と注したい。いづれの鳥にや。今按に、爾雅釋鳥に、鵬鴒雝

校云、元和本下學集マメウマシとす・

國古事記神武卷の歌に賀美

葉、注に雀屬也。鶸領こいへるはこゝに據なるべし

まつむしり　十題百、寂連が歌に、深山木のゆきふらすよりうかれきて軒ばにつたふまつむしりかな。何鳥にや　〔○以下八行余白〕

まゝいかづら　雜式に眞前葛、日蔭山孫組こ見えたり

ましろのたか　万葉卷十九に、屋形尾の麻之呂鷹こよみたり

まめうまはし　下學集に鷊をよみたり

ますほのすゝき　すゝきの條にしるしたり

まゆみのかみ　後花園月次、雅良の歌に、ひきかへしかくこもつきじ陸奥のまゆみのかみの過しうらみは。まゆみの紙は檀紙也。小たか、大たかの類也。またみちのく紙こもいふ

美行

みら　韮の總名也こいへり。順抄に、薤を於保美良、韮を古美良こ注し、神代紀に介瀰羅ひこもとゝよみたるは、食韮の義也。後にはニラこいひて、野韮、山韮なごの類もあり。拾芥抄

良比登毋登とよめりこと傳に臭韮かといへり、又万葉十四八十久君美良ともよめり、莖韮なるべし、又字鏡には、薤奈女彌良韮は太々彌良また葱韮なり、

巻六、天平九年の官符に、疱瘡にならんもの韮を食べきよし見えたり、今はこれを忘けるこそむかしに違へれ。また田人の常食にあたふれば、農事に益あること、縣令簑某氏の著せし續農家貫行にみえたり

みの　式に葍子をよみたり。順抄にも葍子をみのと注したり。爾雅に皇ハ守田、本草拾遺にこれを芮草をしるしたり。綱目に芮音網、山公醫旨に芮音端、今按に芮徐田切、音冈、芮蓬稂三種皆荒年の穀にして皇のたぐひなり

みわ　万葉巻八に、神社に三輪すゑ、巻十三に、五十串立神酒座奉、また打酒とも書たり、實涌の義とこいへり。詳に崇神八年の記に見えたり。またくしの條にもむかへみつべし

みる　万葉巻一に、朝日に來よる深海松とよみたり。源氏葵の巻に「はかりなきちひろのそこのみるふさのおひ行すゑはわれのみぞみん」貫之の、うみ松をこそ引べかりけれ、とよみたるは深海松とはおもはれず、蓋し石帆のウミマツなるべきか

みそ　順抄に、末醤。漢語抄を引云、高麗醤。注云、美蘇、今按辨色立成說同、但本義未レ詳、俗用ニ味醤二字一、味宜レ作レ未、何則通俗文有ニ味檢荚醬一、末者擣末之義也、而末訛爲レ沬、未轉爲

彌良と見り（みる條）校云、万葉一になし朝名す二、來依宋海松卷十三

味、又有志賀末醤、飛彈末醤一云云。榮按に、三代實錄卷四十九に味醤あり、下學集云、南部法論味噌、本朝南部法論時用之。孫穆鷄林類事に蜜祖ミツと記たり 孫氏宋人此書は朝鮮の事を記せり おもふに我國にて美蘇といへるはいとふるきなるべし、文字は美蘇にあれ、味噌にあれ、蜜祖にあれ、こゝに意なし。末醤をミソとよむは即和名なり、醤は鍛冶和名カタシ、これを約てカヂといへるを、鍛冶が鍛冶に誤りつくりてカヂといふといへる類にて、すかりて其本義を失なふことあり、或はいふ、味噌は近代の製にして、むかしは大豆豉なりといへり、此說いぶかし。又おもふに、順朝臣はこゝのミソをもて高麗醤におしあてたるなるべし。孫穆が蜜祖としるしたるは蓋し和名の彼に及びたるならん

みな　万葉卷五に美奈乃和多、卷十三に蜷腸香黑とよみたり。順抄にも、河貝子を美奈と注したり、ミナはカミナに似て際あり、カミナはふたなし。かみなの條むかへ見つべし

みち　記の龍の宮の段に美智皮之疊敷八重、神代紀に鋪設海驢ミチ皮八重と見えたり。藻塩草に、海驢その皮極て軟也、陸地にありて潮みつれば毛起つ、よて美智と稱るなるべしといへり、いかゞ。敷皮の事はこらの條にしるしたり。また沙彌充夫が鎌倉紀行に、因幡伯耆にて

アシカをミチこいふこいへり

みき　御酒をよめり、酒をキこよむはクシの反え。久老が區志考に詳なり。くしの條見つべし　〔○以下二行并次頁白丁〕

みくさ　万葉卷一に、金野の美草苅葺こよみたり。これ正に旒花なり。また同卷に、眞草かる荒野とよみたる、眞草ともおなじ

○水草をよみたるは卷二に赤人「むかしみしふるき堤は年深池の瀲に水草生けり」また卷十にも、水草の上に霜の消つゝ、また同卷に、秋就ば水草の花のあよぬがに、こもよみたり。これは明かにミヅクサえ。久老は水は借にて眞草なるべしこいへり

みこも　万葉卷十一に、眞薦かる大野川べのみづこもかりこよみたるは、水薦なるべければ、眞薦なるべし。卷二に水薦かる信濃の眞弓こよみたる、薦はまさしく篶の訛なるべし

みくり　順抄、三稜草を注したり。輔仁和名に莎草を美久利久佐こ注したり。順抄には、漢語抄を引て、莎草を具々こ注したり。六帖に「つくま江におふるみくりの水はやみまだねも見ぬに人のこひしき」また、さやまの池のみくりこもよみたり。源氏玉かづらの卷に「し

らずとも尋てしらんみしま江におふるみくりのすぢはたえじを」またおなじ巻に「かずならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかくねをやとゞめん」

みせり　丹抄に水剗を云世里と注したり

みすゞ　万葉巻二に、水篶刈信濃の眞弓とよみたり。今の刻本に水薦に作れるは訛なり。これは眞篶なりといへり。まさに小竹にして竹の類の矮きものなり、すゞの條をむかへみるべし。四國にてはヲザ、ネズといふといへり

みしは　藏玉集に笠にぬふ菅と、みしま野にありといへり

みゝず　順抄、字鏡并に蚯蚓を注したり。また抄に、白頭蚯蚓を可布良美々寿と注したり

みさご　万葉巻三に、美沙居石轉、巻十一に、水沙兒居渚ともよみたり。順抄に、雎鳩を注したり。そはともあれ、今もいふミサゴは爾雅の鶚にして、注にいふ魚狗なる事明かなり。さて關雎章にいへるものは諸説おなじ、柯楷世本古義心部によく摘擧せり、みてそのよきをとるべし。またこのミサゴを覺賀の鳥なりといへれどさにはあらじ、かくかのとりの條をみつべし。按に關々は并ふ良と、こゝによりてや鄭推は鬼屬とといへるもまた一説な

みつぢ　順抄に蛟を注したり。或はいふミ|は水之、ツチ|は神之。さて世に蛟の災とて山を拔、陵を穿つとまれ／＼につたへいへり、他の國にもすでに月令に伐蛟の文あり、刑錢心覧にも伐蛟說を載たり、漢土にはこの災あるこゝけだしわれよりも甚し

みづたで　万葉卷十三に、水蓼の穗積とよみたり

みつふき　字鏡に芡を注したり、順抄おなじ、輔仁和名にはミヅフ、キミ注したり

みるふさ　みるの條を見つべし

みつぐり　三栗なり、記によみたり

みかまぎ　御釜木なり、式に薪をよみたり

みのがひ　いがひの小なるものには毛あればいへり

みそがひ　夫木集に「江のよどにみそがひ拾ふうなひ兒がたはむれにだにとふ人もなし」今の俗に烏介といへる郎蚌なり。彼國のいにしへはこの介の殼にて鈿嵌をつくりしこと通鑑陳記の注に見えたり

みるくひ　みる介ともいへり。風葉集に「あさりするあら磯よりも都にてみるかひありし

校云、輔仁和名、鷄頭實、ミヅフヾキノミとあり

君ぞこひしき」夫木集に「打よすみ見るかひありて與謝の海の遊(アソビ)の浦にころもへぬべし」是泉南雑志にいふ西施舌く、嘉祐本草に載たる淡菜なり

みつむし　藏玉集に魚えこいへり

みちばち　順抄に蜜蜂を注したり。はちの條をむかへみるべし

みのむし　清記に見えたり。爾雅に、蜆縊女、注に小黒蟲赤頭喜自經死、故曰縊女。疏に説文を引て曰、蜆爲蝶、是之。范石湖詩に橘蠧如蠶入化機杉間垂レ繭似ニ蓑衣一忽然蛻作多花蝶翅粉纔乾便學飛、これ蓑衣の名こゝにみえたり、また稗官に木蝶とも見えたり

みほどり　記に、美本杼理のかづきいきづき、万葉卷四に、二寳鳥、卷七に、志長鳥、また鸎賀鳥えこもいへり。此説たがへり、しながこりの條をみつべし

みづごり　万葉卷八に、水鳥の青羽の山、また水鳥の鴨の羽いろ、また卷二十に、水鳥のかもの羽色のあを馬、などゝよみたれば、鳬なりこいへり

みことり　清記に見えたり。順抄に唐音を引て、鵐、注に音巫、漢語抄に巫鳥、之止々。この巫鳥によせていへるにや

間にかゝるみのむしのもりける雨をしらせがほなる

みゝづく　順抄に木兎を注したり。づくの條にしるしたり

みきぐさ　秘藏抄に蘩といへり

みづぐさ　秘藏抄に蒲といへり

みたぬき　順抄に猯を注したり、また羨と注したり。たぬきの條に併てしるす

〔〇三行余白〕

みときくさ　百姓嚢に大麥といへり

みつたくさ　莫傳抄に蓮といへり

みすもくさ　秘藏抄に菱といへり

みだれぐさ　藏玉集にすゝきといへり

みやつこぎ　俊頼散木集に「春立ばめぐむかきねのみやつこぎ我こそ先に思ひそめしか」

いまは何てふ木にや考へず

みちよぐさ　藏玉集に桃といへり

みつばぐさ　莫傳抄に檜なりといへり

校云、和泉式部家集にはしかき群本とはことなれり

みしをぐさ　莢傳抄に竹なりといへり

みなしがひ　これ空背介（ウツセカヒ）の俗名なるべし。高倉院二品親王の御歌に、神島のいそまの浦によるかひの身はいたづらになりはてにけり

みさごぐさ　莢傳抄に、酒にうかめる三日の桃花といへり

みやこどり　万葉卷二十に「ふなきほふほり江のかはのみなぎはにきゐつゝなくは美夜故杼里かも」また和泉式部家集に、和泉にくだり侍りけるに、都鳥のほのかに鳴ければ「事問ばありのまに／＼みやこどり都のことを我にきかせよ」頓阿集に「あれはてしこれや難波のみやこどり今も堀江の河に鳴なり」十六夜日記に、すみだ河にこそありと聞しかど、都鳥といふ鳥のはしとあしとあかきは、此浦にもありて（相摸の浦にてよめる歌なり）「事とはゞはしとあしとはあかざりし我住かたの都鳥かも」また、古今著聞集に、少將内侍「春におふ心や花のみやこどりのどけき御代の事やとはまし」大田道灌氏の上洛の時、後土御門院へ奉れる歌に「年ふれど我まだしらず都鳥すみだ河原に宿はあれども」（龍虎山記にこの歌は寛正六年三月によまれし歌なりとしるしつ）嘗て土佐國人この鳥の形をうつしてやりたるに、嘴とあしとは赤く、背は黒く腹は白く、少しうるみた

る點あり、鷗などにも似もやらず、また豐前國にていへる都鳥もまたこれにことなることなしといへり。また友人龜田鵬齋久しく佐渡國に遊てかへり、佐渡にて都鳥を見たりとて語らふしに、土佐國人のやりし形をいだしみせたるに、うつなくかくのごとしとはいへり。これいにしへの都鳥にや。いせ物語には、白きとりの、はしとあしとあかき鴫のおほきさなる、水の上に遊びつゝいをくふ、京(ミヤコ)には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず、わたし守にとひければ、是なん都鳥といふを聞き「名にしおはゞいざことはん宮古鳥わがおもふ人はありやなしやと」是土佐國のものは背の黒ければこれと異なり。槃おもふに、この物語に但白きとあれば、今いふカモメならんか

みづかげぐさ　万葉卷十に、天河水かげぐさの秋風に靡(ナビク)をみれば時は來ぬらし。また、水陰におふる白菅などゝつゞけたれば、凡て水かげに生たる草を汎(ヒロ)くさしていへるなるべし。また夏田をいへるは水懸の義なるべし。藏玉集に「とく植てわが田のおもに秋待て水かげ草ぞかりしほどなる」

○みそはぎをいふは莫傳抄に見えたり。是救荒本草に載たる千屈菜なり

みらのねぐさ　輔仁和名に細辛を注したり

水乞鳥　西行家集に、山ざとは谷のかけひのたえ〴〵に水こひ鳥の聲きこゆなり。何鳥にや

みなしご草　家隆卿が家に「たぐひこて我住などのかべにおふるみなしご草も哀いつまで」

或云、壁におふる草のよしなり

【頭註】みやこどり

山岡明阿、武藏志料に「都鳥は古へさま〴〵の說有ども白鷗たる事疑ひなし。但此鷗に二種あり、大小の異なるのみ、關東海濱土俗の方言に大鷗を濱猫と云、まとに其聲猫の如し、食料とす、大さ鳴の如く、小なる物は鳩ほどありて、其聲細ひきし、墨田川などに來るはこの小鷗之。常はこのあたりの川に住す、海にのみ住ばやがて海鷗とも詩にも作れり、只南の風發りて海の荒る時は、はるかに上に飛去て、波靜なる墨田川のほとりにある之。京都の人は海に遠くして、正しく此鳥をば見ずして、只物に有と人傳にのみ聞ば、それか是かといふ人有ども、此白鷗まとに足と觜とは赤くして白鳥なれば、鄙のさかひにめづらしければ誰其人が都鳥とは名付しなるべし

〔〇六行余白〕

武行

むぎ　記紀に麥をよみたり。ムとは群の義にてキはツルギなどのキと同じく、此草は芒(ノギ)の殊に多群付たれば、群芒(ムキ)の義なるべし。麥の種類いとおほし、あるひは地名をもて名とし、あるひは人をもて名とし、あるひは收候をもて名とし、あるひは形色をもて名ぜしもあり、大氏小麥は少に大麥はおほしといへり

むく　順抄に、椋を注したり。神名式に秩父郡椋神社あり、ムクとよみたり。輔仁和名に椋子木を牟久の岐と注したり、爾雅及び諸本草に注したる椋とことなり　唐本注云、椋子木、葉似柹兩葉相當、子細圓如牛李生青熟黑其木堅重。藏器拾遺云、杉陽江西人呼爲椋松楊縣以此爲東陽併てこれを一にせり　こゝにいふムクといへる詞は削剝の義也。禮に爲天子削瓜詩に八月剝瓜、削も剝もムクとよみたる也、これ皮を去て膚(ハタ)をうるも凡物を磨して精光をとるかどし、また米の粰(モメ)を去て糲(キシメ)をとるをもムキ米といへるをもてしるべし。木の葉にて物を磨けるにムクまたムクの葉といへるもあり、今はムクエといへる木なり、ムクエは梓楡ともまた刺楡ともいへり、詩の秦風に駁とあり、注に齊の諺を引て斫レ檀不レ諦得駁馬、陸疏に

梓楡一名樸樸、また朴に作る、朴をヨとよむも此にいへるなるべし。また無患子を今の俗にムクまたムクロジまたムクリウなどいふも、この木實の殼を煎じ物の垢を滌へば頓に清らになれば、唐して精をうるが如くなる故に其義を通はしていふなるべし。記に年久の木實とあるはエノミなるか、また無患子なるや、また木欒子なるか、いづれぞ

むべ　順抄に郁子を注したり。ムベは蕳子之。其實の赤ものなればアケミともいふ。朱實の義之。このムベはいにしへ近江國王の濱の俗人歳ごとに十一月郁子二を朝庭に奉れり、閏年には三顆といへり。禁裡年中行事略には、近江國高島郡より郁子を奉とあり。延喜例貢の式に、御贄五郁子氷魚鮒鱒阿米魚也。この例貢皆絶たれど、たゞ郁子のみ今に例貢ありといへり。其土人云、天武天皇此地におはしつる時に、土人郁子を獻じけるに、今よりして流例のごく厩戸皇子奥島國清寺に詣で給ひし時も、村老男子八人をぐし拜し奉る、其節も郁子を奉るとぞ。其後京にも獻りしとになりて奥島は郁子領となりしに、中世其事廢せり。また今の彦根の城の守よりして歳毎に領米一石五斗を土人に給はりて、郁子をつくらしめ京に獻じけるとぞ。二顆獻る年も有、また三顆の時もありて、ひとつは内侍所へ奉るといへり。其

いにしへの下知狀の寫に云、近江國蒲生郡奥島莊內奠供御人等申任ニ先例一止ニ非分之課役一可レ專ニ調貢之由ニ被ニ聞召一、可レ令ニ下知一之旨天氣處候也、仍言上如レ件、俊秀誠恐謹言、文安二年十一月二十一日、左中辨俊秀、進上、尹大納言、又近江國蒲生郡奥島莊奠供御人等申、停止非分之課役、綸旨如此、早存ニ其旨一可專調貢之由、中山大納言殿御所也、仍執達如件、文安二年十一月二十一日、中務少輔重長判

むま　順抄に馬を注したり、本はウマ之。うめの條にくはしくしるしつ、うまのことはうまの條にくはしくしるす

むし　順抄に爾雅を引て云、有レ足謂ニ之蟲一、無レ足謂ニ之豸一、また唐韻を引て云、虫、鱗介惣名之、和名無之。記に字士たかると云は、むらがりしけるを云詞之。ムとウは通へる之。さて又大戴禮に羽毛鱗介をもて皆これを蟲といふ、又羽鱗毛介を總てこれを渾蟲といへり、淮南子に馬は嬴蟲なりといひ、葛稚川は虎を大蟲と稱せり、されば大氐動物の泛稱なるに似たり、とりの條むかへみつべし（禽獸虫通用の條にあり）

○順抄、蟲豸體に、蟠、訓、和太加末流○蚑行、波布○蠢ッ動、無久女久○螫、佐須○蛻、毛沼久○

蛰、須古毛流○化、淮南子云、蠶八日而化　〔○一行余白〕

むぐら　万葉卷十九に、牟具良波布いやしきやど、卷四、葎生こよみたるにおなじ、葎草なり

むこき　順抄に五加を注したり。今は|ウコキ|こいへり

むばら　順抄に薔薇を注したり。通じて荊棘をもよみたり、いせ物語にはうばらの如き君、あるひはうばら韓橘(カラタチバナ)などこもよみたり。ウのかた木義なるべし、荷うめの條みつべし

むしろ　万葉卷十に、綾席、獸皮の敷ものも席こいへり、席は敷物の惣名なり。式に席薦各幾枚としるしたり、また式に龍鬚莚細貫等あり

むかで　紀に呉公|ムカデ|とよみたり。順抄に、兼名苑を引て、蜈蚣、一名百足、注に和名無加天こみえたり

泥鰻宜夏猪一万葉十六廿三ウ「いはまろには

むなぎ　万葉卷十六に、家持「石麻呂に我もの申夏やせによしといふものぞ武奈伎取食」これはやく鰻鱺の効をよみたり。順抄に鱣を注したり、また爾雅注云、鱓似蛇といふ文を引たれば、鱣鱓を通じていふなるべし。輔仁は䱇を注したり、字鏡に鰼鰻皆牟奈支と注したれど、今は鱓を俟ずして明か也

われ物まをす夏やせによしちふものぞむなぎとりめせ

むじな　字鏡、順抄并に貉を注したり、推古紀にはウジナとのみたり。たぬきの條に併てしるしたり

むらさき　万葉卷一に、紫のにほへる妹、卷三に、託馬野に生流紫衣染(キヌソメ)、とよみたるは、今の紫草なるべし

○いにしへ漢土にては紫に二種あり、ひとつは亂朱の紫にして北紫なり、ひとつは今こゝにある紫色にして、蓋し彼にいふ油紫のたぐひなり。按に正字通云、紫黑赤間色之。魯論紅紫不以爲褻服。六書故曰、紅紫之豔者故不爲褻服非間色也。又惡紫之奪朱也。或曰、古之朱赤汁染之紫與朱實相類、今之淺紫是也。其紫近絳謂之北紫以月白或黄爲初染地加以紅花成之、惡奪朱者謂淺紫色豔也。六書曰、宋仁宗時有紫帕爲油所漬其色翻去因命染人放而爲之謂之油紫今四品以上朝服用此其染之以紫草色近玄昔之紫近絳亂朱者北紫也。今我國にて染ける紫色は、紫草根に蘇枋木の煎汁及灰をさして染なすものなり。これ黑赤の間色にて、紫草紫石英の紫色と正に相おなじ、おもふに宋人のいへる油紫なるべし。今人但今の紫色をみて所云近絳北紫をみざれば、朱を奪ふの紫を疑ふのみ

囲玉かつま三之巻に云、山中道まろかいへりしは、万葉の歌によみたる室の木といふものは今もいづこにも多くある物ぞ美濃の不破郡多藝郡などにて、ひむろとも、ひもろ杉ともい

むろのき　万葉巻三に、天平二年太宰帥大伴旅人過鞆浦日作歌三首「吾妹がみし鞆之浦の天木香樹は常世有ど見し人ぞなき」「鞆浦の磯の室木みんごに相見し妹は将所忘やも」「磯のうへに根蔓室木見し人をいづらと問ばかたりつげんか」また同巻に、離磯にたてる室木、また巻十四に、はなれそに多底流牟漏能木、ともよみたり。豐臣勝俊九州紀行、鞆の浦のくだりに、常世にあれど、とよみたる、いづこぞとたづね侍りけれど、むかしこの浦にありつといひ傳へたれど、今はあとかたも侍らず、さだかにしる人もさならはずとしるしたり。貫之家集に載たる名所屏風の歌の題に、むろふ、津に備中國榫生とみえたり。槃嘗て隼人國に四廻往來せる時、節々に鞆の水門に舟泊て、左方右方をみわたせば、水門の前に離磯あり、その離磯に往にければ、石轉の狹間に杉のきに似て根の偃纏ものあり、問ずしてはやくすでにムロノキなることをしりたり、今其地にては名のみだにしる人もなし、備前備中の磯べにもそこかしこにおひたり。さて今杉の類にヒムロ、タチムロ、スギムロ、ハヒムロなどいへるものは蓋しこの天木香樹を本として名付たるらんか。浦におひ磯におひて、根の纏襲て且杉に似たるものは安房國、上總國、下總國のわたりに、なべて濱杉といへるなり、遠江にてベバフといへり、べ

ひ、伊勢の員弁郡桑名郡のあたりにて、たちむろ、はひむろといひ、尾張の羽栗郡にて、ねずむろとも、べぼの木ともむろともいへり、すべて山におほき木にて、地にはふと、高くたつ

バフてふ詞を考るに、根偃(ネバフ)といへる言の訛たるなるべし、はた其ベバフの根を伐て、遠江より江戸に出して、蚊やり木の料とす、其香氣柏(ビ)木などよりも勝なり、天木香樹の名のゆゑあるをしるべし。これ泉州府志に載たる杜松也。志に云、其葉如杉而小尖勁如刺大如松而文細其色赤亦有爲柱者。斯方沿海の地に生るゝものは皆枝幹ともに根とおなじくはひまつる也、三河國甲斐國の山中に生るものは喬木なり、其子は沿海のものに比れば稍小なり、俗或はこれをボロスギといふ。さてまた檉のムロノキにあらぬを左のごとし

○爾雅釋木に、檉河柳。注に、今河旁赤莖小楊。疏に、生水旁、皮正赤如絳、一名爾師、枝葉如松。日華本草に、一名赤檉(證類本草に引)　時珍綱目に、檉柳小幹弱枝、赤皮細葉如絲婀娜可愛、一年三次作花、々穗長三四寸、水紅色如蓼花色。五雜俎肇慶府志并に言、一名御柳、今斯方の俗又通じてこの名を呼也、これ檉にあらざる證なり○輔仁和名に赤檉、和名牟呂乃岐。字鏡の無呂、順抄に爾雅の注を引て、檉、一名河柳、注に和名無呂とあるを、契沖が万葉代匠記に、順抄を引て云、檉にカハヤナギとムロとふたつの訓ありと解曉したる、蓋し爾雅を閲せず、猶順抄を讀誤て河柳を和名とおもひたがへり、みつべし、いにしへに檉と稱せしものは、卽今の御

柳なり、ムロノキは即杜松なること明なり　大和本草、檉杉をムロノキといひて、其下に一說ムロノキは杜松といふとあり

むさゝび　万葉卷六、大伴郎女の歌に「丈夫之高円山に迫有ば里に下来流牟射佐妣曾此」卷三に、牟佐々婢は木末求跡足日木の、卷七に、木末に住歷武左佐妣の、とよみたり。順抄に、鼯鼠、和名毛三、俗云、無佐々比と注したれど、毛美てふ名をよみたる歌なし、されば モミ こそ俗名なるべきにと眞淵いへり

むくれし　輔仁和名に、欒華を注したり。順抄には、無久禮邇之乃木と注したり

むかしぐさ　藏玉集に橘也といへり

むぐろもち　字鏡に、鼢、一作ㇾ蚡、注に牟久呂毛知。順抄に鼴鼠を宇古呂毛知と注したり。ウグロはウグモツとて、物の高くなるをなれば、この鼠の土中にありて土をウグロなせればいふなり　〔〇以下五行并次頁白丁〕

むらさきぐさ　藏玉集に藤ゝといへり

むくのきのみ　記に見えたり、はじめにいへるむくの條を見るべし。輔仁和名に、欒を牟久禮之、また順抄に、無久禮邇之乃伎と注せしは、記にいへるものとはことなるべし。欒は本草

むくげのみと訓じたり

に載たる欒葉也、俗には菩提樹ともいへり、その實を念珠に作れゝばいふといへり。留青日札に載たる成道樹もまた菩提樹といへり

むらさきがひ　裡紫(ウラムラサキ)また藤の裏葉などゝもいへり、溝(ミゾ)介の屬之。夫木集「むらさきのかひよる浦のふち瀲は波のかくるぞ花とみえける」この一種にサヽラ介有、またむらさき介といへり

女行

按云、葷布。万葉ニハ軍トアリ

め　記に海布をよみたり。万葉卷三に「然之海人は葷布(メ)苅塩焼無暇髪梳の少櫛取も不見に」葷布は昆布の通音之といへり。さて集中に和海藻、稚海藻、滑海藻、糸藻などくさ〴〵書たれば、ひろくは海藻をメとよむ、メとモと通音なり、昆布はヒロメ之、またナガメまたワキメなどゝいへるも昆布なるにや。源氏葵の卷に「ながめかるあまのすみ家とみるからにまづしほたるゝ松がうらしま」また須摩の卷に「うきめかるいせをの海人を思ひやれもしほたるてふすまのうらにて」またみちのくに盆布(ボンメ)あり、筑紫に黒布(クロメ)あり。藻の字のこゝろは、もの條

に見えたり、輔仁和名には、海藻を之末毛、また尒岐女、また於古とも注したり。海藻を祝菜に用ひし事は、なゝくさの條にしるしたり　〔〇三行余白〕

めかま　輔仁和名に香蒲を注したり　〔〇三行余白〕

めはじき　順抄に茺蔚を注したり、即益母草之

めかつら　順抄に椎を注したり。かつらの條にしるしたり

めごくさ　輔仁和名に蓍實を注したり

圏めしいろ　滅紫色　〔〇以下六行幷次頁白丁〕

めざましくさ　万葉巻十二に、あかつきの目さましぐさ、とよみたるは、一種の草にはあらで、わすれぐさ、おもひぐさ、また後にいふつれ〴〵ぐさ、わらひぐさ、なぐさめぐさ、なごゝいへる類之。またいつの比よりか茶のことをもいへり　〔〇以下六行幷次頁白丁〕

毛行

も　順抄に、藻を注したり、崔禹錫を引て云、沈者曰レ藻、浮者曰レ蘋。藻は沈着なればば沈没り

義にしてモと云といへり。うきぐさの條を併せ見るべし。万葉卷七に、海藻苅舟をモカリブネとよみたり。また神代紀におきつ茂幡(モヘ)とよみたり、式には海菜をモハとよみたり。游清云、古昔にモ、メ、ム、シといふは皆物の多く集る義也。モロ〳〵といひモツル、なごいふと同じく、此藻てふ物は多く集り寄て、もつれたる物なればモといへり、またメといふも同義也。小鳥にメの名あるも群の約めメ也。武藏國の海濱の漁人は藻をムとよぶ也。是にて藻(モ)は群(ムレ)もつれたる物といふ事を知べし　〔○以下九行余白〕

もけ　順抄に木瓜を注したり。後にはボケといひしに、また櫨子をも俗にボケといふゆゑに木瓜をカラボケといへり。源君美木瓜考に朱舜水の說によりてモケはマルメロ也といひけれど、近來舶傳の活木木瓜の實を結べるを見るに、榲桲のマルメロにはあらで、まさしく醫藥に載來れる木瓜にたがひなし、源公いたづらに寸陰の暇を費やしたり

もゝ　記に桃子をモ、ノミとよみ、神代紀に道邊有大桃、万葉卷七に、桃樹成哉、卷十九に、紅に保布桃花。さて李をスモ、、杏をカラモ、、楊梅をヤマモ、などいへるは、皆桃子をもとゝしていふなり。さていにしへは禁中にて十二月晦日追儺(ツイナ)を行はるゝ時に、殿上人桃の弓、葦の

矢たもて疫疾を祓ふとあり、また桃符桃梗などの事も有り、內裡年中行事に詳之

もみ　應神紀に、煮二蝦蟆一爲二上味一、名曰二毛瀰一。桃花老人、公事根源云、吉野國樔人煮レ號二毛瀰一而食レ之、以爲二美味一

○鼺鼠を注したるは順抄に見えたり、また俗にムサヽビといふといへり

○樅を注したるはまた順抄に見えたり、おものきの條見つべし。また糙をもいへり、いねの條みつべし

もり　森をよみたり。杜をよめるは社を木苑といへれば木苑は即森之、その社を誤て杜に作り、これをモリとよみ、後世竟改むるとなかりしなり。万葉卷〔〇十〕に「朝旦我之見之柳鶯いきゐて鳴べきもりにはやなれ」また源氏みをつくしの卷に、木だちしげくもりのやうなるをとも書たり

もず　万葉卷十に、春し在ば伯勞鳥之草具吉雖不所見、また秋野之草花がすゑに鳴百舌鳥とよみたり。順抄に兼名苑を引て、鵙をよみたり。紀に百舌鳥、漢語抄に伯勞をよみたり。按に呂覽功名篇云、今之南蠻反舌人、また杜少陵が詩に、百舌來何處重々祇報春知音兼衆語整翮

豈多身。この二書によるに、こゝのモズはかならず百舌なることをしりたり、百舌は則反舌と

〔○以下七行餘白〕

もくさ　艾をいへり。さしもぐさの條にくはしくしるしたり

もづく　順抄に水雲を注したり。式の御贄に若狹國毛都久。これ龍鬚菜なりといへれどい
かゞ、正に海蘊なるべし。龍鬚菜はシラモなるべし、備前國産にあり

もみぢ　万葉卷八に、大津皇子「經もなく緯もさだめず處女らがをれる黄葉に霜なふりそ
ね」後拾遺集「もみぢば・にしきとみゆと聞しかどめもあやにこそけさは成ぬれ」後撰に、けふは
なりぬれ　こゝにいふ黄葉、紅葉をモミヂといふは、卽漢土に云丹楓におなじ。順抄に漢語抄を引
て、雞冠木、注に賀倍天乃木、また立成云、雞頭樹、加比留提乃木、今の俗に凡ていふモミヂに
して、漢土の俗には是を野雞楓といへり、野鷄は雉なり、宋の袁褧楓窻小牘自序云、日對窻西
烏桕省念舊聞得數十事錄之以備遺妄時晩秋蕭瑟暮丹葉殘霞來射几案錄成輙呼酒落之名曰楓
窻小牘、これ烏臼樹の丹葉をこゝに楓といへれば、楓は丹葉の泛稱にして、所云丹楓なるこ
としるべし　〔○三行餘白〕

もちごめ　字鏡に餅米を注したり。モチシネといふは餅稻なり、餅米は爾雅にいへる稌にして、後に稬といひ、稬音愞、俗に糯また穤に作るとみえたり。延喜の御宇、近江國より大嘗會の供御に奉りし時、大伴黒主「あふみのやか賀みの山をたてたればかねてぞみゆる君が千とせは」

もちむぎ　穤麥之、大麥の類にして皮なく、裸麥のごとし、飯にも麪また糕にも作せる之。或は俗に朝鮮麥といへるもこれなりといへり

もゝしぬ　万葉に百小竹をよみたり

もゝのみ　記に桃子をよみたり

もろなり　式に諸成。けだし胡頽子なるべし、今いふグミ也

もみのき　樅をいふ之。おものきの條を見つべし

もゝとり　万葉巻五に、毛々等利能、巻六に、開花之色目列敷百鳥之音名東敷とよみたり

もちどり　万葉巻五に、母知騰利のかゝらはしもとよみたり。黐にかゝれる鳥之

もかつみ　花かつみの條にしるしたり

もゝよぐさ　万葉卷〔〇二十〕に佐野生玉部足國の歌に「父母之(ガ)とのゝしりへの百夜草もゝよいでませ吾來る左右(マデ)」或說に月草なりといへど、この草も一草且殖生の草にはあらずなん

もしほぐさ　新古今集、賀、源家長「もしほぐさかくともつきじ君が代の數によみおくわかの浦浪」源氏幻の卷に「かきつめてみるもかひなしもしほぐさおなじ雲ゐのけぶりとをなれ」さて今もみちのくにては藻草をかきつどひて、それを燒て塩をとるし、其名も今に藻塩草といふといへり

ものみぐさ　藏玉集に松なりといへり

もゝちどり　万葉卷十六に「吾門之榎實もり喫(ハム)百千鳥千鳥は雖來君ぞ不來座」また貫之家集に「百千鳥こづたひちらすさくら花いづれの春かきつゝみざらん」これ卷九によみたる、春鳥の啼に鳴乍とよみたる春時の諸鳥なること明かし。源氏御法の卷に、ちどりのさえづるも笛(フエ)の音におとらぬこゝちしてと書たるは、春鶯囀の曲名によせて書たるを、式部も鶯と心得たるなどいふ說もあれど、こは文章をかしくあやにしたるをや。百千鳥さへづる春はこ

いふを、鶯と心得たるはいふもかひなし

ものあらがひ　田螺のいこも小なるに似て、唇のかた尖りて、いろは水黄(ウヽギ)之、サヽノ露など、いへるもいにひこし。或は今ワレカラこいふ介之といへり、こはたがへり。後撰集に、戀五「蓮の葉のうへはつれなきうらにこそ物あらがひのつくこいふなれ」

もふしつかふな　万葉巻〔〇四〕に、高安王「おきへ行へにゆき今やいもがため我すなごれるもぶしつか鮒」夫木集、公賓「ますらをが藻ぶしつか鮒ふしつけしかひやが下も氷しにけり」或云、藻にかくれて臥る鮒之、つか鮒は束鮒にて、手一束はごある鮒こいへること云云

〔第八冊　終〕

蒲柳矢に作ると左傳にみゆ

國史草木昆蟲攷卷八

也行

やなぎ　順抄に楊を注したり、また柳を之太里夜奈木と注したり。万葉巻五に、阿乎夜奈義、また垂柳と書てシタリヤナギとよみたり、またシダルヤナギともよみたり。ヤナギを矢の木といへるは、民部省式に箭を造る柳箆四百廿、油絹料二百隻とみえたり、油を用うるはけだし油をもて柳箆の性力を助くるなるべし。按るに尓雅の説に、楊一名蒲柳、生澤中、可爲箭笴、とみえたり。されば宋世以前にも柳箭を用ひしことしるべし。東璧云、楊枝硬而揚起、故謂之楊、柳枝弱垂流、故謂二之柳一、王愼旃が連久釋義にも此説を載たり。さるを開河記に、隨煬帝御筆寫賜垂柳姓楊曰楊柳、これ好事の者の爲ところえ、すでに詩に昔我往矣楊柳依てとみえたり、その妄なるをしるべし。尙つばらに田藝衡が香宇外集にもこのことを說たり

やまし　古今物名にみえたり、いまだ考へず

按云、譽をとるものゝ、印本稱二譽作者一也

やまぶき　順抄、欵冬の條下に、万葉集云、山吹花。欵冬と山吹と別なるとは凡例にしるしたり、万葉巻二に載たるに「山振の立儀たる山の清水をば酌に行めど道のしらなくに」巻八、厚見王の哥に「河津なく神なび川に影みえて今や咲らん山振の花」また、山振の咲たる野べの都保湎美禮ともよみたれば、即春さく山吹の花にして、所云棣棠也、これを誤て棠棣としるしたるものもあり。江談抄に載、點着雌黄天有意、欵冬誤綻暮春風、大隅守清原爲信云、故親父典藥頭眞人相談云、昔中書大王大納言たりし時、大王の第に詣て、地風流に富、天煙霞を縦にし、青陽の時に當りて、黄花盛に開くをみる、時に大王欄干に憑此句を詠ずるものあり、其人朱雀院に於て作る所也。其氣色をみるに譽をとるもの也。爰に父眞人從容して言、欵冬、和名山不々支、本草にみえたり。其花冬開、今欵冬を以て山吹となすは誤也。こゝに於て中書大王成感悟云、學者に於て前に詩をいふべからず。欵冬を以て山吹となせし正誤のはじめなるべし（朝野僉載に清原眞人爲時といふ醫師あり、是同姓、猶尋ぬべし）さて山吹の實ならぬといひしは、後拾遺集兼明親王のうたに「なゝへ八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞかなしき」よみたるよりいひそめけん、この花おほかたは實ならぬなれど地によりて黑きみのなるもあり、

まふきには實ならぬなれど一重やまふきには實なるもの之

ふつになきにもあらず。夢溪筆談、羣臣群芳譜十一に棣棠は即今云ヤマブキ也、蒔圃同春に黄棣棠、肇慶府志に地棠一名廲葉棣棠、金華府志に金棣棠、王路花史に單葉者名ニ金盌喜水一（陳扶搖花鏡引之）是皆一物之〇一種花の白きをシロヤマブキといふ、これは花ごとに黒き實のなりしものゝ。趙氏醫貫に鷄廲とあるはこれなるべし

やまゑみ　字鏡、順抄幷に黄精を注したり

やますげ　山菅之。万葉卷四「山菅の實ならぬことをわれによせいはれしきみはたれとかぬらん」すげの條にしるしたり

やまゐ　万葉卷九に、數十引山藍用摺衣とよみたり。今別に山藍といへるものなし、たゞ琉球の屬島にて蕃布を染る藍は自然に生るをとるといへれば、あるはこの蘗をいへるにや

やまなし　六帖に「世の中をうしといひてもいづこにか身をばかくさん山なしの花」清記に、やまなしの木といへるも是なるにや、今いふものは牛李の屬なり

やまぢさ　万葉卷十一に、山萵苣のしら露重く浦經る心を深くわが戀やまず」卷七に、山治左の花にか君がうつろひぬらん、卷十八に、よの人のたつることだて知左の花。六帖に「我が

如く八めまれらにおもふらし白雲ふかき山ぢさの花」或はいふ今山野の俗にチシヤノキミいふものこれ成るべし。槃按に、集中に木によみたるはしるしなし、ましてチサノキの花は色白きものなれば、うつろひぬこいへる詞によしなし、萵苣の字を借用ひたれば、蓋しは草なるべし。さて武藏國、相摸國山中にイハチサ一名イハナミて、葉はげにも菜蔬のチサの葉に似て、石轉の苔むしたる所におふものあり。その葉は春のすゑにもえいで、夏のきて一二莖をぬき、桔梗の花に似たる小ぶゐが七ふさ八ふさつごひて咲くゑ。その色はむらさきなり。箱根山かまくら山などにいさおほし。このヤマヂサは應にこれにやあらんか、順抄に木草を引て、賣子木を賀波知佐乃木と注したり、これ山萵苣にむかへたる名なるべし

やまどり　天智紀、山鷄をよみたり。順抄に、鵔鸃を注したり。万葉巻八に、木能山鳥、また巻十四に、夜麻杼里のをろのはつを、ともよみたり

やまがら　文治三年百首、信實「冬野にはこがら山がらこびちりてまたいろ〳〵のくさの原かな」これ今にもいへる山がらなるべし

やうかひ　空穗物語俊蔭の巻にみえたり。こは後にしるせる、やくかひの音便にや。醫方

に用ひしヨウカヒは貝子也

やくかひ　順抄に錦貝を注したり、且云、西海に夜久島あり彼島出すところ。釋日本紀注に私記を引て、琰玖は西海の別島なり、美貝を出す（南島志の序に、推古天皇二十四年、琰玖人來南嶋朝獻は蓋しこれよりはじまる、是歲は隋の大業十三年之。隋書に邪久に作る、此今の琉球之、その琉球といひしは其國人みづからいひし稱之、故にいにしへかつてりうきうといはずといへり）今琉球奄美島等の海中よりこの貝を產すといふ、世つねにあり。或は朝鮮さゞえといふ、げに榮螺に似て大旋文高く起て角なし、內に寶光を含めり。寶器螺何につくるもの或は此殼を用ふ、いと小なるはまれ之、和歌の浦にて龍天螺といふ、或は青珠といへり、外青黑にして內は玉光をふくめり

やほたて　万葉に、わらはべも草はなかりそやほ蓼をほつみのあそが腋くさをかれ。やはいやの上略にて、穗のしげき蓼といふとなり

やつかほ　八束穗は彌束穗之、束は手一束の事にて、稻の穗のながさの幾束もあるといへる之。兼光のうたに、神代よりけふのためとや八束穗に長田の稻のしなびそめけん

圖 やまゆり

古事記傳廿卷三十一丁云、山由理草は百合の一種なるべし、此より外他古書に見えず、和名抄にも百合和名由理

と一種のみなり、万葉ノ哥には佐由理、姫由理と云はあり、山由理は百合紅花ノ諸名ニ山丹ト是也と新井氏ハ云り、さもあらんか。万葉によめる佐由理はたゞ由理なるべし、佐は多く添て云辭なればこ。姫ゆりは別に一種にて、夏の野のしげみに咲るとよめるなど、かの漢名山丹といふ物と聞ゆ、今世に姫由理といふ物も山丹なり。さて山由理てふ名は他に見えざれども、凡て木草の名に山某と云多ければ、此姫由理も山由理と云つべき物なりかし。師は山ノ字を少の誤として佐由理と訓れき、然れども佐夜、佐枝など云類の小とも少とも云は、後世のことにこそあれ古書にはさらに例なきことなり、其上此も諸本皆山ノ字にて、少と書る本もなければかたぐ從ひがたくなん○山由理草之本ノ名云ニ佐韋(サヰ)ト也、新井氏百合をユリト云はもと韓地の方言と聞ゆと云りき、若シ此説の如くならば信(マコト)に古ノ名はサヰとぞ云けん。師の冠辭考さきくさの條に、古に三枝と書てサキクサと云し物は佐由理花なるべしと云て、此處の文を引て、サヰとサキと音通ふと云れき。信に古は此ノ佐韋草を三枝とも云て一ノ物なるべし云々　〔○次頁白丁〕

やまうばら　輔仁和名に、薔薇を注したり、順抄おなじ、一云、之々乃久比乃木。丹抄に於毛止久佐と注したり、これ今もいふオモトならん。オモトは花鏡に載たる萬年青之。眞の薔薇は下野國日光山にあり、俗に棕櫚草(シュロクサ)、また日光蘭といへり

やへむぐら　万葉に、葎草を牟具良と、八重牟具良ともよみたり

圍檜抓手云卷四四十二丁山橘藪

やまつゞら　万葉巻十四に、安蘇夜麻都豆良とよみたり。こはツヽラフヂをいふにや

やはらくさ　順抄に、黄蓍を注したり

やまふゞき　ふゞきの條にしるしたり

やいもぐさ　式に熟艾をよみたり

やまねぐさ　藏玉集に蕨〻こいへり

やまつばき　万葉巻七に、あし引の山海石榴、とよみたり。つばきの條むかへみるべし

やすまのき　仁徳紀に、かはくまに立さかゆるも丶たらず椰素磨能紀こよみたり。こは八十と枝の多く立榮る柧棱(ツマ)の木を、かくはつゞけなし給へるならんこいへり、素磨こ曾波は通へりこいへり。尙そばのきの條をむかへみるべし

やまわらひ　順抄に、狗脊を注したり。これ今いふぜんまひなり

やまたちばな　今の俗にいふ山萬兩、藪柑子の類をいへり。按に蘇敬唐本草に牡丹を注して云、苗似羊桃夏生白花、秋實圓綠、冬實赤色、凌冬不凋、根似芍藥肉白皮丹、土人謂之百兩金、長安謂之吳牡丹者是眞也、今按俗用者異於此別有臊氣 證類本草卷九に引〇有臊氣といふもフカミクサの根をいふなるべし 蘇頌

柑子ナラバ供物には不可用今ノ世ノ柑子ナルベシ

圖經云、百兩金、苗高二三尺、有幹如木凌冬不凋、葉似荔枝初生背面俱靑、秋後背紫面靑、初秋開花靑碧色、結實如豆大生靑熟赤 證類本草卷三十に引 此說は卽實牡丹にして、こゝの山万兩、ヤブカウジの類也。輔仁和名に、牡丹、一名百兩金 出蘇敬注 和名也末多知波奈。万葉卷十九「此雪之消遺時に去來歸奈山橘之實光も將見」また卷二十「けのこりのゆきにあ倍てるあしひきの夜麻たちばな乎都刀に通彌許那」榮雅抄にも、山橘は世俗に藪柑子といふ草なりといへり。これヤマタチバナなるフカミグサの牡丹にあらず、輔仁和名は唐本草によりたれど、單に牡丹一名百兩金と出せしは與の字をわすれたり

やまひゝらぎ　順抄に巴戟天を註したり

やのへのこけ　順抄に屋遊をよみたり。こけの條をみつべし

やましたぐさ　藏玉集に荻也といへり

やまがきのき　古今物名にみえたり

やまとりかけ　山鷄鹿毛也。順抄に赤𩣡を註したり、禮の月令に載たる赤𩣡之

やまなしのき　やまなしの條にしるしたり

補

延喜式大學寮云、盛別貢物韓櫃二

やもめがらす　遊山窟に病鵲をよめり

やなぎをあむ　孫文寶が故事なり。夫木集、公朝「うき身には柳をあめるかひもなしさらぬ人だに眉をひらくに」蒙求云、楚國先賢傳云、孫文寶到洛陽在大學、左右得一小屋安止母、然後入學編楊柳爲簡以寫經とみえたり　〔○次頁白丁〕

伊行　既出

由行

ゆり　萬葉卷七、卷十一に、道のへの草ふけゆりとよみたり。皇極紀に、大伴馬飼連獻百合華。さゆりとおなじ

ゆふ　萬葉卷三、赤人の歌に、おく山賢木可枝に木綿とりつけて、また卷二長歌、木綿花のさかゆるともよみたり。延喜内藏寮式、木綿一十斤。豐後風土記に、柚富郷在郡西、此郷之中栲木多生、常取栲皮以造木綿、因曰柚富郷、古語拾遺に栲（タク）と穀（カヂ）とはひとつものにて、木綿

合結木綿二斤八兩°內、塞云小木綿、二斤雜又云木色淡二綿大、斤南、又云木三島枚綿四頭又鴨綿草木枚二十云、又木安甕枚綿四、ナドた見エ擬り皆南斤幾ヒト云幾、又枚ト云、

はその皮もて造れるものなるとしるべし。順抄、祭祀具部に、木綿、和名由布、拆之多白絲者也。また木部に陶隱居本草を引て、杜仲、一名木綿、和名波ひまゆみ、拆之多白絲者也。楮綿おなじ。これ木綿は即杜仲なれど祭祀に用ふるを由布といひ、藥に用ふるをはひ末由美といふたるべし。さて由布、太久由布、志良由布などは楮のとなるべきに皆栲の字を用ひたり。按に栲は山楮色白と尓雅にみえたれば、栲の漢字を借たるならんか。またおもふに、いにしへは杜仲も穀も栲も皆其皮を剝て祭祀に用ふるをなべてこれを木綿といへりけん、その莖をもて物に命せるは上つ世の俤にて、名はおなじうして物はとえ、今神事にさか木が枝に麻をとりつけて、ものを潔むるもいにしへの遺風之。万葉卷二に、神山の山邊眞蘇木綿短木綿、また卷三に、木綿疊手にとりもちて、ともよみたり。式に安藝木綿あり、いにしへは安藝よりもそいよきを出せしならん。わたの條むかへみるべし

ゆし　順抄に、柞を註したり。はゝその條をみるべし　〔〇二行並次頁白丁〕

ゆさゝ　万葉卷〔〇十〕に、みちのへの湯小竹のうへに霜のふる、さよみたり。篠の屬なるべし、されど小竹とあれば篠よりまた小え、こは篠なるべし。漢人の賦に茅菁とみえたり。

布帛ノ類ハ幾疋幾端ト云、然レハ式ニ云ル木綿ハ、カヂノ木ノアマ皮白クシテ裂ケバ糸ノ如シ、裂ザレバ搨ノ如シ、大學寮ニ韓檟ヲ結トアルハ纒ナルベシ、カヂノ木は穀木也

さてゆざゝのゆは多きをいふ、五百(イホ)を約むればよこなるを、ゆにうつして云ゝ。湯津桂、湯津岩村の湯ご同義ゝ　〔〇以下四行並次頁白丁〕

ゆふがほ　源氏夕顔の卷に「心あてにそれかこぞみる白露の光そへたる夕がほの花」これ葫廬の花ゝ

ゆつるば　万葉卷二に、いにしへにこふる鳥かも弓弦葉の、また卷十四に、あじくまやまの由豆流ばこよみたり。式にも弓絃葉ご書たり、清記にはゆづりばと書たり。眞淵のうたに「野も山もみ雪ふれごもゆつるばの春の設はをりもまごわず」

ゆめみくさ　藏玉集、櫻ゝこいへり　〔〇以下本頁白丁〕

ゆふかけぐさ　万葉卷四に、吾屋戸之暮陰草。是も檜原の山陰草などゝおなじく、ゆふつくる陰にある草をいふなり

ゆふがほくさ　藏玉集に槿ゝこいへり。按るに萬葉卷十に「あさがほは朝露おひて咲こいへど夕陰にこそ咲まさりけれ」とよみたるによりて名付しならべし。此歌のこゝろは、あさがほの條にしるしたり

ゆふたまぐさ　藏玉集に、竹の露之こいへり

ゆふつけどり　木綿着鳥之、鷄をいふ之。古今集に「逢坂のゆふつけどりも我ごとく人や戀しき音のみ鳴らん」「相坂の夕付鳥にあらばこそ君がゆきゝをなくなくもみめ」「たがみそぎゆふ付鳥かから衣立田の山に打はへてなく」顯昭袖中抄にいふ、世の中さわがしき時四境祭とて、おほやけのせさせ給ふに、鷄に木綿をつけて四方の關にいたりて祭なり

〔○三行余白〕

衣行 既出

與行

よね　こめの條をむかへみるべし

よし　いにしへに蘆葦をヨシといへることなし、皆アシとのみいへり、あしの條をむかへみるべし。今は蘆葦を總てヨシといへり　〔○以下四行幷次頁白丁〕

校云、我がよふる流本我もふり

よもぎ　順抄に、兼名苑を引て云、蓬、一名蓽、注に艾也、和名與毛木、また本草を引て云、艾一名醫草。按に蓬に艾の稱なし、但說文に蓬は蒿也、蒿また艾に非ず、禮の內則の疏に、蓬華如柳絮、詩衞風首如飛。蓬をヨモギとよみしは、蓬は蒿也とあるによつて、かよはしたる也。顏師古が匡謬正俗に、蒿以爨神者、艾用灸病者なりとみえたり。さて艾の生たるまゝの時をヨモギといひ、これを采て日にさらし揉て灼草となせしをばサシモグサといへり。またこれを病に用ふる時にヨモギと唱ざるをもてしるべし。また歌に蓬をヨモギとよみたるは、一草の名にあらず。源氏蓬生の卷に「たづねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもぎのもとのこゝろを」また六帖に「我がよふるよもぎも宿にしげりにしかごにおこする人は誰ぞも」また「秋風やよもぎの宿に吹ぬらん蟀なつかしく鳴きりぐ\す」また「ふるさとゝなるぞわびしき夏衣よもぎのうへの露みるごとに」これらはなべての草をさしていふ也。漢人の蓬字を用ふるもまたおなじ心也。蓬藋に隱、また藜藋に逃る、などゝいふも凡て草聚のうちに潛居るをいふなり。さて又端午に艾を用ふるとは、晋の宗懍が荊楚歲時記に、五月五日采艾懸門とみえたり。万葉卷十八に、五月能安夜女具佐余母疑可豆良伎とよみたれば、われ

にありてもまたはやし。また藤原冬嗣の撰したる弘仁格式にも、五月三日平日に菖蒲蓬花など南殿の前におくとみえたり。清記にも、五月五日の條に書たり○痛に灸する灼艾は、さしもぐさの條にしるしたり　〔○以下二行并次頁白丁〕

よはぐさ　藏玉集に、螢のやどる草といへり

よちうを　主計式に、輿治魚刺とみえたり。今能登國産に刺鯖あり、このサシサバは蓋しいにしへの製作の遺りたるべし

よなごり　秘藏抄に、うこふなりといへり　〔○以下五行并次頁白丁〕

よふこどり　万葉卷一に「倭には鳴而歟來らん呼子鳥象乃中山呼ぞ越なる」また卷八「かみなみのいはせの杜の呼子鳥痛な鳴そ我戀まさる」また同卷に「尋常にきくはくるしき喚子鳥聲なつかしき時にはなりぬ」古今集、春上「遠近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな」誹諧に「カンコドリ」といひしは即喚音を呼しなり。この呼子鳥を說もの、或は布穀鳥、或は郭公、或は鹿、或は猿なりと各が樣々にいへり。そのよきに從べし。槃また比興の意によりておもふに、此鳥は幽山深林にありて、歌よむものもおほくは其鳴聲を

のみ聞しりて、人どには其かたちを詳にはしらぬなるべし、されば後に但其名のみのこりて、其物は竟にかくれてしるものなし。また都鄙によりては其名を別に呼なせし所もあらんか。按に今或深山べにて佛法僧とて鳴聲をもて名とす其聲のみ聞しりて名をよぶ鳥あり、深山に栖て其鳴聲は何にたよりけん、おぼつかなく物よぶごとくに聞ゆなれば、閑居旅愁の人、その便りなく鳴聲によりて、猶寂寥のおもひを起しつらん、此鳥も呼子鳥の性情に似たり。むかし下野國日光山麓にてみたるに全く鳩類之。衡岳志に羅念菴別楚石詩の自注に云、烟霞峰下谷中有鳩類呼佛聲俗名羅漢鳥、また華夷攷に、念佛鳥、大如鳩羽黃褐翠碧間而成文音韻淸滑如誦佛聲、一名念佛子、四川總志に載たる呼佛鳥も即是成るべし。また深山叢林中に栖ける慈悲心といへる鳥あり是も鳴聲を名とせり狀は雀に似て大なり、尾は稍長し、眼瞼黃色にして嘴脚は蒼黃也、全身に斑紋あり、總ては稚鷹の如くまた或は子規にも似たり、この鳥もおほく鳴聲のみにて其名をしれる之、山樵といへどその形をしるものはいと〳〵稀之。此鳥の性情も佛法僧とおなじければ併てしるす。後撰集卷一に、よぶこ鳥を聞てとなりの家に送り侍りける、春道列樹「わがやどの花にな鳴そよぶこ鳥よぶかひありて君もこなくに」このうたに

よれば・よの常の林禽にして、且春鳥之。ふるくによみたる山禽にはあらず

よりこうを　主計式に輿理度魚腊あり

よちをさし　順抄に魥を注したり

よわたこり　莫傳抄に螢之こいへり

よつはぐさ　莫傳抄に檜之こいへり

よはひぐさ　藏玉集に菊之こいへり

よしろぐさ　藏玉集に蘼蕪をよみたり。莫傳抄に大豆また牡丹之こいへり、秘藏抄おなじ

よろひぐさ　順抄に白芷を注したり　〔○以下六行并次頁白丁〕

神異記云、越前雪深國也、其國土民於〈川〉極山穿雪〈山〉得鳥獸或鷄形或狗類也是雷獸也雷鳥也

國史草木昆蟲攷卷九

良行

らい　夫木集、後鳥羽院御製「しら山の松のこかげにかくろひてやすらにすめるらいの鳥かな」東涯が輶軒小錄に、宋の晁補之が新撰北山記を引て鶆也といへり。按に尓雅に鷹鶆鳩、注に鶆當爲鷞字之誤耳、鷹音鶯、疏に昭十七年左傳鷞鳩氏を引、杜注云、鷞鳩鷹也

らに　ふぢばかまの條をみつべし　〔○以下一行幷次頁白丁〕

らいし　内藏寮式に檑子幾合と有て、式内凡二十六箇より貢進するとみえたり。また順抄、器皿部に、檑子有、酒器也、蓋しその形によりていへるにや、今いまだ詳考せず

〔○以下六行幷次頁白丁〕

里行

りむだう　淸記にみえたり。龍膽の唐音の轉じたるなるべしといへり

りやうふ　新六帖の題に、令法と書たり。はたつもりの條にくはしくしるしたり

りうこう　順抄に、林檎を注したり。さて林檎、一名來檎といへるは、もと來禽にして、王羲之林の字を製して木木を來に作りたり、東束を棘に作るがごとし、尚詳に宋の黄伯思が法帖刊誤にみえたり。さるを禽來て果熟すと注したるはいたく固説を傳へたるものと、俗儒の笑ふべきことかくのごときこといとおほかるべし　〔○以下九行余白〕

りうびんむしろ　式に龍鬢筵、細貫筵、右武藏國交易所進とみえたり。今は琉球より産せし黄席をのみいふ也。按にこれは香山縣志にいはく、黄ハ水草之といふものと。八閩通志にも黄生二三稜一尓雅謂二之莞一、江生者爲二淡黄一、近海者爲二鹹黄一、また肇慶府志に、これを三稜草といへり。尚詳に箋疏にしるしたり　〔○以下四行並次頁白丁〕

留行

〔○一枚白紙〕

禮行

れんせむあしげ　順抄に、連錢葦毛。こは騨也　〔〇以下八行幷次頁白丁〕

呂行

〔〇一枚白紙〕

和行

わせ　万葉卷十に「をとめらが行相の速稲乎苅時なりにけらしも芽子花咲」とよみたり。行相は里の名也とぞ 奥沖云、立田行相の坂あり また秋のはじめいとはやく熟ければ夏と秋との行合といふこゝろなり、また人の行通ふ所の早稲は、とりわけてめでたきものなればかく名づくともいへり。下總國葛飾郡の内二合半領の早稲は東國第一の早熟也、萬葉卷十四にも可豆思加和世ともよみたり。匠材集に、ワセを早代といへり、代と世と通へり、俗に早手ともいへり

わた　万葉卷三、沙彌満誓、詠綿「白縫筑紫乃綿者身著而未者伎爾杼暖所見」とよみたり。これ綿はいにしへすでに有けるに、中つ世には絶にしや、類聚國史延暦十八年の條に、天竺の人綿種をもたらし、これを諸國にうゑさせ給ひしに後絶たり。新六帖に「しきしまのやまとにあらぬ韓人のうゑてしわたのたねはたえにき」此歌夫木集には衣笠内大臣建武の比の人々、玄恵法印庭訓往來十日ノ狀襖單袗之絹笠襂木綿等各一配、室町殿日記に、天文九年の

狀の文言、中間衆の木綿三十五疋買取、この日記は楢林長高著天文永祿の比の人ゝ、貝原好古が和事始に、文祿年中に再度渡るよし、されど庭訓に見えたれば夫より前既有けんか、文祿年の比海外よりその種をつたへ、これより以來しげりにしげり日用のものとなり、その綿花をいにしへ蝶といひ、實を桃(モヽ)といふといへり。多田綿、蝦榛(ア)綿、神樂綿、剜綿(ヲリワク)、絲綿等の名あり、そのかみは茅の花をもて綿絮にかへ用ひたり、よて今も俗にホヲレイといふは穂入の轉じたるなり、或は大和國蓬萊村よりいでしを良とせる故にしかいふといへり、ともにいかゞ

わに　記に、和邇といへるは鰐をいふなるべし。神代紀に八尋熊鰐、クマワニとよみたり。唐の韓愈移文もて鰐魚を祭り、宋の陳堯佐また製鰐魚の文あり

わし　神代紀に、天日鷲神あり、鷲をワシとよみたり。順抄に、鵰を於保和之、鷲を古和之と注したり。万葉卷九に、鷲住(ワシノスム)筑波、卷十四に、筑波禰に可加奈久和之ともよみたり

〔〇二行余白〕

わらび　万葉卷十四に、左和良妣の毛要いづる春とよみたり、蕨をよみたり。或は萁とも書

補證　實伊勢物語注に云、藻につきてあかる虫、へ其時藻を離れたらば命まそべき

たり。紫蕨紫萁といへるは今云ゼンマイなり

わかめ　万葉巻十四に、ひだがたのいその和可米とよみたり、巻十六に、つぬじまの迫門(セト)の稚海藻(ワカメ)、また和海藻(ワカメ)なども書たり。式には稚海藻と書たり、稚和相おなじ。また或は和布(ワカメ)ともいへり。　李時珍食物本草に載たる裙帯菜なるべし。　後の世の七草に海藻を用ひし事あり、なゝくさの條にしるしたり

わさび　丹方に崔禹を引云、山葵、味辛盤作菹食益人作蓋爲快味、注に、和名和佐比。これ今の蘼菜なり

われから　古今集、戀五「あまのかるもにすむ虫のわれからもねをこそなかめ世をばうらみじ」齋宮女御集に「しらなくにわするゝものはおぼつかなもに住むしの名こそ有けれ」御返し「わするらんもに住むしの名をとはゞ貝もありとか海人はつげまし」今の俗にいへるものは蝸牛のいと小なるものにして、その殻やぶれやすければ破殻の義となどいへり。新六帖に「浦による玉にもまじるわれからの身をありなしとこふ人もなし」また「わすれぬやもにうづもれてすむ虫のわれからくして過し年月」

に、藻に付て陸へあげられ身を失ゆへに我からと名付たり

わたゝび　順抄に、木天蓼を注したり。今いふマタヽビ之

わらすべ　宇治拾遺にみえたり、今いふワラシベ之。ワラは稈之スベは空穗之、空木をスデ、空腹をスキハラ、空隙をスキマ、中空簡の如きをスこいふ之。俗に簡稈スグリワラこいへるは、退私録に、スクリは勝こ通じ、あしきを捨てよきをこるをいふ之。按に和音憂本作稭秫こもみえたり、禮記の註に、治穗去ㇾ實曰ㇾ秫或作ㇾ䕸、韻會稾去ㇾ皮爲ㇾ秸、書禹貢注に、刈禾半藁曰銍半藁去ㇾ皮曰ㇾ秸。また俗に稈の袴こいふは苫之、字彙に禾皮なりとみえたり

わさいひ　万葉卷八に、苅流早飯こよみたり。早稻之

わかくさ　万葉卷十一に、靑草をよみたり、春草をもよみたり。仁賢紀に、弱草、注古以二弱草一喩二夫婦一、故以二弱草一爲ㇾ夫。伊勢物語に「うらわかみねよげにみゆるわか草を人のむすばむことをしぞ思ふ」こよみたるは、いもうこをさしいふ之

われがひ　夫木集に「わかの浦にふるきくたけのわれかひも拾はゞ數にまたまじりぬる」

わうさい　式に黃菜こあり。順抄に、崔氏を引て、溫菘味辛是人作二黃菜一常所ㇾ噉者也。注に、黃菜俗云王佐以是其字音之一云佐波夜介。槃むかしこれを黃蘿菜なるべしこおもひしに、

或は菜たねのモヤシなるべしと云、此說げによろし。さてモヤシを薩摩國人はオヤシといふ、共に萌生の義なり。今江戸にては菜たねにて作るを貝割菜といひ、大小豆にてつくるをモヤシといへり　〔〇六行余白〕

わすれくさ　順抄に、兼名苑を引て、萱草、一名忘憂、漢語抄云、和須禮久佐。按に、詩の衞風伯兮章に、焉得諼草、言樹之背、願言思伯、使我心痗。今われ羅願尓雅翼の說を釋していふ、此詩のこゝろは、衞の君の役に立、王の前に馳て時うつれど歸らされば、其婦人おもひなやみて、しばしもその切なる思ひをわすれんとせしかど、おもひたえねばこれをわするべき種をもとめむことをねがひつれど、世にいかでかゝるもののあるべうもなし、といへるを詩をとくもの諼萱同音によりて、竟に萱をもて憂をわするゝ草となしたり。こは陋儒の傅會せし誤なるを、世或は此說に歸たり。詩にいふ諼草は卽藼草、思艸、慰草、泣草などゝいふにおなじ意と、これらのクサといふ詞は、草をさすにはあらで心をよせぬる物をさして、何物にてもクサといふ事多し。万葉卷三、大伴卿「萱草わが紐につく香具山のふりにし里をわすれぬがため」これも伯兮の章の比興をうけてよみたるべし。公任哥集に「わすれ草かりつむ

斗放にけりあこちこゞめぬかまくらの山」この比にはすでに今の俗にいふ一種のワスレグサをいふなり。また後には櫻、また葉などをもよみたり

わかかへで　楓の新樹之、稚櫻、弱歷木のごとし。夫木集に、新樹を慈鎮「若楓青きひとへに紅のはかまこ見ゆる岩つゝじかな」また「あらはれん秋をもしらぬ楓哉こきはの色をしばしぬすみて」六百番歌合、新樹を隆信朝臣「おもかげは時雨む秋の紅葉ばにうすもえぎなる神なみの杜」

わかくぬぎ　萬葉卷〔〇十二〕に「わたらひの大川のべのわかくぬぎわかくしあればいもこふるかも」

わすれがひ　万葉卷一、大伴乃美つの濱尓有忘貝、この外にも卷六、七によみたれど、いづれの貝をさしたるにや。今は讃岐國松が浦にいでしものをめでつるを、殼厚く形扁にして圓きものを。そのうつりは種々あり、唇にいと細なるきさあり、眞白をシラカヒと云。後拾遺集に定頼中納言、定家卿に別るゝとて「松山のまつのうら風吹よせばひろひし人の戀わすれかひ」

校云、ひろひし云ひろひ流本云ひ

わかむらさき　顯昭云、若むらさきとは、初紫といふ心にて、はつしほなどにそめて、色よきをいふか、紅のはつ花染とよめるは、紅は花にて染るに、初にそめたるが色のとによければ、初花染とはよめるを、紫は根にてそむる物なれば、はじめと後とをわきていふべきにあらぬにや。後撰、雜二「むさし野は袖ひづばかりわけしかど若紫はたづねわびにき」また夫木「紫の初しほぞめの新ごろもほどなく色のあかれこそおもふ」

〔〇一行並次頁白丁〕

ゐ

爲行

順抄に蝙蜡を注したり、七卷食經を引て云、其良似ㇾ蚓而大者也。今下總國海撿見川(ケミ)前後にてこの蟲を堀取也、おほくは三四月の間淺潟の泥中にあり、蚯蚓に似て白色肥大、その長さは僅(ワヅカ)に一寸ばかりゝ、これを安房國上總國わたりに運(ハコビ)けるとゝ、某の海人鈎(チ)に着て餌となし鯛をつるといへり。その名をとへばたゞヱサとのみいへり

〇猪を注したるは順抄にみえたり

十題百首寂蓮
ゐもりすむ山下水の秋の色は

校云、珂孚豆
和名抄

○藺を注したるも順抄にみえたり。抄に玉篇を引て云、藺似莞細堅宜爲席。注に和名爲、辨色立成云、鷺尻刺　〔○八行餘白〕

ゐもり　字鏡に蛉を註したり。按に劉珣北戸錄に載たる龍盤魚なり、詳に魚品にしるしたり

ゐのこ　書紀に豕をよみたり　〔○以下七行幷次頁白丁〕

ゐのしゝ　用明紀に、山猪をよみたり。輔仁は猪を爲乃之ゝ注したり、また零羊をも加末之ゝ注したり、之は之ゝの略なり

ゐみどり　輔仁和名に、井中苔を注したり　〔○以下六行幷次頁白丁〕

ゐのくつち　字鏡に、牛膝を註したり、順抄おなじ

ゐのこゝき　順抄に、豬魁を注したり。今俗に袴葛（ハカマカヅラ）、またワンシユこもいへり。この貫を緒に貫て（ツラヌキ）念珠にもせるものなれば、貫珠の轉なるにや

ゐのこまめ　順抄に、珂孚豆を注したり

非知古末女トアリ

惠行

ゑぐ　萬葉卷十に「君がため山田の澤にゑぐつむとゆきげの水にものすそぬれぬ」また卷十一に、おしひきの山澤惠具、とよみたり。新六帖に山澤女妻と書たり、また或は生夏とも書たり。信實集に「七草の數ならねども春の野にゑぐの若葉もつみはのこさじ」夫木集、殷富門院大輔「しづの女がゑぐのわかなは生ぬとや鳥羽田のおもにあぜつたひ行」俊頼云、ゑぐはひろく若なをよむといへり。或は水芹なりといひ、或は烏芋なりといひ、また或は慈姑の小なるをいふともいへり。今越後國頸城郡上吉田にも慈菇の一種その根魁のいと小なるをヱグといへり、この菜は田平子などやうに七草を採し比におひ出るものなり、姑く俊頼の說に從ひてしかるべし

○味に、ゑぐしといへる事は、順抄に崔氏を引て、茹子味甘酸、俗語惠久之。按にこれは酸澀音通なるべし、芋及び稀薟などの味を薟といへり

ゑぬ　順抄に共を注したり。また獲を無久以双と注したり、また抄に、猶尾草を惠沼能古久

佐、葒草を伊沼多天と注したり猶は狗の誤之惠と伊と通へることをしらず、一かたは俗名なるべし

〔○以下八行丼次頁白丁〕

ゑのこ　豕子なり。紀に井ノコとみえたり

ゑにす　順抄に、槐を注したり。字鏡に櫰を惠尓須乃木と注したり

〔○以下七行丼次頁白丁〕

ゑみくさ　順抄に、拾遺本草を引て、女葳蕤女萎と葳蕤を誤りて混同せしなり　一名黄芝。注に、和名惠美久佐、一云安麻奈。黄精、和名於保惠美。按に萎蕤の根を蓋し黄精と稱せるなるべし、名醫別品にこれを判じたるのみ。本草經上藥萎蕤、韻會に萎蕤草木葉垂皃とあり、唐の制に萎蕤冠あり、態に其垂纓の形によりて名づくるなるべし、因ておもふに、草木の萎蕤は卽其苗葉の狀によりて名とせしなり。さて又瑞草經に黄精一名黄芝とあれば、其根の名なるべし、且名醫別品に萎蕤一名地節ともありて、魏の樊阿傳に地一名黄芝、宋の圖經に、隨の羊公服二黄精一法を引て、黄精一名萎蕤、是明かに一物之。陶弘景集注に云、根概節而平、又云、大節而不平、この二種の草今こゝにもこれ有て、概節なるをヱミクサといひ、大節なるをオホヱミと云、其形狀

性味を察するに全く一物なり、但苗根の肥瘦を異にするのみ、李時珍云、黃精其根橫行如萎
甤葳甤橫生似二黃精一、これ其釋正に一物、何に從(ヨツ)てこれを分つべけんや　〔○以下三行餘白〕

ゑぼしかひ　せの條をみるべし　〔○以下九行并次頁白丁〕

ゑぬのこぐさ　順抄に、猗尾草を注したり。猗は狗の誤、莠の類也

〔○以下八行并次頁白丁〕

乎行

をぎ　すゝきの條に、をばなを併てしるしたり

をし　紀、万葉、順抄等皆鴛鴦をよみたり。こゝに名物の學をいふもの、こゝのヲシを鴻鷺なりといへり。按に詩の小雅に、鴛鴦在レ梁、毛傳に云匹鳥也、言はおほく相匹偶するものなればゝ、稽瑞賦に、鴛鴦奚雙、鄭玄云、飛則爲雙止則相耦。毛西河詩傳鳥名に云、陸佃云、雄鳴曰鴛、雌鳴曰鴦、今人家蓄之身具二五彩一、而首戴二纓毛一、何楷古義に云、其大如鶩、其質杏黃色、頭戴二白長毛一垂レ之至レ尾、尾翅皆黑、今婦人閨房中飾二鴛鴦一、以黃赤五采、有レ點者皆鸂鶒耳、王

贄璦山縣志に云、鴛鴦一名溪鶒。按に説文に、元作二溪鶒一、水鳥也、俗字鸂鶒、廖綸璣云、建州圖經云、溪游雄者左雌者右、皆有二式度一、而陳藏器云、鸂鶒毛有五彩、首有纓、尾有レ毛如二船柁一、李白詩に七十紫鴛鴦雙戲、亭幽注に即鸂鶒、これこの諸説をむかへ考ふるに、けだし周に鴛鴦といひ、漢より而來之を溪鶒といふに似たり、さるを宋の羅願、明の李時珍、皆藏器の説に歸してこれを判てり、後人曉りえず、竟に此説に據るゝ

をち　順抄に、芸薹を注したり

をそ　輔仁和名に、獺を注したり　〔○以下九行並次頁白丁〕

をばな　をぎの條にしるしたり

をはぎ　万葉巻十に、春野之菟芽子採而煮良思文こよみたり。うはぎの條むかへ見るべし

をけら　順抄に朮を注したり。天武紀に白朮をよみたり。萬葉に、むさしのゝ宇家良我波奈こもよみたり。うけらの條みるべし

をなぎ　なきの條にくはしくしるしたり

をこし　字鏡、順抄幷に鰧魚を注したり

をさし　順抄に鮁を注したり

をろち　記紀に、蛇をよみたり。神代紀に素尊蛇を可畏之神とこの給ひたり。萬葉に虎をも神とよめり。さてヲロチは尾靈の義といへり

をとり　順抄に、媒鳥をいへり。ヲトリの義、をきむしの條にしるしつ

をさぎ　萬葉に、兎をよみたり。補仁はウサギと注したり

をぶち　尾駮と。後撰集に「陸奥のをぶちの駒も野かふにはあれこそまされなづくものかは」また後拾遺集に「つなたえて離れ果にしみちのくのをぶちの駒をきのふみしかな」をぶちの牧の事は南部舊蹟遺聞にみえたり　〔〇九行丼次頁白丁〕

をしかは　天智紀に韋をよみたり、順抄おなじ。韋は今いふモミカハ即消也・菅相公の像に虎皮を鋪たる圖も、かのいにしへの博士の講席に傚(トラヒ)たるなるべし、詳にとらの條にしるしたり

をぎむし　順抄に、兼名苑を引て、蚇蠖、和名乎岐無之。また説文を引て、蠖、屈伸蟲。このむし頭尾を寄、背を隆くして引よせつゝすゝみ蚑行(ヘヒ)ければヲギとはいふなるべし。ヲギは招

にて、紀に招禱ヲギとよみ、風招カザヲギまた招餌ヲギカフ、招索ヲギナハ、招魂ヲギタマなどよみたり。媒鳥をヲトリといふヲとおなじ。因にまた按に、荻をヲギといふ、招草ヲギといふ義なり、蕨花も招花ヲハナの義なると明かゝ（ヲキ、カヤ、ス、キの考別にしるしたり）

をかづら　　順抄に、楓を注したり。他し國の楓はいにしへこゝに傳へ、今も猶ありて、その葉はこゝに韓蝦手カラカヘデといふものに似て、大且三尖之。夏秋の交に毬實をむすぶゝ、こゝのかづらとはとなり

をふ貝　　記に蛤貝を、をふがひと訓じたり　　〔〇以下三行餘白〕

補

をみなべし　　これ今もいふヲミナベシなるべし、後人もて敗醬とす。按に陶弘景はじめて敗醬を注して云、葉似稀薟、根形如柴胡、斯にいふ女郎花の葉は古今の稀薟に似ず（稀薟の諸說一宗ならず、今は斯にいふヲミナベシに當たり、今しばらくこれによる）其根また今の柴胡に似ずいにしへは（柴胡數種あり、今は只竹葉様のもののみ）蘇敬云、葉似水莨及薇蓊花黃根紫作陳醬色（水莨は蓋し水莨菪、未詳に决しがたし）女郎花の根薇御に似ず、前人其花黃色にして稍醬氣あるをもて敗醬となすのみ。時珍云、初時葉布地生、似松菜葉而狹長有鋸齒。又云、顚頂開白花成簇如芹花蛇床子花。この花葉の釋は其據る所をしらず、然るに或は女郎花の屬にして

校云、蓊、本草

白花なるものとなす（此草の俗名ヲトコヘシ）予は三說信じがたし。さて順抄、草部のはじめに新撰万葉を引て、女郎花倭歌云、女倍芝。注に乎美那倍之、今案花如蒸粟也、出所未詳。また後條に陶隱居を引て、敗醬、和名知女久佐（接るに、敗醬赤眼を治すとすればチメクサと命じ之。此和名の儀之。龍胆草瘡を治するが故にエヤミグサと言ふがごとし）本草和名に敗醬、和名於保都知、一名知女久佐。丹方に久知女久佐（久字恐衍、原書かくのごとし）又云、加未久佐。これ古に女郎花と敗醬とを二條に排せしは必ず見る所あらむ、後人竟に女郎花を敗醬となす、尙且時珍が根據なき說によりて白花の草となせしはいぶかし。凡醫藥の當否古今一定ならざるものは、特にこれのみにもあらず、宜く古によりて其氣味効用を審にし、其眞を索むべし、敗醬氣味苦平、火瘡赤氣惡瘡及産後諸病を治することあり、斯にいふ女郎花其効用微しく相似たりといへど吾は決せず

をとくし　順抄に、赤箭を注したり

をとめくさ　式に、山橘子蘘草（ヲトメクサ）實各二擔とみえたり。何てふくさにや

をかとゝき　順抄に、桔梗を注したり

をはなとり　藏玉集に、鶉之といへり、小花鳥之と云

枝云　叢ヲ木村本モ同ジ　但誤カ

をごぐさ　藏玉集に萩也といへり

をりみくさ　藏玉集に松之といへり　〔○以下九行餘白〕

をかたまのき　和訓栞云、古今傳授には、御賀玉の木といへども假名たがへり、賢木をいふといへば招魂（ヲギクマ）の義なるべし、今も伊勢神宮の禰宜の寶物をヲカマといへり、キタ反カ之。日向國小戸のいはやのあたりにいふ物はトビラノキ成べし。一説に門松の下に立る木をヲカダマノキと云といへり。一木には限らざるにや。日本紀竟宴の歌に「玉がしはをかだまのきの鏡葉に神のひもろぎそなへつるかな」かゝれば岡靈のきの義にて直に柏をいふにや。また二木にや、或は鳥柴をもいふと定家卿の説之。貞德自筆の和歌寶樹にも、宗祇切紙を難じて、三箇ならで古今集の奥義は歌の序の中に多き事之といへり。後奈良院享祿元十一月十六日ときんの御傳授逍遙院申さると御湯殿記にみえたり

をしろのうま　順抄に、駹を注したり。今は尾白斑などいへり

をふちの駒　後拾遺集に、あふ坂の關の杉むら引ほどはをぶちとみゆる望月の駒。或は云小斑の駒之

補

〔第九冊　終〕

國史外品動植攷

安行　伊宇衣於　附

あば　越後方言なり、また寄木(ヨリ)ともいへり、こは東北海中より漂來れる木皮之。その形世のつねの朽木とことにして、其皮いと厚く、且輕し。土俗らとりえて細末となし、金創(キリヒズ)、磕傷(スリヘシ)につくといへり。また同國小兒島(エイサコ)にて蜑人拾とりて漁網の浮木(ウケ)になせしといへり。さればアバは網端の義なるにや。或は古今注に載たる抱木之といひ、また蒂種のキヨルコといへど皆違へり。按にこは愛瀰師(エミシ)が詞(コトハ)にツキサエといふ樹の皮なり。こゝにニレといふ、即楡也。くはしくは予が蝦夷草木志料にしるしたり

あせぼ　關東の俗にアセボともアセミともいひて、本條のアシビに混じて竟に馬醉木と云名を漢土の稱と覺えて、このアセボに附會せし事久し。この木の樣(サマ)はヒサカキに似て、夏月穗(スイ)をぬきて牙黃(ウスキ)いろなる細碎(コマカ)なる花を敷るものなり。或は本草拾遺に載たる梫木之と云は否

あつし　蝦夷にて卉服をいふといへり、夷人の詞にアツ、アッシ、ニヒアツプなどいへる樹の皮

をもて機織せるもの〻惣名ともいへり。またそのゐるにツキサニ、ニベシなどいへるは、こ〻に云シナノキなり、その葉は扶移に似たり、信濃國にはいとおほし、陸奥國にてマダといひて、機織せるをマダ布と云之。さて愛瀰師が織なせるはじめは、蓋し越のみちのおくの國より傳へたるにや。越のみちのくに愛瀰師ありし證は、元明天皇和銅二年三月甲斐信濃上野等の七國を徵發て、陸奥越後二國の蝦夷に備へしむ、又文武天皇元年二月物を越後の蝦夷に賜へり。共に續紀にみえたり

あきめ　眠窓集に商米をよみたり。また赤米をもいふこといへり

あをき　本編あはきの條にしるしたり

あをけ　驄をよみたり、倒青驄馬也。またアヲノ馬、アヲクロなどこもいへり

あいす　俗に鹿角霜をいふ、原は病の名之。事詳に予が橘黃閑記巻四にしるしたり

あをさ　武藏國荏原郡荒藺崎わたりの方言なり。葛飾郡東西諸村より田人採て田肥となせし藻葉之。按に肇慶府志云、紙菜青色似ニ紫菜一而薄而芸菜也、赤生ニ陽江海中一所云紙云紙菜即これなり

ありすひ　隼人國の方言に、こゝにいふ眼白ミ云小鳥をいへり。こは常熟縣志に載たる繡眼兒なるべし

あかにし　紅螺をいへり。かたち法螺の如く、唇ありて稜角(ツス)あるものゝ一種唇うすく外へそりかへりたるものを若の浦にてつるがひミいひ、また唇の先尖りて勾(マガ)れるを天狗貝ミいふ。また一種大にして兩頭ひミしく、片(カタ)へは內へ卷て寶貝の如く、脊にめぐれる瘻(コブ)たく　にして章は樺(カバ)色こき松葉色の斑ありて、內は雙紅(コウハイ)いろなり、まれに流虬人(ウルマ)のもて來れるなり、よて琉球貝、またりうきう赤貝ミいへり。是閩書に載たる紅螺なるべし。また鐵貝、ちりめんがひあり、こもまた一類之

あかかけ　赤鹿毛なり、赤騮をいへり

あざらし　鳥にいふは尾張國の方言にして、キクイタヾキの類なるべし。キクイタヾキは尓雅の鶉鴒の注に載たる戴勝なり

○毛類にいふは、蝦夷の海にありつるけのあらものゝ名なり。山東通志に載たる海豹などの屬なりミいへり

あまのり　本編のりの條にくはし

あすならふ　平泉花木記に載たる羅漢柏をいへり。この樹は葉も材も柏に似つこらしければ、明日は柏にもなるべきこのたぶれたる稱之。本編にあすはひの木の條むかへみるべし。また臆病なる武士を甲陽年鑑にアスナロフこいへるも、このきの名よりいでゝ、あすは武士になるべきこあざけりたる名なり

あやつばき　こは柏の葉こ山茶の葉こさしまじりて、花は山茶の花なり、その色も紅白の両種あり。むかし寛保年伊勢國鈴鹿郡高安村より江戸へ奉りしことありて、つばらに植村氏の記に載たり、今増上寺台徳公の御廟内に榮はえたり、世にめづらしき生殖之。こゝにはヒノキツバキといへり。按に式に鈴鹿郡椿太神社あり、今は椿の明神と申し奉り、その境内にアヤツバキと云て、今も尚ありけり。是ふりにしものならん。さきに友人平春海がその社にまうでつる時の記ありていへらく、御社の前にいたればかなたこなたにいと旋ふりたる椿の、花白きとあかきあまたたてり、立よりて見るに、檜の木のさましたる葉の枝ごとに生いでたり、こはいかなる種ぞこ問へば、此の御社の前なるは皆かゝる葉の生いづめり、こをむかし

よりあやつばきとぞいふなる。またこのうしろなる高嶺をつばきがたけともいひ、なべてこのほこりに椿いとおほしとなんいふ。またこの御社はなにの神のいはゝれ給ふにかといへば、猿田彦の大神ゝこぞ。やがていがきのもこにぬかづきて「はふりこがいはふみむろのあやつばき遠つ神代にうゑし種かも」

あさりがひ　武藏の海におほし、今漢商人(クラアキ)は文蛤といへり。このかひのいとしも小なるを、越前の色の濱より出し、マスホガヒと云これゝ。その章によりてカルカヤ、カノコ、オミナベシなご、名づけるなり

あふひがひ　御生(ミアレ)山の二葉草に似て、白きこ薄葱(ウスキ)このふたつあり、若の浦よりいづるこいへり

○坤輿外記に載たる虹魚をもいふなり。俗名タコフネ。貝を魚といふは、中山傳信錄にクモカヒのことを壁虎魚としるしたり

○螺の靨(フタ)をもいふなり、一名セミノハ

あくきがひ　惡鬼貝之、ナガニシに似て、嘴より旋後(トマリ)まで三道(ミスヂ)に硬刺を生じ、荊棘(イバラ)の如き殼な

り。一には天狗貝、九輪貝などゝもいへり

あふむがひ　形鸚鵡の嘴に似たればいふと。俗態の仿に姫婦この殼にて水を飲ば安産せしといひつたへ、いつしか兒寧貝ちふ名もあり、格古要論に載たる鸚鵡螺これと。清異錄には九曲螺といひ、盃となせしを九曲螺盃といふ

あられがひ　松貝の別種にして、立に星點ありて、つらつらになみしたり、古銅色と薄樺色と二品あり

ありとほし　和訓栞に、虎刺をいへり

あしなへうま　蹶馬をいへり。蹶は足病と。字鏡に、跛を足奈倍と注したり

あやまきがひ　海笋貝に似て首尾ともにひとしく旋稜なく、べにくち薬の鵰鴟斑あり、質にも細き章ありて、いとめでたく巧なるかひなり。こは印度よりいづるものを紅侇人のもたらしたるといへり

あさがほがひ　一名桔梗貝、一名琉璃貝などいへり。形は田螺に似て薄く、裏も表もなべてむらさきなり。かたちは朝顏の花にひとし。若の浦にて後の尖りたるを朝顏貝といひ、圓

きをも紫貝といひ、また一種殼あつく表(ウヘ)は藤の花色にして、内は濃むらさきなるを紫法螺(ムラサキホラ)といひ、また裏紫(ウラ)などゝもいへり。そのはじめは皆一物なるを、あらしほのしほの染(ソメ)なせしわざなりけん

あをばのふえたけ　吾藩大隅國囎唹郡淸水鄕に年ふりたる寺あり、臺明寺といふ、圓融帝の御宇、天延年の比に鑄たる古鐘あり、其銘云、此山中竹從天智天皇御宇剪爲笛竹給、其音淸妙、名謂靑葉笛竹、以來爲笛竹貢御所云々。また其寺の什物に二條天皇御宇平治年、及後深草天皇御宇建長年給りたる解狀文狀數通あり、其文意皆おなじ、狀中に二葉笛竹など書たるもあり、又建長年以後調御の用にあてられしとおぼし、府學の年錄にみえたり。今も猶をり〱貢御の事あり。さて國史を考ふるに此事なし、蓋いにしへの流例成べし。其竹竿の狀は弱竹のごく、其大なるは圍五六寸ばかり、節間(フシマ)は長さ二尺にみちたり、これを笛(フエ)に作れゝは其音さやかなり。その竿は四節をつらねてここしへにおひにけるなり。土俗はこれを貴て珍饌に備ふ。按に是王蓋臣が群芳譜に載たる四季竹これ也。世にいふ靑葉の笛は須磨寺に藏たる横笛にして、樺纏(カバマキ)の下のせみより靑葉をおひいでたるよしにて、かくいふといふ

説あり。長門國にて彫たる平家物語に青葉の笛篥とみえたり、されば今の須磨寺の什物と大隅國産とはたがへりけん　〔○以下八行幷次頁白丁〕

いさ　小魚也といへり、今いふイサ、なるべし

いちゐ　飛彈國位山にていへる名にして一位の義なり、その木は日光山のふもとにていへるアラヽギとおなじき也。この木を笏に用ひし木なれば、またシヤクキともいへり。笏は手板(シヤク)なり、笏是ともいへり、南海寄歸傳にみえたり、書言故事などにも手板を誡たり。蝦夷語にヲツコといひて、半弓に作るもの是なりといへり

いすか　その形鵲(ジヤク)よりは小にして、惣身赤褐色、胸は眞紅也。觜鈎(マカリ)て齟齬せり。一種黄なるありて、其囀聲はたゞ啾々として賞にたらず、おほくはわたり鳥にて、この鳥來れる年は雪多くふるといへり。南地には少き鳥也。また青イスカあり、背は青白にて、腹は黄なり、これその雌也といへり。また島イスカあり、觜にくひちがひなく、胸下黄色にして、背よりはらにかけて灰黒にして淡黒の文あり、翅尾と脚とは淡黒色にして赤色を帶たり。さてイスカといふ詞は、すべて物のゆきちがひたゞしからぬをいふ、書紀に敖很をモトリイスカシと訓じたる

にてしるべし。後世にいふこの鳥のイスカといへるも嘴のくひちがひたるをもて此名を負せたり、近俗の野史に、思ひし事もいすかのはしと有をもて、此鳥の名より此詞は始りたりと思ふはひが事ぞ、もとより今の俗の詞は鳥の名をもとゝしていへれども、イスカといふ詞はふるく有しぞ。この説游清よりいひこしたり

いはにし　松貝の類にしていろ黒く、旋にしたがひ疣ある小貝なり

いてうがひ　一には松賀貝ともいへり。京貝、山鳥貝などに似て、旋文をつらぬき兩邊に鰭をふり、げに銀杏葉の如く、その色は牙白なり。雪白をめでたしとせり

いつゝしろ　五白ぞ、馬の五明をいへり。李太白が詩に、上花馬といへるはこれなり

いつまでかひ　また千日貝ともいへり。佐渡國よりいでし貝なり、田螺の兒貝に似ていと小なり。物にたくはひ、年ふりて後にとりいだし、水にはなせば、また活かへりて蚑行といふ。證類本草巻二十二田中螺の條に、[虫奇]螺といふものあり、けだし是なり

いとかけがひ　また廝環とも呉織ともいへり。河蜷のかたちに似て黄と白とあり、げに絲に巻成したるやうぞ。一種屈たるもあり、これを絹法螺といふといへり

〔〇以下九行幷次頁白丁〕

うみを　紡麻こよめり、績麻の義なり

うつぎ　木綿うのはなの條みつべし

うるか　年魚の腸をいふなり。野史に綿をもて行けるを、人のそは商か〳〵と聞けるに、綿もてる人「山川の瀬にすむあゆのはらにこそうるかといへるわたはありけれ」

うすゝみ　宿紙をいへり。すきかへしの條みるべし

うすぎぬ　木綿せみがひの條みつべし

うばがひ　形は大身に似て小なり、兩唇こがりて開きたる扇のごとし、頷高く巨細ひこしからず、また鱗次なし、いと小なるはまれぞ。その様は翁さびたる麻績女の口などのごとし、おもふに罪雪錄にいふ海扇にや。一種檜扇てふもの有、またこの類なるべし

うみたけ　筑後柳川にていへる名なり、水松喰の舌なり。泉南雜志に載たり、西施舌なり

うめいろ　土佐國方言なり。この魚の形鯛に似て長く、色に紺碧にして脊には金色を帯たり、尾は金鎗魚に似て、鬐は鯛より長し。肉は淡紅色、大目中鱗小口尖齒、鱠こなして味ひよ

ろしく鯛に似たり

うふめとり　ふるくは姑獲鳥なりといへり。備前美作二國にこの鳥ありて、夜は飛つゝ啼、その聲は尺子の啼にひとしく、かたちはみとめたる人なしといへり。おもふに是康熙禽虫典に載たる女鳥にやあらん、其説は纂疏姑獲鳥の條にしるしたればこゝに紀さず

うづらかひ　やしろがひとも、宮代貝ともいへり。かたちは酥螺といへる貝に近く、殻うすく、旋後小にして懐廣く、襴は裏表に通り、よく整たり、質色はくち紫色の星まだらあり、大なるは曇て潤光なし。これをウツセガヒといへるは白水郎の説たる名なるべし

うみうさぎ　宋の可洪龍が文房圖賛に載たる貝光祿をいへり。かたち寶貝に似て甲高く豊にして、月白の光耀あり、兩唇うちへ巻入て歯なく、首尾ひとしけれど、おのづから旋結と唇角あり。その小なるは棗の如く、大なるは小兒の拳のごとし。大なるは流求及南島より來れり、小なるは紀の海よりもいづるといへり

うみふでがひ　霍公貝に似て、から厚く、旋文に刻缺なく、椎の實貝の少し大なるものなり。その色は古銅色と。一種紅筆といへるあり、松貝に似て長く、旋文に魚子に似たる理ありて

赤色之　〔〇以下六行并次頁白丁〕

えびすがみ　天工開物に載たる閃刀紙をいへり

えびすうま　騣をいへるにや、騣音叟、蒂中大馬こみえたり

おほしか　麈をいへり。木編くしか、また後ののろの條に詳にしるしつ　〔〇以下七行并次頁白丁〕

おもとびと　野史に猫をいへり

おほみがひ　これ南島邪久島より出しゆゑに、或は又邪久貝ともいへり邪久は大隅國熊毛郡ニ隷て今は大島といへり。いにしへに邪久といひしは今の琉求之。順抄に錦貝をヤクノマダラガヒと注したるは、即琉求よりいでし蝸螺をいふ也。この貝今の俗には朝鮮サヾエといふ、俗ヤクノマダラカヒの條にしるす是今は即和漢通じて車渠といへり。順抄にも俗音謝古と注したり。小なるはまれ之、大なるは世におほし。東坡この貝へ菖蒲うゑてめでし事集中にみえたり

おきあさり　また紀州淺理ともいへり。形は文蛤（ハマグリ）に似てやせたり、そのあやはくさぐ〳〵有けれど、白きに細理あるをよしとせり

おきしゞみ　かたち蜆（シヾミ）にことたる事なし、只その大なるは家鷄（カケ）の卵（タマゴ）のごとし、その色も蜆のごとし。光州府志に、蝠といへるもの是ならんか。通雅に載たる蠱まけだしおなじかるべし蝠

蟷は同音なりとおぼえたり　〔◯以下二行餘白〕

加行　幾久介古　附

かづき　黴麩樹をよみたり。万葉によみたるカツノキなるべし。本編ぬりでの條みつべし

がさみ　蘇頌圖經に載たる擁劍といふ蟹なり。この蟹の螯とに大なれば名づくといへり、いかゞ

かなめ　或はカナメノキともいへり。此木を扇梢の扇眼に用ふ、故にいふといへり。扇眼は蟹目なりといへり、蟹眼に似たればなり。源平盛衰記にカノメともみゆ、されど蚊眼と心得るはあしゝといへり

かのこ　草にいへるは排草なり。女郎花に似て春花さく草なれば、また春おみなべしともいへり

○鳥にいへるは白鷳なり

がうな　蝸蠃をよみたり、カハミナの約りなり。順抄に河貝子を美奈と注したり、俗用蜷字

非也、としるしたり、この貝の海にあるをホウサヒといふなり

かくも　或人六帖を引て「我宿にかくもをうゑてかくもぐさかくのみ戀ば我やせぬべし」此歌古今六帖になし、新六帖可考。本編かくもぐさの條にしるしたり

かげぐさ　陰草之、檜原の山かげ草などよみて、ものゝ陰に生る草之。岩陰草、水陰草の屬之。ひと草にはあらじ

かたなし　棠梨をいへり、堅梨の義なり

かまぼこ　蒲鉾の義之、蒲の花をいへり、即蒲槌なり

かぜがひ　風貝の義之。版屋貝に似て小なり、殼うすく色白し、章あり、唇は仰(ソリ)て風の衣を吹かへせる如くなればいへり

かやがひ　榧實に似たれば名こせる之

かはせみ　翡翠をいへり。本編ひすいの條にしるす

からなづな　薺をいへり

かんこどり　喚子鳥を字音によみたり

かたかへり　撫鷹をいへり、二歳鷹なり

かけひばり　鹿毛鷚なり、黄鷚をいへり

かゞみがひ　月日貝に似て白く、雲母の如く燐々しき光ある貝之。あだし國にてその空明なるをもて燈籠の料となせり、また窻にもはれゝば窻貝ともいへり。南越志に、璅珯とい ひ、章州府志に海鏡、海月などいへり。本草綱目に、玉珧の一名となせしはたがへり

かつらがひ　鶉貝に似て殼厚く、壟なく、立にこき朽葉の縞すぢあり。また磯貝の白きに紅のうつりあるをもかつらがひといへり

かなめがひ　山桝貝に似て少し扁く、いろくろし。扇の蟹眼に似たればゝ

かぶとがひ　殼は栗の毬彙に似たり、その刺の脱たるは正圓にして、少し扁く、質に魚の子のやうに刺のあとありて、一種そのあとのあら〳〵しきを星かぶとなどいへり。この貝の腸は即順抄にいふ宇仁、催馬樂に云賀世也。本編それ〴〵の條々をむかへみつべし

かひつむり　即抄に鸊、和名タカベ是なり

からくんてう　吐綬鷄をいへり。坤輿圖說に、白露鷄と云これゝ。白露はヘイリウとかいへ

る國の譯名之

かにとりさう　蟹取草之、蟹取は生レ兒の祝儀也。古語拾遺に、葺不合尊の生れ給ふ時に、其地海濱に蟹を除くといへる義によるといへり。勘取の義となすはあらじ、和訓栞に詳也。今の俗にまた疳取の義となして、連錢草の名とせるはたがへり、されど連錢草は一名胡薄荷ともいひて、よく小兒の疳虫を征するものなり

かうだむし　武藏國橘樹郡川崎方言之。かの地にて狐の人をたぶらかしたる時は、必此虫をくはしむといふ。人の園庭また畠に在といふ、かたち壓虫にて脊に小翅あり、また孑蠜にも似たり

きら　油光をいふ之。按にもとは磷々（キラく）の義之、即不磷不磨といふこれ之

きば　牙をよみたり、截齒の義之といへり。俗にも絲キリ齒などいへり

きやら　伽羅の字音之

きふみ　黄卷をいへり

きさこ　福螺をいへり。俗にまたチイサゴなどゝもいへり、その大なるをオホキサゴといへ

り。このたぐひをシタゞミといへるはたがへり、時珍綱目に白及の根を注して云、有レ臍如ニ鳧茈之臍一。又如ニ扁々螺一旋紋あり。按に凡螺の白及根に似たるものはオホキサゴ正に相おなじ

きかげ　黄鹿毛なり、黄驃をいへり

きつきげ　黄月毛之、驃をいへり。詩の秦風に咏たり、宋の明帝改て騧に作るといへると字典に載たり、騧騟とも音瓜

きつねかひ　洋淺理に似て、唇の兩角少し尖りて、內は深く表にすぢ高くおこり、くち葉いろにそみたり。一種すぢなく紫のうつりあるを藤籮にいへり、またそのまさかなるを文珠貝といひ、黒きを皋貝といふ。丹後の宮津におほしといふ

きせるがひ　筒貝に似て色黒く、旋文なだらかに分りて、その口煙管の火皿のごし。川にも海にも山にも木にもあり、木にあるを木螺といふ、稗官にみえたり

ききやうがひ　また飾舟、花筐、總角、圓坐、編笠貝などゝいへり。これは海燕といふ海蟲の懷版之、即烏鰂の甲のごし、その甲を海盤車といふ、鮒魚品にしるしたり

きんちやくがひ　かたち荷包に似て殼厚く、表に五道の大理あり、販家貝の別種之。また總角貝などゝもいへり　〔〇以下九行餘白〕

くさ　草をいへり。クサとはにほひ有をいふ、是古言の例之。今も青くさしなどいへり、朽腐する故といふは後世の俗説なり

くろむぼ　麥奴之、麥の黑穗之。名臣言行錄に麥奴をもて烏昧草之といへれど、いぶかし

くらがひ　かたち蜘蛛に似たる螺之、南島より來れり。中山傳信錄及び續脩臺灣府志に載たる壁虎魚之

くちしろ　水口蠏をいへり、水經注に白日蠏といへるもおなじ

くせうま　曬をいへり、俗に曲馬とも書たり

くさひばり　武藏國葛飾のわたりに秋に鳴むしをいへり。この虫は夏のするより、秋かけて、ひるの日影の草むらのうちにありて、その聲さゝやかに告天子の聲に似たれば、かくいふといへり。そのかたちは松むしに似ていと小なりといへり。また一種豆松虫といふも有、豆の圃に有といへり

くりげひばり　栗毛鷚之、騅をいへり　〔○以下三行餘白〕

けし　罌粟をいへり、この殼のかたち笥に似たればいふ之。卽笥子の義之。罌もまたケとよむ之。今の俗に芥子と書るはあらじ、芥子は今いふカラシ之

けづりばな　かけ花をいふといへり。あだし國にては粧花、また勝花などゝいへり、今の造花も此類也　〔○以下五行並次頁白丁〕

こみ　秏米をいへり、今の俗にはコミゴメといへり

こち　牛尾魚をいへり。俗に鮁また鯒の字を用ひたるは違へり、鯒は製字なるべし

こと　蠱をよみたるはまさに蠱毒の音の約りたるなるべし、易の古點にみえたるは序卦傳の事なりとみえたり、尙考へし

ころり　瓢簞をいへり、フクベを壺盧といふによりて名づくといへり。また混沌ころりといふ、圓體よりいでたるともいへり

こむず　醬をいへり、濃水の義之

こんぶ　昆布之。本編えびすめの條を見るべし

こるも　凝海菜をいへり。こゝろふとの條をみつべし

こまあしげ　黄驄をいへり。歌に白あしげとよみたるはこれ之

こみつきげ　澇月毛(コミツキゲ)之。或は騧(過音)こいへり、黄月毛こもいへり

こくゞり　鳥の名之。美濃國にある小鳥之といへり

こほいのかひこ　氷蠶をよみたり。東坡集に氷蠶不知寒

左行　之須世曾附

さね　核また辨をいへり。草木に核をいひ、瓜に瓣をいへり、皆小種(サタネ)の義なるべし

さめ　白馬をいへり。白馬を白魚と書たるは蘇軾の牧馬圖にみえたり

さを　嘴をいへり。また竿ともいへり、小尾の義なりといへり

させも　艾をいへり。さしもぐさの條みるべし

ざろむ　鶺鴒梅、品字梅をいへり。あるひは鶺鴒梅を花坐論こいひ、品字梅を實坐論こもいへり

さつき　杜鵑花をいへり、五月ツヽジの略成べし

さかな　肴をいへり、酒魚の義之

さしは　鷙をいへり、差羽之。鷙鳥論に齊人呼曰雀鷹、朝鮮より來れる小隼之。隨書に載たる海東青も是之、また鷙をいへるはいかゞ

さるけ　猴毛馬之。順抄にいふ鼠毛之、騅をいへり

さたう　沙糖をいへり。これいにしへは唐山にもあらで外域より貢せし之、故に張衡が七辨に、沙糖石蜜遠國貢し諸、また傅巽が七悔に、南中茶子西極石蜜、楞嚴經に黑石蜜、乃甘蔗糖之。唐の大暦年に鄒和尚といへる人其法を傳へてこれより唐山にはじめて沙糖の製あり、おもふに蓋し紫糖也、胡元にいたり再び白糖をつくりしと王灼が糖霜譜にみえたり。わが國は慶長年に琉球より再び吾薩摩に附庸して紫糖の造法を傳へ、復享保中に其種をえて琉球及諸島に播(シキ)て藩府に入貢せり。丹方に甘蔗、和名久美。遊仙窟にアマカヅラありしは、式にいふ甘葛煎なるべし。甘蔗こはとなり。再按に、古樂苑聖郎曲に酒無沙糖味、これ沙糖卽今の甘蔗糖なるべし。石蜜は夫氷糖なるか、蓋しは蜂の釀せし石蜜にや

按云、和名鈔騢ノ注彤白雑毛馬也トアリ

さはひめ　地黄をいへり
さむしろ　狹席なり
さいかし　皂莢をいへり
さつまいも　りうきういもの條に詳之
さびつきげ　銹月毛なり、彤月毛とも書たり、騢こいへり
さかげうま　逆毛馬之、騙をいへり。字鏡に馯毛馬あり、いまだ考へず
さしあぶら　燈油をいふといへり
さくらかしは　殖物に非ず、かしの條にしるしたり
さるのかしら　順抄に、蚶を注したる木佐も是なり、今の俗に猿頰こいへり。そのいと小なるを菊貝こいへり、通雅に載たる蚯丁是之。その尤大なるを赤貝こいへり、本草にのせたる魁蛤是之
さゝなみかひ　また衾貝、楯貝などゝもいへり。かたち簾貝に似て雨唇とがりて少し長く、色白く、むらくにうねりたるすぢ有、げに筱浪の如し。またきぬたがひをもいへり

さむせうがひ　山椒の實にとなるとなし、紅と黃と二色あり、いと〳〵細小の螺之

〔〇以下一行并次頁白丁〕

しな　本編あつしの條にしるしたり

しぶ　柹漆をいへり、澁るのこゝろなり

しらげ　精米をいへり、白磨の義之といへり。もとしときてふ詞のうつれるならん。本編しらげよねの條むかへみるべし

しなの　和訓栞にしなのぐさ之といへり

しらも　備前國の方言に龍鬚菜をいへり。本編なはのりの條みるべし

しこみ　俗にクサボケといふもの之、卽万葉によみたるアシビなり。本編あしびの條にくはし

しらす　春魚をいへり。こは北戸錄にみえたり、またすべて麪條白條などいひて魚菌をいへり。今の俗にタヽミイワシなどいへるも此類之、タヽミたるを鷺毛脡と云、また北戸錄にみえたり

しらは　白羽之。舊事紀には衣をよみたり

しらすげ　本編すげの條にしるしたり

しふかも　稃をいへり。尓雅に稃穀、また秠をいへるは粟秠の類なり

しなのき　あつしなりといへり。あつしの條むかへみるべし

しきがは　敷皮之。本編とらの條にしるす

しろかけ　白鹿毛之、黄駁をいへり

しほのまつ　和訓栞に云、灰の名にや、應仁の頃より出たり、土をよく炒たる之。杉の灰、木綿の灰などもよろしと體源抄にみえたり

しころがひ　本編にいふ白貝(シラカヒ)をいへり。隼人國にていへるは文蛤(ハマグリ)に似て殼あつく、甲高し、唇に雁の齒の如き理ありていと稜(ソハ)々し。また海膽(カブトガヒ)の殼をもいへり

しらげがひ　形ち精米の如くなればいへり、松虫貝の類之。また寶貝のいと小なるをもいへり。おもふになべて白き小貝をいふ之

しほやがひ　赤貝ともいふ、花の形をなしたるを牡丹貝といふ之。こは中山傳信錄に載たる石筆華之、貝にはあらず

しろあしげ　白葦毛也、黄驄をいへり

しろくりげ　白栗毛之、騮をいへり

しろかしげ　白檮毛之、こは糟毛の誤之、騆をいへり

すごも　簀薦之、食薦の義之といへり

すのこ　簀子也

すなご　肥前天草の方言之、これ沙噀（ナマコ）の類にしてまた一種のもの之。或人沙子篇を作る、その略に云、沙底自レ古産ニ異品一、不レ類ニ蛤螺一、固不レ鱗恰似ニ海參一、大寸餘、美庖之中最賞珍、土人銘レ之以ニ沙子一、鄉鋪ニ賀筵ニ饗ニ上賓一、玉椀作レ羹貌異レ常、頭吐白英尻黄腸、々如ニ蟹子ニ英如レ蘭、嚙レ之齒頰餘ニ淡香一、醒者寧知淡味貢、醉腸一嘗頻勸觴云云

すいくわ　西瓜の唐音なるべし。嘗て聞、西瓜は五代に至てはじめて唐山に入こいふ、世以て通論となすものは否之。按に劉禎瓜賦云、藍皮密理素膚丹瓤、陸機賦云、或擄文以抱レ綠、或披素而抱丹、張載賦云、玄表丹裏程素含丹以上賦彙に収正にこれ西瓜、他豈にいまだ紅瓤綠皮のものあらん、而三氏は皆魏晋の間の人之、洪忠宣松漠記聞にも嘗て辨之、駱賓王詩云、一頃南山

豆、五色東陵瓜、これによれば漢の名称うゝる所の瓜も亦西瓜なるべし。またおもふに、いにしへ但瓜と稱するものは應是西瓜なるべし、五代の時にいたりて、其種復西域より來るによりてのはじめて西瓜と稱するのみ。陶弘景の云、蓋五代の先既に浙東に入、西瓜の名なく、いまだ漢土に遍からざるゝ。さて又我にありては、即傳言寛永年にはじめて西瓜の種を得たりとぞ。されど釋義堂空花集、和西瓜詩に、西瓜今見生東海、義堂は即　後小松天皇の御時の僧之、是寛永年の前にある事殆二百四十年之

すつほむ　土鱉をいふ之。或云、出沒の義之。式の御贄の下に、大和國干鱉とみえたり、こゝにホシガメとよみたり

すみのくろ　墨の黒之、驪といへり

すゑひろがひ　帆立貝に似て厚き殼也、娼貝の屬之　〔○以下一行共次頁白了〕

せう　鷹鶻をいへり

せきちく　石竹之。藏玉集に撫子とこいへり

せこがひ　京貝に類して稜(カド)なく、地(チ)しろし、葱(ヤ)にくろきをかねたる線脈(イトスヂ)よくそろひめぐり

て、いこめでたき螺なり

せたうま　脊撓馬なり、騙をいへり

せむたん　楝をいへり。和訓栞にこのきを焼ば香氣あり、よて勅名を賜て、和旃檀こいふといへり。華嚴經云、燒二旃檀一株一薫二小千世界一是佛典の旃檀に傅會したり

〔〇次頁白丁〕

そろ　伊豆國の屬島にて、蒲葵をいふこいへり。蒲葵は即椶櫚に似て柔之、いにしへビロウこいへる是之

そまのはるくさ　茶をいふこいへり　〔〇以下七行幷次頁白丁〕

多行　知鬪天登　附

たぶ　橡樟なりこいへり。今は月桂、山桂をいへり

だも　月桂をいへり。俗に白タモ、黒タモこいへる有、前にいふタブこおなじ、皆俗名之

たふ　太布なるべし。仲正のうたに、戀にむさるたぶぬのこよみたり。あつしの條をみる

べし

たう　科藤也、一名梟藤をもいへり。こは西土よりもたらす草の根なり

たばこ　本編けむりぐさの條みるべし

たまづさ　土瓜をいへり

たまのを　景天に似たる草をいへり。費菜とこいへるはたがへり、今の俗に又ミセハヤサウともいへり

たうやく　またセンブリサウともいへり。本草彙言に載たる山龍膽なるべきか

たちまち　牛扁をいへり。瘡に用ひて忽に截る故にいふこいへり

たぐなは　栲繩也。此栲繩はタクてふ物にて作りしなはゝ、手操繩（タグナハ）とは同名二物なり

たくぬの　栲布之

たふぬの　太布之

たけなは　策をよみたり、卽竹繩之。今の火繩に用うるものこれなり

たひらき　平脩の義にや、また平貝の義にや。西陽雜爼に載たる玉珧也、珧を瑤にも作れ

り。いと小なるをカラスガヒといふ、これを沙瑤といへり。記に比良夫貝あり、卽こゝに云タヒラギにや。本編ひらふがひの條をみるべし

たちかひ　本草經に載たる馬刀之。形滿貝に似て狹く、横さまに長し、鳥の風きり羽に似たり。いと小なるをサゝノハなどいへり、こは圖經に載たる齊蛤也。さて順抄に馬刀をマテと注したるはその字音也、今の俗に云マテは馬刀に非ず、閩書に載たる竹蟶也

たこふね　あふひがひの條にしるしたり

たかつとり　天狗貝をいへり。てんぐの條にしるしたり

だちんうま　駄賃馬之、卽駄をいへり

たからがひ　今いふコヤスガヒなり。他し國にていにしへ寶貝とて貴たるもの之、今は世のつねの貝におなじ。この子寧貝は竹取物語にいへるこやすがひのことは別物之、本編こやすのかひの條にむかへみるべし

たまきかひ　洋淺理に似てすぢ粗く、水いろなるものなり、黑きまだら有もあり、一種甲高くまとかにして、すぢいとあらきを玉貝といふ、その兒貝を波游といふ、また一種祭貝に似

て、むらく〳〵に紫のうつり有をも玉巻貝といへり

たますだれ　松虫貝の體にして豐隆之、からうすく旋文たゞしく、肩は雪はづかしきほどにしろく、布理あり、經と緯にくれなゐの線すぢをまとひたり、いとめでたき貝之。相摸の三崎にかぎりていづるといへり

たゝみいわし　北戸錄に載たる鷺毛脡之。本編しろをの條むかへみるべし

たけのこがひ　河蜷に似て旋文に稜なく、玳瑁の如きまだらあるをめでたしとせり。また種々のうつりあり、また黒きあい淺葱あり、大小種類ありて俗名いとおほし、常熟縣志に載たる鑽螺なり

だいみやうたけ　臺明竹之、俗大明竹と書るは誤之。あをばのふえたけの條に詳にしるしたり

たけのよのかみ　竹膜紙をいへり、一名竹綠草ともいへり。竹紙といへるは猫竹にて抄たる紙之。尚詳に余が竹譜中にしるしたり（猫竹はこゝにいふ孟宗竹なり）（〇以下九行並次頁白丁）

ちばな　茅針をいへり、即茅花之。これつばなよりうつりたるならん。本編つばなの條を

むかへみるべし

ちから　俗に知風草をいへり

ちゝくさ　苦菜をいふゝ。顏師古が匡謬正俗の說によれば苦菜は苣(チサ)なり

ちゝたけ　吳林蕈譜に載たる奶汁蕈ゝ。またちたけこもいふ、蕈(タケ)を碎(クダク)ば乳の如き白汁いづればなり

ちんばうま　跛馬ゝ、蹇馬をいへり　〔〇以下二行并次頁白丁〕

つまぎ　薪をいへり、爪木こ書たり、爪(ツマ)をる薪をいふゝ。眞木さく檜の嬬手といへる詞よりいでたるにや、ひの條をみつべし。白孔六帖に、大曰レ薪、小曰レ蒸、式に御薪をミカマギこいふは御釜木なるべし

つみを　鶩尾ゝ、騣をいへり

つるな　一名はハマガキといへり。沿海の地に生ふるものゝ、葉はツルムラサキなどに似て蔓草ゝ、實はハマビシの實に似たり。往に、これを中山人に便りして唐山に匡しけるに、蕃莕こ命じたり。中山人蕹菜ならずやこいひしに、さにはあらずとて、別に蕹菜を竹籃にうゑてや

りたり、中山人これを分栽して薩摩に致せしをみるに、葉は旋花葉に似て盤中蟠生す、培するに潮水をそゝぐのみ、是船中の菜蔬なりといへり、其書草木狀及び閩書などの說にかなへり。閩書に一名甕菜ともみえたり、その略圖は別に寫出す。凡動植はかゝるおし充てたがひあるも猶おほかるべし

つぼみ　蕾をいへり、蓓蕾もおなじ、つほむ義之

つゐぐさ　蔓草をいへり。凡て冬を凌ぐかづらは左に纏といへり、忍冬、藤、紫藤、紫葳の屬しかり

つちぐも　俗にいふは蠨蛸之

つゆかひ　形は菠薐菜の實に似ていと細之、色は水晶の如し、げに秋の田草の穗にやどれる露にもとならず。その蔥色なるを、をぎの露といへり、こは枯荻の意之

つのがひ　獸の角のごくなり、長きは四五寸斗なるもあり、白きもくちば色もあり、いろ〳〵のうつり有もあり

つきあしげ　桃花葦毛也、騅をいへり

つめたがひ　形まとかにして旋稜なし、表はくちば色之、裏は白し、いと小なるは皆白し、よて白玉貝などこいへり。紫色なるを鴉顔といへり。漢商の復言に酥螺こみえたり

つゝらがひ　すだれがひの如にして狹く且長し、表は支子〔クチナシ〕色之、理〔スヂ〕は横體〔ヨコザマ〕にそろひたり

つきひがひ　殼のかたち正圓にして平之、表のかたへは深蘇芳色之、裏はましろ之、隼人の海におほし。呉震方が嶺南雜記に載たる日月之、今の漢商は日月蠔、日月殼、また磹螞など、いへり。本草綱目に海鏡こなせしはたがへり

つはひらこ　藝苑日抄に茶樹ありといへり、考ふべし

つきげまだら　月毛斑之、驃をいへり

つるはみくりげ　橡栗毛也、騮をいへり　〔○以下七行并次頁白丁〕

てむく　徂徠物氏すでに說あり、我に說なし、たゞ古今筆端游戯をつどひしるす。春秋元命苞漢史天文志などには星の名こせり。元の周密が癸辛雜識云、丙申十一月十七日冬至、是夜三鼓有大聲如發火炮〔泡本〕、震動可畏、鷄犬鳴、或云、天狗墜地。大日本史云、後深草天皇寶治元年三月十二日乙丑、大流星、長五丈許、如二火焰一自二東北一行二西南一、有聲如雷、此乃陰陽升際、變易

之瘴氣火焔飛亘於空中也。源氏物語に、天狗木精の事あり。拾芥抄に、世風記を引て、正月十五日亥時煮二小豆粥一以爲二天狗祭一。東鑑云、四條天皇文暦元二月、南都有レ鬼書三米 來 不三字二於民家一、一夜遍二千餘宇一。是天狗之所爲也。杜少陵天狗賦云、色似二狻猊一小如レ猿。王圻三才圖會、天狗食レ蛇。三秦記云、白鹿原有二天狗一。尒雅、魚狗、一名天狗。本草、獾一名天狗。わが國にてもはら天狗といへるものはその貌をみるものなし、世みだりに高鼻長翼にして僻魔法師に似たる形を畫て天狗とせり。林公道春、神社考云、高鼻相敖慢、長翼表二疾健一、また習合の徒は竟に金毘羅をもて天狗の化せし所とせり、金毘羅は則素尊なるをや。また人を掠めてみ空をわたり、變幻を成ものを天狗といへり、彼國にもまたこれに似たるものあり。李綽尚書故實云、蜀有レ物狀如二鷹鶻一、忽掠二十歲童兒一而去數日、童兒在二高塔之上一、梯而取レ之、神如レ癡、久而方語云、見如二飛天夜叉者一日飼二果實飲饌一之味也。また楊愼四川總志云、河池州近山牧童十餘人群聚歌舞、或笛戲方、忽山半一人約長二丈、面濶三尺餘、披レ髮鳥喙背有二二翼一、俯觀群童爲樂、嬉然而笑垂レ舌、長過レ腹、群童顧見大驚皆走、其人能夷語呼曰二合々勿去一、仍歌舞吹笛以樂、群童復聚吹笛歌舞如レ故、喜拊レ手大笑、聲震林樾、已而垂舌久之去。これま

た一大奇也。書紀に、天狗天狐通用せるをもて、今の俳魔法師の飯綱と唱ふるものは蓋し天狐の字に膠(トヲ)て狐に屬(ツクル)に兩翼をもてせり、わが國の奇怪は所云天狗なるものに極りたり。また後に年山紀聞に云、台記[宇治左府頼長卿日記]云、久壽二年八月廿七日の文に、人打ニ釘於愛宕山天公像目ニ云云、余唯知ニ愛宕護山天公飛行一、未レ知ニ愛宕護山有ニ天公像一云云。森尙謙云、世傳有ニ天狗者一主ニ災禍一、是非ニ天狗星之類一。地藏經云、天龍夜叉天狗土后依ニ此排次一是一種鬼神也。易曰、鬼神害レ盈而福レ謙、若夫誇ニ盈滿一者鬼神惡レ之加ニ災禍一、彼天狗之災必有レ理而然矣[以上年山紀聞]

とうふ　豆腐也。今婦人の詞にオカベといへるは、元來禁裡仙洞にてオカベと稱せり、さればオカベは雅詞(ミヤビ)にしてトウフは俗言也。職人盡哥合に、故郷は壁の戸だえに寧樂どうふとみえたり。宋陶穀清異錄云、改ニ豆腐一

こねりこ　桴をいへり。或云、これ元來蓄名也と、いかゞ。桴は卽秦、本草に秦皮とみえたり、ハシバミの榛には非ず、今の俗タモキともいふ。本編たむきの條むかへみるべし

どちぐち　俗に科斗をいへり。ある卿のいへらく、古歌に「ごちぐちはきさらぎまではめ

もなきにさ月の比は河づとぞなる」と人にの給けるを聞れど、この歌何がしの集に載たるにや、今いまだ詳にせず。順抄に、蝌蚪は蝦蟇子也。輔仁和名に蛤子、和名加倍留

ともしろ　臀白之、驃をいへり

とさこま　土佐駒之、佐駒といへり。佐駒は尓雅にみえたり。また果下馬ともいふ、魏志にみえたり

ところてん　本篇こゝろふとの條みるべし

ときんがひ　螺のいと扁なるもの之、かたち菅もてつくれる笠のごとし、かたべ貝、蜘貝などゝもいへり。馬蹄螺の屬〆

とむほがひ　羽をたゝみたる秋の虫のごとく之。殼うすく蟬のごとし

とくさがひ　砥草に似たる貝之。礁石(クレイシ)の上に附て生るものなり、石花の類之。石花は琉球土名のイバラ、之

とゞろかひ　法螺のいと小なるに似たり、なたきりのるいなり

とらげうま　虎毛馬之、驃をいへり

こらつきげ　虎月毛之、驃をいへり　〔○以下次頁白丁〕

なか　梵に龍をいへり、宋の道世法師が法苑珠林にみえたり。天龍川をあめの中川とよみたるもおなじ

奈行　仁奴彌乃　附

なのこ　魚子をいへり。今はナ、コといへり

ながれぼし　流星之、縣をいへり。卽騅也。字典に、馬額白至脣一曰ニ馬流星ニ貫レ唇

〔○以下四行幷次頁白丁〕

にしきゞ　衛矛をいへり。大高檀紙はニシキヾにて抄とといへり、後拾遺集によみたるまゆみのもみぢはこれ之。能因のいへる錦木は、にしきゞ塚のものにして、その遺風今にもみちのく南部にありといへり

にふなひすゞめ　尾張國人云、尾張美濃などに、秋の比田のもへ二十三十ばかりづゝ、いくむれもむれ來つゝ稻をはむ、にふなひといふ小鳥ありこ、雀のひと種に世の常の雀よりはす

こしちいさくて、觜の下にいさゝか白き毛あり、百雉是を甚くにくみて、にふなひめが來つるはごて、見つくればおひやるなり。此雀春夏のほごはあし原にありて、よし原すゞめともいふといへり。宣長これを聞ておもふに、入内雀といふ名、實方中將のふる事にいへる、中昔の書にみえたり、されどそれは附會の說にて、にふなひは、新嘗（にひなへ）といふとなるべし。萬葉の歌にも新嘗をにふなみといへり。又おもふに、稻負鳥といふも、もし此にふなひの事にはあらざるにや、古き歌どもによめる、いなおふせ鳥のやう、よくこれにかなひて聞ゆることおほし。雀はかしがましく鳴ものゝ。庭たゝきはかなへりとも聞えず、と宣長いへり

ぬくめどり　和訓栞云、鷹のあたゝめ鳥をといへり　〔○以下九行幷次頁白丁〕

ねぎ　葱をいへり、もこれ和名キなるを、根を專らに用うるものなればかくいへり。詳に本編きの條にしるしたり

ねそ　根麻をいへり

ねこ　猫をいへり。順抄にネコマといふ、その義とはとなり、或は鼠子の義をこいへるもいぶかし

ねずみげ　鼠毛ゝ、また鼠青ともいへり、雕成へし　〔○以下三行幷次頁白丁〕

のろ　麞をいへり。和訓栞云、人踊すれば見物して目を放さずといへり。本草綱目にも、獵人舞采則麞麋注視こいへり。平調曲に、皇麞あるもこの義にや。本編くしかの條をむかへ見るべし

のせもち　攝津國能勢郡より獻する餅ゝこいへり

のしあはび　打鰒ゝ、あはびの條みるべし。また梟疏に詳に載す

〔○以下三行幷次頁白丁〕

波行　比不邊保　附

はづ　巴豆をいへり

ばひ　貝の字音なるべけれど、惣名の謂にはあらず、是一種の螺にして、海の淺洲におひて形は田中螺に似て、少し長く黄色ゝ。あるひは銅色の點花あり、享保年消估の復言に黄螺とみえたり

ばむ　方目也とも水鷄也ともいへれどたがへり、臺灣續志に載たる海八哥なるべし

はがひ　翼をいへり、順抄にはツバサと注したり。また貝子紫貝をもいへり、齒貝の義之。貝光祿をいへるはたがへり、これは海兎といへる貝之、何洪龍が文房圖贊にみえたり

はひも　貝原氏大和本草に僞筍をいへり。釋贊寧が筍譜に、僞筍竹根傍出似筍とあり。ハヒは蔓延の義之、所によりては約めてハヒモとも呼ふなるべし。筑前にてはハベホウと云よしなれば、卽藕をハスノハヒといふに同し

ばらかき　棘蠣の謂之。これけだし海膽の一種にして、殼うすく芒もやわらか之。もし福州府志に載たる石橇なるべき歟

はねがひ　海蚌のいと小なるもの之。殼うすく蟬翅の如し。或はまた平簡の小介をもいへり

はなしろ　鼻白之。馬政論に的吻馬鼻白也とみえたり

はたざくら　旗櫻之。武藏國江戸莊白山權現の木苑のうちに一株のさくらあり、花の蕋の中に一枚の平しべ有て、旌旗のやうなりとていふといへり。また常陸國久慈郡金沙山八幡

の社内にもこの種ありとぞ。俗人の言に、むかし義家公此地へ旗を建給へる舊蹟なれば、遺靈さくらにとゞまりたりといへり。旗をハタといふ義は本編すゝきの條ハタス、キの下にしるしたり

ばせをかひ　銀杏介に似て三方に鰭をはりたる介之、老たる芭蕉葉に似たるとていへり

はまかづら　浪の底なる洋の石に蔓纏て生ふる介之。礒貝塩尻などのごとく固く石に著たり、石蜐の如く、春の日に華を揚るが如く、その肉の蚑いづるもの之、杉蹄子の肉も春葩をあぐるもの之。石蜐はゑぼしがひの條にしるしたり、杉蹄子も本編せの條にしるしたり。わが薩摩の穎娃郡の華瀬の華はこの介の肉の游蟜せる之、石花なりといへるはたがへり。はまかづら、一名蛇貝、これ圖經に載たる蘇頌がいへる石蛇之（證類本草卷四玉部中品に引）近海には只その爛殼のみ漂到せり、相模伊豆わたりの礁石にはおのづから生るといへり

はなあしげ　黃驄をいへり

はごろもさう　蓍といへれどわれは容ず。後世にこの草蓍を筮蓍につくれゝど、筮の字竹に從へば、いにしへ三代の時は竹幹にはあらざるや

はつたけがひ　かたち蕈の蕾に似たり、元來介にはあらず、福州府志に載たる石花の初生之。琉球にてイハヒラといふ、石枚の義之。ハツタケは吳林が蕈譜に載たる檑蕈之

はらしろうま　腹白の馬之。眠寤集にみえたり、騚なるべし

はらしろかけ　腹白鹿毛、驃の類なるべし　〔○以下五行并次頁白丁〕

ひば　檜葉をいふ之。また材にいふ柏の一種之、其良はヒノキに次もの之

ひれ　鰭之、振手の約りたる名之

○花にいふは苳苞之といへり

ひわ　鶸之といへり。鶸の字、篇海類篇に昆鳥也とみゆ。この鳥ひわ〳〵しき弱き鳥なれば二合の意にとるならんといへり

ひす　ある說に、飛鼠之といへり。飛鼠は陸應龍が廣輿記にみえたり、飛鼠は尓雅翼に載たる栗鼠なり、俗にリスといふは栗鼠の字音なるべし

ひがき　白介に似て支子色なる殼に、檜垣をみるやうなる章あるもの之

ひかひ　機織の杼のかたに似たる介之、殼うすく光澤あるかひなり

ひはだ　檜皮をいへり。ヒ｜は檜之、皮膚をハタ｜とよめり

ぴはがひ　琵琶介之。かたちのやゝ似たればいふなり、また鶉介、芋介などゝいへり。殼のいと薄く、唇の巻仰(マキカヘリ)中央(ナカゴコ)より旋結(トマリ)まで肥豊之、色類文彩はくさ〴〵有、いとひなびなる介之

ひばりげ　鷚毛也、百馬圖にみえたり、騮をいへり

ひざしろ　膝白也、馵をいへり。馵音注、尓雅に膝上皆白

ひらんかひ　肥前大村の海に有、玉を含めり。袖貝の類にやといへり

ひめくりげ　姫栗毛之、騵の屬之

ひたひじろ　額白也。蠡海集にみえたり、駒類をいへり、又白顚ともおぼゆ。詩の秦風に通して駮に作れり、郭尓雅注に戴星馬とみえたり

ひのきつばき　あやつばきの條にしるしたり　〔○次頁白丁〕

ふし　五倍子をいへるは鹽麩子の麩子の字音なるべし。伊豆國にマメブシ｜といへるは木實あり、其島の婦人この實を末となし齒黑(ハクロメ)の料(マウケ)となせるといへり

ふくべ　瓠をいへり。和訓栞云、淮南子抗浮、注に浮瓠之とみえたり、浮瓠瓮の義之、器に

用ふるものの名とぞ云々

ぶだうかひ　蝦介ともいへり、形ち蝦の實に似たり　〔○以下二行拠次頁自ト〕

へうたむ　瓢をいへり。瓢簞の連語よりいでたるならんといへり、語云、一簞食一瓢飲

べにくりげ　紅栗毛也、驗なるべし、順抄にいへる山鷄（ヤマドリ）赤毛馬なり

へびのかぶと　庚午の秋晩人あり來り奥產蛇兜の記を予に誰乃漫に紀して与レ之、題曰其稿一紙を索得してこゝに登錄す。記云、萬彙化毓之蕃、出於其類、而見二其奇一焉者、動物殊爲衆矣、狐有二媚珠一、兎有二建毛一、虎有二威骨一、鶴有二兵爪一、鴛有二烏一、明月之珠出於鯨睛、通天之角生於犀首、是皆常所聞見也、至其尤奇、則若下黃耳繫二吳洛之書一、鸜鵒告二楊崇之賊一、龜浮二鄴水一、濟二毛寶狐軍之沈一、鵲窺二獄門一、報中景進詔赦之下上尒、嘗聞陸奥國津輕蛇兜之事、人得之則以稱祥矣、今茲見其圖說、與尋西蛇角太異、輙閱二遠達之逃陳騅之譜一、莫紀之者、鄭門之蛇、淯淵之龍、亦無二載兜之說一、偶令男愿考索之、尒雅釋蟲、蒺藜、蝍蛆、郭景純解云、似蝗而大腹長角、能食蛇腦、又姚培謙云、抱朴子云、山中見大蛇着冠幘名曰升卿、呼之即吉、以頗近似焉、所謂蛇兜者、乃土俗之稱、云是蛇退之物也、按動物之中、易退解脫者、往逞有之、龍也者易骨、蛇也者易皮、

象之退齒、犀之退ㇾ角、麝之退香、夏至鹿角解而應陰、冬至麋角解而應陽、蟹則脫螯、蟬則脫殼、是其證也、夫戴兕之蛇、乃出於其類而見其奇焉、蓋方士之一奇物而已矣、今審定其圖狀、形類兕盛焉、而戴兩角具兩目、則齊于天牛豈其蛇退之者耶、吾豈奚決焉、意是蟲之庶下幾乎嘱二蛇腦一而着之者上、窮盡物理者、尙幸判焉、庚午之秋日、占春老樵曾槃漫記　〔〇以下十七行幷次頁白〕

ほしか　緹鰯（ヒシコイハシ）を乾して糞培に換るものゝ、乾鰯（ホシカ）の義ゝ

ほしあしげ　星葦毛也、駂をいへり

ほしつきげ　星月毛也、驃をいへり

ほしびたひ　星額ゝ、駒類をいへり。ひたひじろの條にもしるしたり

ぼさつ　俗に米粒をいへり。孫穆が雞林類事に、高麗方言、白米曰漢菩薩、粟曰田菩薩、これ其はじめ朝鮮より傳へる名なるにや

末行　美武妙毛　附

まかひ　眞介ゝ。或は朝鮮蛤、唇太介（クチブトガヒ）、北野蛤、洋介（オキ）、碁石介、高角介（タカツ）などゝいへり。石見國

高角にてこの介を砑て薬石につくり、世に鬻げり。この介の形ちは即蛤の大成ものゝ、嘉祐本草に載たる蛤蜊ゝ。その唇のむらさきなるを汪石山が本草會編に紫唇蛤蜊といへり

まくり　本編なのりその條にしるしたり

ましこ　さるに似たる鳥なればいへり

まるまろ　榲桲をいへり。按に番名マルメーデの轉じたるゝ。源君美木瓜考に、朱舜水の説によりて、強て此に云マルメロを木瓜となせしはいたく誤たり。本編もけの條をむかへみつべし

まつかさがひ　松子に似たる螺ゝ。濃黄にして魚の子の如き理あり

まつかしがひ　榧子のかたちにして松虫の羽色のごとし。やゝ大なるを葡萄介といへり

まきふでがひ　蓴螺に似て稜なし

まきものがひ　河蜷に似て色白く畳ゝ。また綾介ともいへり

まつかぜがひ　潮介に似て色白く、横にこまかなるすぢあり。また鷹貝ともいへり

まあかくりげ　眞赤栗毛也、騮をいへり。順抄にいへる山雞赤毛馬也

〔○以下六行次頁白丁〕

みかむ　密柑之。本編かむしの條にしるしたり

みづなぎ　本編なきの條をみつべし

みなとがひ　江戸にてハカヽヒといへるもの之。小にしてうつりあるを葉櫻、また蘇芳介などゝいへる名あり

みやこぼら　法螺に似て細小なるもの之。神崎の妓女河菰姫の哥に「ともすれば戀しきかたの名におつるみやこがひをぞまづ拾ひぬる」是みやこぼらにや

みとりがひ　少女介とも、女冠者ともいへり。漳州府志に江珧といひ、臺灣續志に海豆芽といへり。形ち爪甲の如くして色碧之。また泉南雜志に泥碑、泉州府志に沙屑、泉郡志に指甲螺ともみえたり

みやうがかひ　介には非ず、鯊の鰭を切はなしたるものにて、かたち蘘荷の花に似たれば名とせり、是蜑戸の冒稱なり

みそさゞえ　鶺鴒をいへり。本編さゝきの條をみつべし

みづあをげ　水青毛なり、驄をいへり

みやしろがひ　御居代介之。かたちまとかにして、からうすく、おほひなるかひ之。その文理うすくろくさゝめありて、花すゝきなどもて葺たるやうなれば、俗の神社にたとへていへるなり

みづこひどり　翡翠之といへり。本編ひすひの條見るべし　〔○以下六行并次頁白丁〕

むる　蝦夷語之。ムヰは海虫、鰒に似て小、また殼なくして懐核あり、形銜鐵の如く白肉堅硬たと云。ムヰ島は西部にありて、ことにこのムヰおほければ地名とせるといへり。さてムヰのある所には鰒なし、鰒のある所にはムヰなしといふ。これ夷中の一奇之

むくどり　これ山堂肆攷に載たる花鷄なるべきにや、清人の画にムクドリを画て秋鳥と題したり、其出所尋ぬべし

むすびがひ　かたち承露蕊に似たる介之。テウロキは證類本草に載たる草石蠶之、救荒本草に甘露兒とあり　〔○以下九行余白〕

めくはじや　みどりがひの條にしるしたり

めぐりがひ　旋文いと深くあらはれたる螺之、表は赤くして横に白きすぢあり、裏はうすむ
らさき之　〔○以下七行幷次頁白丁〕

もゝへがひ　京介に似て稜なく、また金絲介に似て横にふさき浮脉あり、その壟の間にくち
葉色に錦江の章あり、よて俗に蜀紅螺ともいへり　〔○以下六行幷次頁白丁〕

也行　伊由衣與　附

やさめ　肥後の方言にクスドイケ、葉は黃楊に似てやゝ大なり、枝々の葉ずゑに一刺あり。衛生家、寶六柞木、飲子の方語に柞木一葉一刺といへるものまさにこの木なるべし

やちえぶ　陸奥國の方言之。この鳥つねにはみえず、春より夏かけていづちともなくまれに來り、晝は草むらしげきみちにひそみゐて、夜になれば池沼の側にあり、其鳴時は嘴の半を水中に入て喚ぶ、ゆゑに其聲遠くひゞきて聞こいへり。さてヤチは沼なり、エフはヨフなるべし。其形ちは五位鷺に似て大頸、あし高く喙は魚狗に類してふとく、斑文あり、鷄にひさし。按に百花鳥譜に圖載せし水駱駝をまさに是なるべし。此類猶あり、京都にヱホゴヱと云あり。

筑紫にゴッテイドリあり、ゴッテイは牛の方言なり、其聲牛の吼るに似たれば也。下總國常陸國にホウドウあり、其聲は遠くひゞききこゆとぞ。常陸國志筑(シヅク)にヤワラシキと云も此類なりといへり。武藏國多摩郡井の頭の池にて深夜に鳴しとあり、土人一時あやしみて喧傳せしとあり、これも卽ヤチエフなり

やかたがひ　鵝介に似てうすく白きおほすぢ有もの也。御簾(ミス)介ともいへり

やなぎがひ　孔雀介ともいへり。鰒(アハビ)のいと／＼小なるものに似て孔なく、內に靑翠の寶光を含み、表(ウヘ)は鐵色也。他の國にて靑螺といへるものけだしはこれなるにや

やまどりがひ　しころ介、きりぐす、誰が袖、なたきり介などゝいへり。京(ミヤコ)介に似て旋後(マヤトメ)に疣(イボ)擔高くおこり、唇は外へ仰(ソリ)て、表はこき色のくち葉と古銅色の二種あり。山雞(ヤマドリ)の羽色に似たれば名とせるなるべし

やうらくがひ　菱介ともいへり。その體は京(ミヤコ)介に似て、首尾共に屈(ツマリ)、旋文をつらぬき、四方に鰭(ヒレ)をはり、菱角のごとし、色は白し、赤きを金魚(キンギョ)介などいへり

やまなしのき　本編のまなしの條をみつべし　〔○以下二行餘白〕

よたか　夜鷹《ヨタカ》。或はいふ、いにしへにいふ鵼《スエ》とぞ。ぬえの條にみつべし

〔○以下八行幷次頁白丁〕

良行　里留礼呂　附

〔○一枚白丁〕

りうきういも　甘藷をいへり。藷舊藷につくる、また薯に作る、俗名唐芋、薩摩芋是なり。此芋蔬中の救荒濟饑の第一助也、故にこれを藷糧といふ、何喬遠閩書及周煌琉求國志略等には之を穀部に收たり。槃按に、往歳琉求儀間親雲上《ギマペイキン》といふもの其種を海外福州より得て之を栽たり、時に元祿十一年戊寅の歲、中山王我が薩摩の藩臣種子島久基に贈、乃其室老西村某より命じて所領種子島石寺野といふ所にうゑたりとぞ、事其家記にみえたり。これよりして其種を傳へて薩隅日三國の間、寂莫の地寬閑の野所としてうゑざるはなし、故に我藩稀に焼澇の歉に遭こいへど敢て餓孚あることなし、其藷の糧となることしるべし。また按に、此ものははじめて晉の嵆含南方草木狀にみえたれど、宋元にいたるまで顯はれず、閩書南山志を

閲するに、明の万暦甲午歳荒す、巡撫金學曾外番より種を匃し、飭民をして之を種しむ、以て穀食に當、荒すれど災をなさず、淸の陳世元金薯傳習錄云、閩人陳經倫の父振龍嘗て呂宋にいたり、親ら朱薯の蕃植するをみて陰に買て以て歸、養得て當時巡撫金學曾に獻ず、此萬曆二十年甲午の歳之、是より以來廣く閩中に植、大に歳荒を救ふ、民其利を德として遂に金薯と稱するのみ。又云、薯は生にて食ふべし、蒸て食ふべし、煨して食ふべし、切て米となし、晒乾て收むべし、（按に薯万斤をほし乾て元千五百余斤を得ものなり）粥飯に作るべし、磨て粉とすべし、晒乾して團となすべし、餅餌となすべし、其粉に造るの法は薯卵を取洗淨し、水に和し磨し細にし、仍て大缸をもて水を貯へ、淘て浮渣を去法に倣て、藕粉とおなじく渣を豕に飼ふべし、其粉を持て丸を作れば彌珠西國米と異るとなし、また酒に釀し、錫に煮るべし。また按に六益あり、傳習錄附錄、陳雲番藷病中にみえたり。八利あり、閩書種薯の條にみえたり。十三勝あり、王禎農政全書にみえたり。其今吾藩刊布する所の成形圖說穀部に載たり、近來坂東地暖の所に之を植しは蓋元文の比靑木文藏にはじまれり、今時にいたりて其功世に大なり（文藏は佃屋半右エ門といふ者の子なるが、後出身して官儒となる、靑木敦書といふ、昆陽漫錄を著す、昆陽は其號なるべし、世に蘭書をよむとは此人よりはじまるといふ、前野良澤も此人に就てよみたりとぞ）

るりくらへ　虎尾草（トラノヲサウ）に似て花は紺碧色なり。中山の吳繼志は、唐山にて毛々草といふといへり、葉に毛茸のおほければ、偶然に名ぜしなり。またこゝの花戸にてルリ虎尾ともいへり

るうたさう　ハマアカザなどに似て、水邊沙地に生る草なり。葉もアカザに似ていと臭し、今の舶估土荊芥といへり、享保復言にみえたり　〔○以下三行幷次頁白丁〕

れたま　もと是蒜名なり、花鏡に載たる鷹爪を云なり。こゝの俗にハエニシタといへり、金雀花に似たるものなり。これを花鏡に載たる金雀花に充しはたがへり、金雀には刺あるとみえたり

れんじやくがひ　鳴戸法螺に似て稜角なく、唇は仰（ソリ）かへり、脊にひとすぢのふとき立すぢありて、旋文僅につれり、膚は平介（タヒラケ）に似ていと青光なり。すぢなきを金絲介といふなり

れんぜむつきげ　連錢月毛、こは驃なり　〔○以下一行幷次頁及次一枚白丁〕

和行　爲宇惠袁　附

〔○本枚白丁〕

ゐぐさ　俗に龍鬚龍常燈心草をいへり

ゐはひびたひ　位牌額之、騾をいふ之　〔○以下八行幷次頁白丁〕

ゑぼしがひ　本編せの條をみつべし　〔○以下九行幷次頁白丁〕

をは　尾羽をいへり

をほね　尾株をいへり、馬にいふ詞之

をしね　をは助語なるよし、稻をよめり

をだまき　救荒本草に載たる樓斗菜をいへり

をそごり　既におふをそどりにしるす

をここべし　俗に敗醬をいへり、こは抄に注したるチメクサ之ごいへり、いかゞ。あるひは万葉卷二十に、もの〻ふの乎等古乎美奈のはなにほひみに、こよみたる男花之といふはひがこ之。この歌は、秋野には今こそ花の咲にほふなれば、男も女もそをみに行ゆかめといへるこゝろ之

をこめがひ　みごりがひの條にしるしたり

をもとしろ　膝をいへり。また鷲尾本白の斑なごゝもいへり

をりいれほら　百重介にて横すぢの有螺之

をばなあしげ　黄驄をいへり。歌に、花あしげのうまのをふりなごよみたり

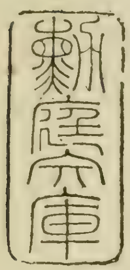
をはなくりげ　驃をいへり

附言

本書ハ大坂府立中之島圖書館秘藏書之、大坂株式取引所增山法學士ノ手ヲ經テ館長ヨリ之ヲ借入ス、明治四十五年（大正元年）七八月及九月休暇中ヲ利用シテ之ヲ筆寫ス、白井先生ヨリ之ガ謄寫ヲ托セラレタレバ也

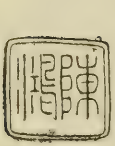
原本ハ十冊ヨル成リ、一ハ安伊（目錄例言十條付）、二ハ宇衣於、三ハ加幾久計己、四ハ左志須世曾、五ハ多知都天登、六ハ奈仁奴禰乃、七ハ波比不反保、九ハ也由與良理留禮呂和爲惠乎、十ハ史外ニシテ「國史外品動植攷」ト題ス、筆寫者ハ二人アリ、一人ハ命ゼラレタルモノヽ如ク、主筆者ノ校訂ヲ加ヘアリ、イヅレモ主筆者ノ頭註（黑及朱）ヲ加ヘアリ、校訂朱ノ外皆原注ヲモ摸寫セリ、一、三（初）五、六、九、十ハ主筆者、三（後）二、四、七ハ助筆者ノ手也、主筆者ハ靑木ト稱スル人ナル「七卷末ニ記シアルガ如シ。猶「勳庭文庫」「時習堂印」「田上」等ノ印アリ、圖書館印「四十年一月十日」トアリ、原文半紙本十行詰九册マテ題目字數ヲ以テ組ヲ改メアリ







（各卷首ニ皆押捺シアリ）



（九十卷末ノミニアリ）

渚能丹敷

上下

今よりはみとせ斗むかし、ある公子のおはしましけり。素旨潔く常に風雅をたふとみ給ひ、うまれて病に弱く、風にいたみ霜にやつれ、年月をすぐさせければ、世のまじはりをいとひ、ふるき書をもてあそび、大方の物の稱をしり給はむことをこのみ、そが中に、あら塩のやしほに染る貝みつものゝ殼をあつめ給ひ、眞木もて工かされ筐にわけいれて、雨のあしたに列、雪のゆふべに並して、見榮けるその種々を打ひらかせ給へば、げに心すさみて、春風の吹寄る渚をみるにことならず。うるはしきは梅櫻の花もひそむべけれ、ちゞの色は茜さす日影にうつる霞に似たるもあり。照る月のめに似たるもあり、常葉の若芽に似たるもあり。また夕晴の雲に似たるもあり、花黄葉のごとくちりはつべくもなく、たえぬ丹數の浦めづらしきを寵させ給ひて、そのあまたし數を眞寫にいろどりて、胡蝶帖に裝して、永年に種々の稱を考しるし侍れとの給ひけるに、見もしらぬ千尋千種の小貝あまたしあれば、たはやすく作るに便なし。さりこても不意に恩義のふかければ、左に右く書ごもを集しるして呈覽侍らんと思ひつれど、豫てわが公の勤に閑なければ、月日をふり延てけり。卽て公子の病かうじて牀に臥し給ひ、あやなくもしほの烟とゝもに逝去給ひけり。花さへもちるてふことはうかりきに、嗚呼うたてなる世

のうつろひ哉、とおもほえて、ことの葉は無氣になりけり。しかはあれど年月なみの如斯由來をしり侍乍、かひなき水沫になせしかば、日本魂ならずと思ひつゞけて、過にし空蟬の世を感て浦寂く、かひや玉やその稱を拾ひけれど、殊體なるものゝ雅なる稱はえきゝも習はねば、但につきたる稱のみかきつとひて、公子の餘波をみじかき筆に記置侍らむとてなん。曾永年

享和三年　癸亥のとし七月廿九日

渚の丹敷上の巻目錄

蛤類

櫻貝一〇綾縅さくら花の宴〇葉櫻〇落葉〇五色貝

色貝二 篝火 へにかひ

花貝三

眞蘇枋貝四 へにますほう 藤袴 雪家 葉さくら

梅の花かひ五 ちり梅 かゝみ貝〇夏の梅八重梅

月日貝六 桐壺

鏡貝七 燈籠貝 鳶貝 板貝

たいらき八 ひらふ貝 屛貝〇薄衣羽貝 蟬の羽 夕顔 舟貝

簑貝九 けかひ いのかひ 烏口 千鳥 紅かひ 鶯 鈴虫 雪家

板家貝十〇帆立貝

丹敷貝十一　千ひろかひ　撫子貝
巾着貝十二　あげまきかひ
溝貝十三　江貝　鱠貝　眞珠貝　烏貝　枕貝〇裏むらさき　藤のうら葉　浮舟　まくらかひ
はまくりかひ十四　板家貝　耳白　油貝　裏紫　またらかひ
かき十五　荒かき〇撫子貝　すゑつむ花　猩々貝　海菊　ぬれ鷺〇ころひかき　媼かき　いたほ　まつ
皮　松かひ〇波間柏　花かき　みたれかき　月日貝〇內海かき　かきつはた〇洋かき〇磯かき
眞貝十六　朝鮮はまくり　おほかひ　野北はまくり　おきかひ　碁石貝　高角貝　へにかひ　しほかひ　千
代かひ
貽貝十七　黑貝　いかひ　けかひ　せと貝　けかちかひ　赤かひ　うはかひ　藻かひ　はゝ貝　烏貝　孔雀
貝　千鳥
みるかひ十八　海たけ　白玉椿　銀まくら　きせにしき　わたほうし　つかひ　片つかひ
猿のかしら十九　猿ほう　赤貝　きさ　菊貝　ひあふき　ゆりかひ　つはめかひ　琵琶貝
簾貝二十　姬すたれ　伊豫すたれ

濤瀾貝廿一　栫貝
しらかひ廿二　もちかひ　しころかひ　文珠白貝○まろかひ　雀貝
檜垣廿三　餅貝○狹々理　葵貝　ふさかひ　桃花鳥の兒　菊貝
狐貝廿四　藤すたれ　せすたれ　文珠貝　あふらかひ
をみなへし廿五　茶わんかひ　漆貝　やすをかひ
玉簪貝廿六　玉貝　渡游
忘貝廿七　しらかひ　ふち袴　松山忘貝
潮貝廿八　千代かひ
淺理貝廿九　石貝　痢實　鹿の兒　女郎花
洋淺理三十　紀州あさり　いせすたれ　しほかひ　ますほかひ
藤袴三十一
兜貝三十二
しゝみかひ三十三　堅田かひ　諸所貝　赤しゝみ　しましゝみ

洋しゝみ 卅四　彌勒貝
少女貝 卅五　めくはしや
潮吹貝 卅六　櫻貝　鐙かひ　くち紅　雪家
薩摩赤貝 卅七　とちかひ
太刀貝 卅八　かたなかひ　長刀貝　烏貝　烏帽子貝　郭公　かものはし　眉貝　鷹の羽　きぬた　小竹の葉
〇長者貝　しりぶと　きぬた
まてかひ 卅九　かみそりかひ　〇總角貝　をたまき　くたまき　〇石わりかひ　烏貝
玉蔦 四十　ふこかひ　翁貝　蟬貝
雪貝 四十一　姫かひ
風貝 四十二
あしかひ 四十三
玉置貝 四十四
紫貝 四十五　裏むらさき　藤のうら葉　飯櫃貝　さゝらかひ

湊貝四十六　はかかひ　蓮櫻　ますほうかひ　絞櫻　いよすたれ
袖貝四十七　胡蝶貝　鶯貝　たまかゐ　あこやかひ　ふくらすゝめ　厚貝
おほみ貝四十八　やくかひ
媼貝四十九　○檜扇　末廣貝
葵貝五十

通計五十種　二百四十三名

附錄三十五名

渚の丹敷上の巻

皇國にて介甲蚌蛤を通じて貝といへり、訓てかひといふ。他の國にて貝はもと一物の名なり、殻またかひこよめり。順抄に見えたり。源氏物語に、かひつ物こあり。また倭姫の世記には、貝蛤物こ書り。他の國にては、長きものを通じて蚌といひ、まとかなるを通じて蛤といふ。凡兩殻の相合たるをおしなべて蛤といふ。また毛あるを蝛蠅といひ、尖るを齊蛤といひ、小なるを蠯こいひ、薄きを蚌こいふ、稜あるを蚶こいふといへり

圏【頭註】宛委餘編、貝至經尺照賓也、狀如赤電黑雲、謂之紫貝、素質紅黑、謂之朱貝、青地綠文、謂之綬貝、黑文黃畫、謂之霞貝、紫愈疾、朱明目、綬消氣障、霞伏蚘蟲、黑白各半曰伏貝、使人寡慾無以近婦人、黃唇點齒有赤駁、曰濯貝、使人善驚無以親童子、赤帶通脊、曰瞬貝、使胎消、毋以近孕婦、赤熾內殼赤絡、曰葺貝、使人健忘、忘。赤鼻靑脣、曰嗇貝、使童子愚女人淫、脊上有縷句脣、曰碧貝、使童子□□負日委貝、使人志強、○毛詩蟲魚疏曰、貝、水之介蟲、大者蚢、音下郎反小者、鰿貝、

○櫻貝一

櫻がひはみなと貝に似てこまかなり。また色貝にも似て長からず。その色はあしたの虹の、

目にかゞやく如くげにうつくしき貝なり。夫木集西行の哥に「春たてば霞の浦の海士人はまづひろふらんさくらがひをや。霞のうらは常陸にあり。定家卿建保百首の哥に「いせの海浪の玉よる櫻がひかひある浦の春の色哉。湊貝に霞のうつりあるをも櫻貝といひ、またみの貝に薄紅のにほひあるをもさくらがひといふこといへどみなたがへり

○絞纈櫻　また花の宴ともいへり。さくら貝のしろきに鮮なるくれなゐのしぼりあるものなり。其餘光（つや）もさくら貝ことなることなし

○葉ざくら　櫻がひのたぐひにして、少し深く、色白く、ぬけたる内にうす青のうつりあり。これを櫻貝に並し置ば花のかたはらなるみ山木のごとし。和哥の浦にて、いかひといふといへり。いかひとは、もろこしにて淡菜といへるものなり。後にいだす　また眞蘇枋貝のいとこまかなるをも葉ざくらといへり

○落葉　かたち、色かひに似て、少しあつく、朽葉にくろきをかねたる章ありて、ひなびたる貝なり。其名の似つきたればこゝにいだしぬ

○五色貝　櫻貝、葉櫻、しぼりざくら、おち葉などに似たるこまかき貝の五色まじはりたるなり。いとこまかなるほどめでたし

○色貝二

溝貝などにゝて、こまかなる貝なり、にほひうるはしくまばゆきほどのかひなり。薄紅としろにまた薄紫の三等あり、紅を篝火、またべに貝といへり。夫木集に「藤がたにこきむらさきのいろがひはいくしほなみか染かへしけむ。あるは撫子貝、丹敷貝などを、色かひといひしはいかゞにや。されどいにしへはかくもいひつらん。名所記に「いろ〳〵の貝ありてこそひろはめれ千種の濱のあまのまに〳〵。千種のはまは上総にあり。實方の哥に、かひをはこびにやるとて一妻戀ん秋のをのへの鹿よりも千くさの濱のかひよとぞおもふ　また「汐みてばいそ間になびく色かひのうきみしづみゝ戀わたる哉。あるは櫻がひとひとつものなりと覺しはあしかりなん

○花貝三

くれなゐにしろきもあり、いにしへは花のかたひらに似つきたるをば、打まかせていひしにや。夫木集に、さま〴〵の花がひどもおほくよりたるをみて「枝ながらうづまく浪もをらねばやちり〴〵にする千代の花がひ。あるはこゝにいふ花がひを、櫻がひ、またしころがひなど思ひしは心たがへり

○眞蘇枋貝四

しぼり櫻の姿にしていとこまかなり。その色は眞すはう色なるべきに、今はくろきと紫の絞りありしものをいふなり。こは鄙の風俗なるべし。あるは前に見えししぼり櫻をもかくいへり。またこゝにいふますはうの赤きを、べにますほといふは、かさなりたる稱なり。薄紫なるを藤袴といへり。藤袴、また別あり、のちにいだす。白を雪家といひ、いとこまかなるを葉櫻などゝいへり。眞蘇枋の正しきものは、越前色の濱よりいでにしこそ。其かひはあさりがひにゝて、いとこまかに、薄紅に草色のうつりありて、めでたき貝なり。山家集に「しほそむるますほのをがひ拾ふとて色の濱とはいふにやあらむ。此哥は越前色の濱にてよみし哥なり。また螺のうちに松むしかひといひしものをも、ますほといへどひがごとなるべし

○梅の花がひ五

花がひにゝてこまかなり。春の渚に打よる樣はげに風にうつろふ花の散がたのごとし、よてちり梅などゝもいへり。その形は一瓣のうめのはなにことなることなし。横にあらき理あり。新後拾遺、俊頼の哥に「春風に波やをりけむみちのくのまがきのしまの梅の花がひ。また出

現集に「雲のうへにちりぞまがへるはる風の吹上の濱のうめの花がひ。吹上の濱は紀伊國にありかくよみたるは、まさしくこのかひなるべし。この貝のおほひなるを、和哥の浦にてかゞみがひといふこいへり。おもふにこは洋しゞみのたぐひならん

○夏のうめ　また八重うめこもいへり。梅の花貝に似てうづ高く、いろ白く光潤ありて、あらきすじなし。みなこ貝のたぐひなるべきか

○月日がひ六

桐壺こもいへり。かたちまとかにして淺く、天にむかふかたは色紫黑にして、地にむかふかたは白し。おほく隼人の國よりいづるかひなり。こまかなるはいこめでたし。嶺南雜記に、日月こ稱せり。また享保の比諸越の人　皇國に來りてしるせし書に、日月蠔一名硨磲こみえたり。ある書に海鏡こ書殘せしは考をうしなへり

○鏡貝七

かたち月日貝にゝて色白く、雲母の如く燐々しき光あり、うへの一片はたひらなり。他しくににてその空明をもて色くすのごとく、次〳〵にして燈籠にはりまた窓に（名不詳とあふいて明をとるゆ

ゑに燈籠がひ、また蜑がひ、あるは舷がひなごゝいへり。南越志に、璅蛣漳州府志に、海鏡海月などゝ稱せり。ある書に玉珧の異名とせしはあしかるべし

【附錄圖】
〇薄衣　平貝のいさごまかなるが空明にして實に空蟬の羽にことならず、よて羽貝、蟬貝といふ。夫木集に「蟬がひの聲かときけば村松の岸うつ浪の響なりけり。また夕貝舟貝などゝいへり。夫木集に「こぐ人も潜によする舟がひは吹くる風やつなぐなるらん。老學筆記に、沙蹄と稱せり

村松の岸は伊勢にあり、今松村の濱にせみ貝あり

〇たひらぎ 八

たひらぎといふ詞は、平箭(ケ)の義なりといへり。こは中つ世よりいひし稱なりけり。按に神代記にひらふがひとみえたり。ひらふとは、平の字の訓にして、平貝なれば、たひらかひとおなじ義なり。此かひの膵橘のかたは狹く、唇のかたは開て、半はひらきしあふぎの如し、よて扇貝といへり。おもて黒く、また薄黄なるもあり。裏は青翠(ミドリ)の光艶あり。西陽雜俎に、玉珧とみ

えたり。珧の字を瑤ともしるせり、あるは此を鴉貝といふ、あしゝ琲の字を書しは誤なり

○簑貝九

簑衣に似てこまかなり。からのうへに芒あればまた毛貝、いのくちなどゝいへり。芒のおのづからおちて、色黑く内に紅のうつりあるを烏口といふ。八塩の磨て白く朽葉のみだれあるを千鳥といふ。ある書に、これを姫すだれといふはあしゝ。夫木集に「濱千鳥ふみおくあとのつもりなばかひある浦にあはざらめやは」紅なるを紅貝といふ、黄なるを鶯といふ、いとこまかなるを鈴むしといふ、白きを雪家といふ。あるひは松風貝」、とまやがひなどゝいへるはいぶかし。按に、いかひのこまかなるをもまたみのがひといふ

○版家貝十

隼人の國よりおほくいだせり、雨の叉鬠正しく、表にも裏にも溝たちて、内深くふたは平なり。大かたの人の家に杮子につくり、朝なゆふなに用る貝なり。大なるは夷びたれど、こまかきはめでたし。新六帖信實の哥に「あやしくも浦めづらしき板家がひとまふく海士のならひならずや。」異し國の人は牛邊蚶といふといへり

○帆立貝　これもよく人の見しりたるかひなり。おもて斗に溝立て、ふたは平なり。みちのくにの浦、またゑぞの千しまにおほしこそ。こゝかなるは世に稀なり。他の國の俗に海扇こいふといへど、海扇はおふ身貝の稱なり

○丹敷貝十一

三條院の御製に「こきまぜに色をつくしてよるかひはにしきの浦こみゆるなりけり」。にしきの浦は出雲ともいせとも、志摩ともいへり。神武記に紀伊國荒坂の津を丹敷の浦といふとあれば、きの國なるべし。また後拾遺酒命阿奢梨の時に「名にしおふにしきのうらを来てみればかづかぬ海人はすくなかりけり」。あざりは讃岐へ參られける人なれば、きの國にて讀れたる哥にやと云り　きの和哥のうらにて千色がひといふこいへり。按に、きの國に千尋の濱あり、さればちひろがひといふべし　按に、いせにも千尋の濱あれど、後撰には何てふ貝かあるべきとよみたれば、いかにや　このかひ後の世の俗に撫子貝また別に同名あり　といへり。かたちなでしこの花に似て紅なり。また白に紅のうつりあり。又黄色なるもあり、その色に光潤はなけれど、いとうつくしく、あしたの原に咲みだれたる丹つゝじのごとし。その大なるは版家貝、巾着貝の形にゝて、両殼ひとしく、理も正しくそろひたり。そのいろは更に艶なく、杉立る酒このむ翁の顔か、また秋深くもみぢせしぬるでの葉に似たり

【附箋】（朱）
○巾着貝　十二
石見の濱田にて總角がひといへり。形にしき貝に似て、また版家貝にも近し、おもてに五道の大溝あり。また其なかに小溝みつよつあり。色白くまれにくれなゐの星ありて、めづらしき殼なり

○溝貝　十三
これなん江湖の内にあり、このゆゑに江貝といへり。あるひは縮貝などゝしるせしは、江の音便にてあやまり寫しけん。肉中に白珠をふくみたれば、眞珠貝ともいへり。また烏貝ともいふ。小なるを枕貝といふ。かたち淡菜に似て片方に長し、表くろく、内は夜深き月の色にひとし。あるは金化に照るもあり。夫木集に「江の淀にみぞがひ拾ふうなゐこがたはぶれにだにとふ人もなし。按に、いにしへ此殼を螺甸に用ひたり、其證據は通鑑陳記の注にみえたり。爾雅に、蚌とみえたり。其肉中の珠は黄白の光あり、醫師のとふとむものなり
○裏紫（また別に同名あり）　藤のうら葉ともいへり。江貝の海に生しものなり。こまかなるは薄うしても

ろし。内は紫なり。その白を浮白といふ。また枕貝なごゝいふ。こまかなるは江貝と入みだれて分がたし

○はまぐりがひ 十四

李家漢語抄に字園を引て、蛤を濱栗と鎮たり。これ本草に云文蛤なり。和名抄にはいたやがひと注せり。おほかたの人しりしものなり。武蔵の海にはいとおほし。俗にその叉鬢の白きを耳白といひ、なべて紫黒なるを油貝といふ。（油といふ色は、玄に黄をまじへたる名なり。通雅にしるせり）また唇のむらさきなるを裏むらさきといふ。いろ／＼の文あるをまだらがひといへり。山家集に「今ぞしるふたみの浦のはまぐりをかひあはせとておほふなりけり（二見の浦はいせにあり。かひ合の事は、浦のにしきと云書にみえたり、よてこゝにならしぬ）

○かき 十五

和名抄に牡蠣をかきと注せしは、其殻を缺て肉をとるゆゑに云といへり。神宮に六月十五日荒蠣の御贄といふことあり。新かきの義にやといへり

○撫子貝（にしきがひの小なるもまたかくいへり）また末摘花、べにがひ、猩々がひ、海菊などといふこまかなるは、くれなゐのこき色にして、げに猩々のちしほもて染しにやと思はる。また白きに紅の絞りをう

つせしもあり、その白き事をぬれ鷺といへり。かたちはさくら海棠の花びらの如く、おもてに芒の生たるもまれにあり。夫木集西行の哥に「ちしほしむなでしこがひにしく色はやまとからにもあらじとぞおもふ

○ころびがき　またうはかきといひ、上總にていたほといへり。かたちまさかにして甲に角あり。さゞえの角にゝたり。いと爽びたるかひなり。こまかなるは色白し。松の皮かひ、また、松かひなどゝいへり。閩書に草鞋蠣とみえしは此かひなるべし

○波間柏　また花がき、みゝたれがひともいへり。かたちみなさがひに似て、身のかたはふかく、ふたは平かなり。その色白く磲(キヨ)石の如く、いと薄きは空明なり。また紅黃の薄色あり、紅白の二色を月日がひなどいへり。按に、いにしへは木の葉をなべてかしはといへり。中つ世には石もまたかしはといへり。哥に玉がしは、いはこがしはなどよみたり。それよりしてかひもまたかしはといひしにや。定家卿の哥に「浪花女がなみまがしはをとるかとに日もくれ袖に月ぞやどれる。これなんこゝにいふ波間柏なるべし。肇慶府志に、珍珠蠔といへる貝あり。また此るいなるべし

○内海かき　また、かきつばたといふ。江戸の海におほし。安藝の廣嶋などにもまたおほし。そのこまかなるはふたつみつ並つきて翔る燕めのごとし

○洋かき　こはあら塩のやしほの底に生しかひなり。殼は百重にして厚きことたぐひなし。安房上總常陸わたりの海中にあるものはかたち長し。またえぞの千しまのものはいと長く、山のごとくに重り生ずといへり。他のくにゝて蠔山といひしも實に所據あることなり。南部にあるはまとかにして、甲蔭閑書にいふ黄蠣なるべし

○儀がき　内海がきのいと小にしてまろく、さゞれいしなどによりて生しものなり。炮炙論に石牡蠣と稱せり

○眞貝　十六

朝鮮はまぐり、くちふとおほかひ、野北はまぐり、洋貝碁石貝、高角貝などいへり。石見の高角といふ所にてこの貝をきしり碁石となして世にひさぐといへり。かひの形は濱栗にして大なり。その唇ことに厚し。嘉祐本草に蛤蜊とみえたり。唇のむらさきなるをべにがひなどゝいへり。汪機會論にいふ紫唇蛤蜊なり。（ある書に紫口蛤蜊としるせしはわろし）そのいとこまかなるを潮がひ、千代が

ひなど〻いへり

○いかひ 十七

延喜式に嘉祐本草の淡菜をよめり。舊事記に黑貝とみえたり。今にしては、いがひ、けがひ、せこがひ、けかちがひ、赤貝、娼がひ、藻がひ、婆〻貝など〻て、其名いとしげし。殼は竪に長く、少し平貝にちかく甲高し。表は黑く、內は靑黄のひかりあり。唇の兩方に毛を吐て、たとへんかたなくをかし。よて本草拾遺に東海夫人の名あり。その肉中に珠あり、世に尾張眞珠といふもの是なりといへり。山家集に「あこやとるいかひのからをつみ置てたからのあとをみするなりけり。ある書にいふ、あこやは地名にして、尾張の國知多郡にあり。またみちのくにもありといへり。されどあこやとは吾子の義にして愛寵の詞なり、やは呼かけなるべし。新猿樂記にあこや玉とみゆ。今按に、あこやといへることいつしかに珠のいでしかひの名となり、また珠の名ともなりぬ、蝶(案蝶歟)かひといひしものも肥前の國大村よりいで〻、よき珠あれば、またあこやがひとはいひけるなり。また宇治拾遺に、つくしの太夫さたしけと申ものありけり、箱崎の太夫のりしげが祖父なり。あこやの玉の大なる豆ばかりなるを唐人にあたへて七十貫にかへてけりとぞみえたり

〔案〕游淌云名義難信

小なるをからすがひこいふ。西行の哥に「波よするしら〻の濱のからすがひ拾ひやすくもおもほゆるかな白良の濱はいせのくに〻あり、又きの國にもあれど、此うたはいせのくになりといへり和哥の浦にてこれを孔雀がひこいへり、その裏の青翠に

猶按に此哥のかたつがひは何貝にもあ

光あるをいふなるべし（また別に孔雀かひあり、螺の部にみゆ）一種小にして朽葉色のうつりあるをちどりこいふと
いへり。これまさしくみのかひにして、いかひの事にあらず
○みるかひ十八
風葉和哥集に、みまひの修理亮つくしへかへりくだりけるみちにて、海のわたりをおりて、みるがひなごをてまさぐりにして、右中將のなつかしくかたらひしを思ひて「あさりするあらいそよりも都にてみるかひありし君ご戀しき。又夫木集「うらよするみるかひありて與謝の海の湊の浦に此もへぬべし。（與謝の海は丹後にあり）かひの形は溝貝に似て、肉は金翠の光あり、その肉は小にして、舌はふとし。折さはからの外へいで、ありければ、そのからに舌のあこほどのうつろあり。つくしの柳川にてうみたけごいひしは、その舌の稱なり。殼はいとこまかなるは、げに白椿の花片のごとし、よてこれを白玉椿、また銀まくらなどゝいへり。一種きせ綿、またわたぼうしなどいふものも、此かひのたぐひなるべし。（袖がひのるいにて、しろきをきせ綿といへるもいあり、いぶかし）またつかひ、片つがひなごいへるも、此るいなるべし。海道記に鴨長明の哥に「たのみつゝ人は渚のかたつかひあはぬにつけて身をぞ恨むる。是泉南雜志に載たる西施舌也

れ、われて片なるをいひて一種の貝の名にあらず

〇猿のかしら十九

關東にて、小なるを猿頬といひ、大なるを赤貝といへり。順抄に、蚶をきさと注せしは、大小かねいふとみえたり。みくにの俗に、物のすぢあるをきさといふなり。きざむといひしことの略なるべし また古事記に、蚶貝をきさとよめり。蠶の字、字書にみえず、しばらく考ふる所なし その大なるを本草に魁蛤こいひ、小なるを通雅に蚕丁といへり。今の清船人は大蚶小蚶こいふといへり。一種石燕こいふものに似て色の薄赤を石見の濱田にて菊貝こいふ、その白を檜扇こいふ、隼人の國にてゆりがひといふ、また一種表のすぢおなじうして甲高からず、兩唇少しとがりてくち葉色なるをつばめがひこいへり。𧐏𧐏(つかひ)とがり少し長きを琵琶貝などゝいへり

〇すだれがひ二十

隼人の赤がひにひこしく、横にすなほなる細きすぢあり、げにをずの玉だれに似たり。鮮なるはこき色のくち葉にして、あるは黑きまだらあるもあり。きの國吹上の濱にいづるをよしといへり。山家集に「波かくる吹上の濱のすだれがひ風もぞおろすいそぎひろはむ。又覺性法親王の哥に「百敷の玉のうてなのすだれがひあしやが浦に波やかけゝむ。あしやが浦は津の國にあり そのこ

まかなるを姫すだれといふ、げに義理なり。またいよすだれといひしも、まさしく此かひなるべきに、近き比の書にはあし貝をもていよすだれとはいへり。また濱田の高角貝のやうにしてすぢなく、むらさきのうすきうつりあるをかくいへり。そのすぢなきをすだれといへるはいぶかし。それいよのくによりいでし簾は、ことに細にしてうつくしければ、かくて名産とはなりぬ。こをもてつくりし小簾はいとめでたし。皇國にて、おほよそものゝこまやかにして、ろふたげなるを、かりに姫といひければ、その貝のいとこまかにして、すぢも細きをもて、姫すだれ、またいよすだれといへることこうたがひなし。かくの如き名のたがひは、物わきまへぬ海士などのこゝによりてあやまりつらん

○漪瀾貝 廿一

ふすまがひ、また楯貝なごゝもいへり。すだれがひに似て兩脣とがり少し長く、色白く、むら〳〵にうねりたるすぢあり。げに狭々波の如し。また隼人のしころがひにゝて中庳し。すだれ貝にならべ置ば、桃と櫻のごとし。和哥の浦にてきぬた貝の事をさゞ波貝といふといへり

○しらかひ 廿二

名寄歌合に「月かげのしら〻の濱のしらかひは波とひとつにみえわたるなり。また夫木集に「はる〴〵としら浪の濱のしらかひは夏さへふれる雪かとぞみる。白浪の濱はいせにも紀の國にもあり類聚雜要に、しらかひを大饗に用ひし事みえたり。こゝにいふしらがひにや。佐渡にてもちがひ、あるひはしころがひといふ。かたちまとかにして淺くかつ厚し、表に纖く横すぢあり。一種丹後の宮津にて文珠の白貝といふものあり、滿貝に似てまた横すぢあり、ある書にこれを福州府志の白蛤なりといへり。また俗に忘貝の白く轉たるをも白かひといへり

○まるかひ　また雀かひ、かたちしらかひにおなじうしてまたつがひにも近く、少しとがりて雀のはしに似たり

○檜垣 廿三

いろ白くしらがひに似てすぢなく、黄なる狹々波の章あり。小なるはうつくしきかひなり、葱色にして章なきををみなべしといへり。別に同名あり隼人の國にてはなべてもちがひといへり。また濱ぐりのやうにしてまだらなるもあり

○狹狹理　檜垣に似て殼うすく、朽葉色にしてみだれたるなのめなるすぢあり、少しあふひ草

の葉すぢにも似たり、よて葵がひともいへり。また房貝ともいふ、その色の白もあり、またこまかなるあさりがひの章に似て、薄黄なるを桃花鳥(とき)の兒といふ。また立にすぢのそろひたるを菊貝といへり

○狐がひ廿四

洋あさりに似て、唇の両方少しとがり、内深く、表にすぢ高く、おとりくち葉いろなり。一種すぢなく、むらさきの輪あるを藤すだれ、またせすだれなどゝいへり。あるはそのまとかなるを文珠貝といひ、黒きをあぶら貝といふ。またある書に、丹後の宮津にありしは、形長く、まとかにして、表にすぢありて、うす色のくち葉なり。裏はなべてむらさきなり。からあつく潮ふき貝に似たりとぞ

○をみなべし廿五

きつねがひに似てうすく大小あり。但馬の國におほし。濱田にて、小なるを茶碗がひといふといへり。（浪花にて鳥かひの事を茶わん貝といへり）江戸にてうるしがひといふ。ある書に、やすをがひなどゝいへり。形は赤がひに似て、殻うすく、うす色のくち葉なり。和哥の浦の俗名もこれなり

○玉卷がひ　廿六

おきあさりに似てすぢあらく、水色にして少し厚きかひなり。その黑きはまれにあり。一種甲高く、まどかにして、すぢあらく、好き貝なり。濱田にて玉貝といふ。こまかなるを波游といふ。そのいよ〳〵細なるを浪の兒といふはたがへり。波游の白きをしら貝といへるもあしかりなん

○わすれがひ　廿七

萬葉集身人部のおほきみの哥に「大伴のみつの濱なるわすれがひ家なるいもをわすれておもへや。みつのうらは津の國にあり　また大伴の坂上の郎女京にむかふ海路に濱がひをみて「わがせこがこふればくるしいとまあればひろひてゆかん戀わすれがひ。この哥のわすれ貝は、いかなるかひにや、今はさぬきの國松が浦にいづるものをめでたしとす。かたち檜垣に似て、殼厚く平かなり。表ははまぐりなごにひとしき章あり。その色は薄紅、薄紫などあり、餘光も艶きかひなり。器の内にいとこまかなるきさあり、眞白なるをしらがひといふ。後拾遺に、定賴中納言、定家卿に別るゝといふ哥に「松山の松のうら風吹よせばひろひてしのべこひわすれがひ。小なる

をあるひはふち袴といへり。別に同名あり濱田にて松山わすれといひしかひは、隼人の國の赤がひ蚶赤貝との別なりにして細なり。また立に淺きすぢあるかひをも、しほふきがひをも、わすれがひこいへご僻事なり

○潮貝廿八

師かねの哥に「いせの海の浦の汐がひ拾ふてふあまりに袖のぬれてかはかぬ」かたち三角にしてすぢなく、甲あつうしていと小なり。あるひは千代がひともいへり

○淺理貝廿九

【後補】後にかうがへぬるに誠なる色の濱にいづるますほがひは、まさしくあさりの兒がひなり

光としの哥に「いせの浦のしほひにあさりもとめたるかひをぞたもつ身をば捨つゝ」。隼人のくにゝて石がひといへり。むさしの海にはいとおほきかひなり。小なるは色の濱のますほかひに似たり。あるひはこれをかるかや、鹿の兒、をみなべしなごゝいふ。皆その章によりてみだりに稱つけつらん。今のから人は文蛤といふといへり

○洋あさり三十

紀の國吹上の濱のものをめでたしとす。江戸にては紀州あさりといふ。かたちはまぐりに似て瘦たり。その章もやゝひとしく、くち薬色なるものおほし。白きにほそき文あるを、いせすだれといふ。あるはあしがひといへごあしゝ。（あしがひは後にみゆ）また小なるをしほがひといふ

○ふち袴　卅一

これはあさりのごときこかひなり。地しろくむらさきのうつりありて、潤色よきかひなり。おもふにますほのたぐひなるべし。ますほのむらさきなるも、あるひはふぢばかまといへり

○しころがひ　卅二

おほよそみつあり。前にいふしらかひの事もかくいへり。隼人の國にてしころがひといふものは、あさりに似てあつく、きさ高くおこりて、雁の齒をつらねたるが如く、いとそは〳〵しきかひなり。またかぶとがひの事も、しころがひといへり。こは濱栗のるいにはあらず、無對にして福州府志にいふ石椿のたぐひなり

○しゞみがひ　卅三

萬葉集に「すみの江の小濱のしゞみあけもみずしぬびてのみやこひわたりなむ。（すみの江は攝津の國にあり）

また堅田貝ともいへり。夫木集に「しゞみとる堅田の浦の海士人よこまかにいはゞかひぞあるべき。堅田の浦は近江にありまたせたがひともいへり。是あふみの膳所にいでしゆゑにいへり。泥水におひしはいろくろし、清水におひしは色赤し。あふみの堅田に赤しゞみあり、共に本草にいふ蜆なり。隼人の國の縞しゞみは、表に白き横すぢあり、これ河間府志にいふ白蜆なり

○洋しゞみ 卅四

かたちしゞみとことなることなし。卵ほごにして色黒く、唇にこまかなる理あり、小なるは檜垣などの屬なり、大なるはいといやし。光州府志に蝙といへるもの是ならん。通雅に蠔といひしも、其音の通ひたるなるべし。ある書に彌勒がひといひしはこのかひなるべきか

○少女貝 卅五

ゐくはしやともいへり。或書に女冠者と鎭たり。備前におほし。きの國、石見、むさしなどにもあり。かたち人の爪甲に似ていと薄く、色はみどりなり。また篶の葉に似てみじかし。肉はしゞみなどにひとしく、また外へ紐の如きものをいだせり。泉南雜志に泥磚といひ、泉州府志に沙屑といひ、漳州府志に江桃といひ、泉郡志に指甲螺といひ、臺灣續志に海豆芽といへり

○潮吹貝 卌六

こは荏土にていへる稱なり。かたちはゆりがひに似て薄く色白し。あるひは薄紅の轉あるを、海士人はみだりに櫻がひこいへり。閩書にいふ沙蝨なりこいへごいぶかし。今の唐人は蛆蝍こいふこいへり。一種小にして唇厚きものを鐙貝といふ。内にくれなゐのうつりあるを、くちべにといふ。また一種立に横にすぢありて、白くくもりたるを雪家といへごたがへり

○薩摩赤貝 卌七

すだれがひに似て粲々の理あり。色はくち葉にして、ふしかねのまだらあり。いと小なるをとち貝といふ。濱田にて松山忘貝といふは悞なり。また或は高角貝といへごたがへり。眞がひの名のこゝにみだれたるなり。福州府志の赤蛤とせしはいぶかし

○太刀貝 卌八

かたながひ、長刀貝なごゝいふ。また俗に、からすがひといへり。色黒くして薄し。かたち溝貝に似て狹く長し。また鳥の風きり羽にも似たるなり。本草にいふ馬刀なり。順抄に馬刀をまてと注すれご、今の俗にまてといひしは馬刀にあらず。おもふに馬刀の音の轉じて、まてこ

なりたるならん。後に今剃刀貝に、までの稱を付たるものにや。また源登州の時すでにかみそりがひに、までの名ありしを、馬刀にあてられしか、しりがたし。たちがひに三等斗有、色黒くそりもせて長く甲の高きものを烏帽子がひといふ。また甲高く、くち葉色にして、黒き章あるを、ほとゝぎすといふ。亦少しそりて、いと薄く、鷹の羽の如きまだらあるをかものはし、眉がひ、鷹の羽などゝいふ。あるひはこれをきぬたともいへり。また一種、細にして長を小竹の葉といふ。これ圖經の齊蛤なるべし

○長者がひ　またしりふこゝもいへり。隼人の國にあり。その殼半(なか)身は肥て、半身はやせたり。えぞより來るは大にして、今にも夷(ひな)びたり。こは太刀貝にはあらねど、少しく似たる故に、こゝに置ぬ。また此一種、いと薄うして、立にそろひたるすぢありて白きをきぬたといへり

○までがひ　卅九

かたちなゆ竹をふたつにわりたるが如く、かた方(へ)は牒楄、かた方は唇なり。その利きこと刄のごとし、もてかみそりがひといへり。色は青黒にして光あり。後撰集源の英明の哥に「いせ

の海のあまのまてがひまてしばしうらみて波のひまのなくとも。これ閩書にいふ竹蟶なり

○總角（あげまき）貝　廂環（かたまき）、またくだ巻などゝいへり。渚の泥中に生ず。かたちまての如く指ほごにしてうすし。兩頭まろく、その章總角にひとし。つがひは横につらなり、兩頭より絲のごとき物をいだす、これ嘉祐本草にいふ蟶なり

○石わりがひ　津くしにおほし。からすがひこもいへり。磯邊の礁（いは）間にあり。その石をうちわりてとるといふ。甲は魚鱗（いろくず）の如し、色くろく、上小にして、下は大なり。甲の下に肉あり。漳州府志にいふ石蟶なるべし

○玉葛　四十

丹敷がひの小なるに似て、牒樞みじかく、肉ふかし。色白く、立にそろひたるすぢあり。あるひは翁がひといふ。濱田にてふごがひこいへり。まれに黄なるもあり。一種いこ薄く白きものを蟬貝こいへり

○雪がひ　四十一

姫がひこもいへり。溝貝に似て淺く、色白し。章なく、光あるかひなり。おほきなるは洋あさ

り斗なり。蝦夷より来るはから厚く、大にして光彩なし。横にむら〳〵なるあらきすぢあり

○風がひ 四十二

販家などに似て小なり。色白く、あるひは章あり。唇は風の衣の吹かへせるがごとく、うね立たり。その姿は大身がひなどのたぐひなり

○あしがひ 四十三

鷹の羽がひなどに似てそりなく、なのめなるこまかきすぢあり。また淺里がひに似て、横にながく朽葉色のまだらあり。げに霜寒き比のよしあしの葉に似たり。くれなゐによそほひしは、いとめでたし。津守冬國の哥に「海原やなみにゆらるゝあしがひのかひある國となれるかしこさ

○玉置貝 四十四

おきしゞみに似て平なり。ふごがひにも近し。色白くむらさきのうつりあり。なべてしろきものなり。前にいへる玉巻がひと心得たるはたがへり

○紫がひ 四十五

裏むらさき、藤のうら葉、飯櫃がひなどいへり。是溝貝などのたぐひなるべし。夫木集に「むらさきのかひよる浦の藤潟は波のかへるぞ花とみえける。　また外黄に黒きをかねたり、內むらさきなるもあり。なべてうすきかひなり。　一種さゝらがひあり、形おきあさりに似て、唇にきさあり、白色にして紫のにほひあるは、是をもむらさきがひといへり

○みなとがひ　四十六

江戸にてばかがひといへり。冬の比はこゝにおほし。そのことに小なるはいろ〳〵のうつりあり。俗はうつりにめでゝ葉櫻、ますはう、しぼり櫻などゝかりにいへり。おほひなるはみるにかひなし

○袖がひ　四十七

波あらふ衣の浦の袖がひをしほひに風のたゝみおくかな。衣のうらは三河にあり　また胡蝶がひ、鶯がひ、たまがひ、あこや貝、ふくら雀などゝいへり。あこやの事はいがひの注にしるし置ぬ　皇國の海にあるはなべて小なり。　その形はげに胡蝶の翅をたゝみたるがごとし。　表に光潤はなけれど、內に明月の光をふくみて珠をはらめり。　そのいと小なるは蝶榀の兩耳長くいでゝめでたきかひなり。　やゝ大な

るは、まれに肥前の大村及いせの海にありといへり。催馬楽の譜に「いせの海きよき渚に中略かひや拾はん玉やひろはむ。といへるはこのかひにや有ん。もろこしより来れる大なるは、わたり七八寸斗なるあり。青白の寶色ここにめでたし、俗に厚がひといへり。嶺表記に、珠牡といひしはこのかひなるべし

○おほ身がひ　四十八

あるひはやくがひともいへり。今のやくしまにいでしゆゑにかくいふといへり。やくしまは大隅の國にあり。按に、やくのまだらがひといへるは、順抄に、錦貝の事なり。螺類にくはしくいだしおきぬ　このかひは、いふべくもなき大なるものなり。表は高く襞おこりても〻へに重たり。その唇もうねの形をなせり。大なるはわたり三尺にみてり、小なるはわづかに掌にいるべし。香盒などにもちひていとめでたし。されど金玉よりも得がたし。海薬本草にいふ車渠にして、七寶の内に入たり

○うはがひ　四十九

かたち大身がひに似て、大なるもまれにあり。雨唇とがりて、開ける扇の如し。うねは高けれどみだれてひとしからず、またかさねなし。小なるもまれにありといへど、形のいやしきかひ

之。老たる麻績女(をみな)のくちもとにここなることなし。おもふに霏雪錄にいふ海扇なるべし

○檜扇　うばがひにゝていと小なり。また末廣こもいへり

○あふひがひ　五十

二葉ぐさの葉に似て、しろきと薄葱と二色あり。合貝はまれなり。和哥の浦にいづるといへり。また螺にたこ舟あり、これもあふひがひといへり。小なるを波游といふはあしゝ

附録にしきの落葉

三光がひ　月日貝に白き星あるをいへり

駒のつめ　洋しゞみの皃貝なり

樺ざくら　櫻貝の樺いろなるをいへり

をしがひ　舟貝の別名なり。こゝにいふ舟貝は松がひなり

高濱貝　波游の大にして、裏むらさきなるをいふ。また藤の花ともいへり。表にくち葉の長きうつりあるを柳貝といへり

塩がひ　あさりをいへり

千鳥貝　色の濱のますほがひに似たるをいへり

卯の花がひ　雪がひの小なるをいへり。また大なるを白鳥貝ともいふ。和歌の浦にて雪がひといふは、あさりのやうにして、立にほそき理ありて白きかひなり

桃の花がひ　櫻がひの白きに、紅に似たるうつりあるをいふ。また雪がひともいへり

翁がひ　玉がひに似て、横に粗き壟(うね)すぢあるものなり。一種色白く、褐のまだらありて、立にすぢの深く入たるもあり

すまがしは　かきをいふといへり。こはいぶかし

橦木(しゆもく)がき　牡蠣の一種にして、蝶蝠直に長し。兩方へはりて丁の字の形の如なる故に橦木の名を得たり。かきの條に書もらしつ

落葉　葉ざくらがひをいへり

袖がひ　胡蝶の袖がひ、螺類の袖がひにあらず、土佐の國幡多郡の名産なり。はまぐり、忘がひのたぐひにして紺碧(ミドリ)の章あり。あるひはしげきみ山を畫たるにも似たるもあり

鏡がひ　しらがひをいへり

花版家　版家がひのふたにして、裏に鐵色(かね)のしぼりもやうあるをいへり

しながひ　色も形も濱栗の油がひに似て厚く、表は横にむら〳〵の理ありて、立にうすくち葉のあらき立すぢまたむら〳〵にあらはれたり

かうぼねがひ　蛤類のあふむがひをいへり

玉置がひ　洋あさりの檜垣もやうを磨(みがき)いだしたるをいへり

時鳥がひ　たちがひの表に青きさゞ波紋(がた)のあるをいへり

若紫　みなごがひをいへり

朝日がひ　しらがひの如にして、耳にふしなく、線豚はおなじかひなり。土佐のはた郡よりいづる朝日がひはこのかひの事にや

みのがひ　かたちは巾着貝に似て、兩方の牒樞なく、理は丹敷がひの如く色白し。按に玉蔦なるべし

鎌倉龜貝　形画ける雲珠(うず)の如く、甲高く唇の方まろく、牒樞こがりて理もなく、殼うすく、赤樺いろにして、おほく合貝なり。相摸のかまくらの海にありこそ。またぶだうがひこもいへり

金魚がひ　形おきしゞみに似て、片方の耳にいと細き立理あり、色赤し

ふくら雀　胡蝶がひをいへり

風鳥がひ　かたちくちたる木の葉のごとく、鐵色にして、ちら〳〵として狹目膚なり。立にうねりたる白すぢあり、此を風鳥の章にいひなせしにや。長きとみじかきとあり

比翼がひ　版家貝に似て、牒樞の兩方正しくそろひ色白く、蓮は丹敷貝とことなることなし

よろひがひ　しころがひをいへり

唐の鏡　かゞみがひをいへり

海菊　いたほがきをいへり

渚の丹敷下の巻目録

螺類

保ら貝一　○京ほら都貝　兜貝　柳貝○鳴戸ほら瀬戸貝○すちほら常陸帶　竹の子かひ

あかにし二　つるひ　天狗貝　琉球赤貝○鐵貝○ちりめん貝くたせん貝　茘枝貝

へなだり三　夜啼貝　長にし○簾環鶯の兒

さゞえ四　さたを　角なしさゝえ　左まき　平さゝえ　浮島かたへ　花勝見　色さゝえ　さだへ

蜘蛛貝五

ときんかひ六　片方貝　角かたへ　蜘蛛かひ　きぬ笠　破笠　雲貝　大龍坂

玻玫貝七　やくのまたら貝　朝鮮さゝえ　龍天螺　青珠

ばい八　島はひ

たにし九　たつび　たつぼ　なし　たんし

朝顔かひ十　桔梗貝　るりかひ　紫ほら　裏むらさき

ささこ十一　ちささこ　せゝかひ　色きさこ　さらきさこ　おほきさこ　だんへいきさこ　銀きさこ　玉貝〇白菊

くるまかひ十二　巴貝　御所貝　山車貝

かたつふりかひ十三　眉螺

つめたかひ十四　薩摩かひ　白玉　朝顏　萩の露　幾貫　きせ綿　白鼠　鼠貝　富貝　猫貝

裏雲珠十五　うひす貝〇夏桃貝　桃貝〇石疊貝まむしかひ　えひす貝　くろみな　黑玉　かんから　こし高　銀さゝえ

鶉貝十六　やしろ貝〇津貝片つかひ　ふたうかひ　釜貝

かつらかひ十七

家形貝十八　富貝　鹿の兒　みすかひ

百重貝十九　蜀江螺

山鳥貝二十

銀杏貝二十一　松賀貝　松川貝〇芭蕉貝〇惡鬼貝天狗かひ　九輪貝　つるへ貝〇瓔珞貝　菱貝　金魚貝

あふむかひ 廿二 不結貝 九穴貝 こやすかひ
多股舟 廿三 葵かひ
琵琶貝 廿四 尾上かひ 鶉貝 芋貝
れんじやくかひ 廿五 金絲貝 むかし袂 はしとみ
脊子貝 廿六
松塔貝 廿七 むしろかひ みのかひ 花むしろ
あられかひ 廿八
綾巻貝 廿九
したゝみ 三十 鳳凰貝
松虫貝 卅一 椎の實 紫貝 俵貝 袂貝 螢貝 ふところ貝 竹の子貝
梛貝 卅二 龍宮はたるかひ
玉簾 卅三 へにしほり
しらけかひ 卅四 ますほかひ 思ひかひ 小貝

いつまてかひ 卅五　千日かひ
物あらかひ 卅六
われから 卅七
山椒貝 卅八　〇要貝
葡萄 卅九　棗貝　こはくかひ　關守　ほたる貝　枸杞貝　かいきかひ
岩にし 四十
千くさかひ 四十一　千代の花貝　から梅ほら
袖かひ 四十二　ねつけかひ　鼠貝
がうながひ 四十三　河みな　にな　ひな　からすかひ　ほうさい
にかにし 四十四　辛にし　磯貝
卷筆貝 四十五
卷物貝 四十六　卷貝　綾貝
竹の子貝 四十七　卷小竹　千とせ貝　はしかひ　きりかひ　きぬかひ　えひ貝　くちきりかひ

絲懸貝四十八　捻貝　關守　駒の爪　きぬほら　をた巻　くれは
海筆貝四十九　紅海筆
きせるかひ五十　川蜷　しのふかひ
折入ほら五十一
結貝五十二　ゆひかひ
身なし貝五十三　つとかひ　いもかひ　藤かひ　はるしや貝　ざくろ貝　麥かひ
枕貝五十四　玉くしけ　薩摩雛　玉虫貝　かひこかひ
蛸蛤貝五十五
杓貝五十六　糸巻　なけひ　南口　絹包　きぬ巻　枸杞貝　つらゝ貝
寳貝五十七　児寳貝　齒貝　星寳　はしかひ　かいき貝　ちりめん貝　にしきかひ　霞貝　ゑかき貝　紙すりかひ　八丈貝　馬貝　巻貝
海鹿五十八

片し貝類

あはひ一　鰒玉　とこふし

礒貝二　かたしかひ　小鷹貝　濱千鳥　雪雀　みのかひ　嫁か笠　嫁か皿　御幸　金皿・銀皿　麻の葉　もみち　雪家　峰の雪　をとめの笠〇藤壺〇桐壺

柳貝三　孔雀　しよかひ

蜑貝四　舟貝　白玉椿〇螢貝　いんこかひ　蓑衣　ひとへかひ〇駒の爪貝　海士小舟　東かひ　松貝

ゐほしかひ五　わしの爪　つめかひ　鳥かひ　かうむりかひ　せ

殊體類

露貝一　小竹の露　萩の露　龜貝

はまかつら二　まかりかひ

かふこかひ三　星かふと　うに　かせ

棘蠣（まらかき）四

角貝五

砥草（とくさ）貝六

寒菊　七

破（われ）貝　八

甁（きう）貝　九

冒稱類

桔梗貝　一　多股枕　花かつみ　あけ巻　ゑんさかひ

香はし貝　二

はつたけかひ　三　くす家貝　めうか貝

茗荷貝　四　千鳥かひ

塩家貝　五　あみかひ

せみかひ　六

あふひかひ　七　蟬の羽かひ

通計七十二種二百九十七名

附錄十九名

渚の丹敷下の巻

螺をこゝに讀てにしみなといふ、またばひともいへり。これ貝字の字音なり。我くにゝては貝の字をもて螺蛤の惣名となせり、讀てかひといふ。其ばひと呼し時は、螺のみにかゝる、またあるはつぶ、あるはたまなどといへるは浦人のひな詞なり

○保らがひ

寂蓮の哥に「山ぶしのほらふく峯のゆふ暮にそこともしらぬすゞのうは風。ほらはもと法華經に法螺とみえたり、その字音を呼たるなり。このかひ大なるはまれなり、いと小なるも、こと更に少し。形ちはみやこほらに似て、たくみなるものなり。兒がひといへど、おのづからら厚く、玳瑁の如きまだらあり。異物志に、梭尾螺王研、三才圖繪に吹螺、潜確類書に梵貝といへり

○京ほら　また都貝ともいへり。ほらがひの小なるにゝて痠たり。唇頭少し卷仰てうす樺色なるものなり。まれに鐵色の斑あるもあり。神崎の伎女河菰姫の哥に「ともすれば戀しきか

たの名におつるみやこがひをぞまづ拾ひぬる。あるひはしころがひといふ、こはいかゞあるべき。一種おなじかひにして、鳶色の線すぢを卷たるを柳がひといへり

○鳴戸ほら　また瀬とがひともいへり。ほらのるいにしてなだらかに小なり。唇外へ仰そり、内は豊にして、あぐりに疙瘩をまとひ、くち葉色のうつりあり。小なるためでたしとせり

○すぢほら　海筆がひに似て、首尾ともにひとしくそろひて、旋文に稜なく、から厚く薄色のむらさきなり。その大なるはくり色にして、脉理はひだ山の檜をわりたるが如く、聚くに横すぢあり。和哥の浦にて常陸帶といへり。相摸かまくらわたりにては竹のこがひといふ、げに色もすぢも竹筍に似たり

○あかにし二

保らがひに似て唇あかく、稜角あるものなり。一種唇薄く外へそりかへりたるものを、和哥のうらにて蓮貝といひ、唇の先とがりて勾ながきものを天狗貝といふ。また一種大にして兩頭ひとしく、片方かたへは内へ卷て寶貝の如く、脊にめぐれる癭こぶたくみにして、章も樺色に濃色くち葉のまだらいと鮮なり。内はなべて雙紅こつぱい色なり。偶琉球より來るといへり。俗に琉球あか貝といふ、

皆閩書にいふ紅螺なるべし

○鐵貝　赤にしの一種にして、稜角なくすなほに長く、表も脣も皆鐵色なり。少し間米（しま）の白點あり、いとひなびたるかひなり。山うばの齒ぐろめせしに似たり

○ちりめん貝　赤にしの一種にして稜角逆立、膚もいろくすの如くにおこり、いかれる姿のかひなり。色はなべて薄樺なり。また一種首尾とがり旋文に隨ひ逆鱗あり、和哥の浦にて、くはせんがひといひ、茘枝貝などともいへり

○へなたり三

徒然草に、むさしのくにに金澤といふ浦にありしを、所のものはへなたりと申侍るとぞいひし。按に今はその里人は夜啼貝といへり。赤にしの如くやせて、嘴先と旋後（まきじり）とひとしく尖ける、その晒たるはうすくち葉色なり。あるひは長にしなどゝもいへり。福州府志に香螺と云、その厴（ふた）を衆香にまじへて焚ば、ます〱芳氣あり、ひとり焚ば臭し。本草に甲香とみえたり

○麻環（まだまき）　あるひはへなたりと覺たがへて長にしといへり。かみつふさのくにゝてはなよきといふ。おもふにこもまた夜なきといへる名のみだれたるにや。なよきといへるこゝの義（こゝろ）いぶ

かし、形はまさしく夜啼貝に似て、身ゆたかにして兩端こゝにほそし。膚はなべて布理あり、夜啼にはたえてなし。その兒貝を鴦の兒こいへり。通志に梭螺といへるはこれなるべし

○さゞえ四

順抄に榮螺を讀たり。催馬樂の譜にさだをとみえたり。一種角なきものを角なしさゞえこいふ。ひだりに卷たるを左旋といふ。扁くして小なるを平さゞえこいふ。あるひは是を浮しま片方といふ。その兒貝を花勝見こいふ。いこ小にして黃色なるを色さゞえといふ。夫木集に「さだますむせとのいはつぼもこめいでゝいそしき海士のけしきなる哉。榮螺は我くにの稱なり。今の清人の俗に草螺といふといへり。また別に銀さゞえあり、名おなじうしてこゝなり 裏眞珠の條夏桃貝の下にあり

○蜘蛛貝五

形ち保らに似て、から厚く、唇をめぐりて角あり。裏は赤にしの如く赤し。こゝの海にはまれなりとぞ。折〱りうきうより來るといふ。臺灣府志に壁虎魚といふ 壁虎はこゝにいふ壁蜘の事なり。その形ちの似たるによりて名とせり

○さきんがひ六

ある書に片部貝、角片部なごゝいへり按に片方がひといへることなるべし、此かひ片方にして、礒貝などの如くなれもとかたへとすみていひしなるべし。今片部といへる事の義詳ならずあるひは蜘貝ともいへり、形は臺の小笠に似て鐵色なり。ほとりに皂莢の樹刺の如きをめぐり生じて蜘蛛のかたちに似たり。浪に晒たるをきぬ笠、雲貝などゝいへり。その廓うすくたゞれて雲片の如くなるゆゑにこの稱あり。大なるを大熊坂といふ。彼の白波のきたる笠の破たるか誰かこの名を付しぞ

○玻玖貝七

順抄に錦貝をやくのまだらがひと注せり。且云、西海に夜久島あり、彼島出すところ釋日本記注に、私記を引て、玻玖は西海の別島なり、美貝を出す南島志の序に、推古天皇二十四年玻玖人来、南島朝献は蓋しこれよりはじまる、是歳は隋の大業十二年なり、隋書に邪久に作る、此今の琉球なり。その琉球といひしは、其國人みづからいひし稱なり、故にいにしへかつてりうきうといはずといへり今琉球奄美島等の海中よりこの貝を産すといふ。世つねにあり、あるひは朝鮮さゞえといふ。げに榮螺によて、大旋文高く起て角なし、内に寶光を含めり。寶器螺甸につくるもの、あるひは此殻を用ふ。いと小なるはまれなり。和哥の浦にて龍天螺といふ、あるひは青珠といへり、外青黒にして內は玉光をふく

めり

○ばひ八

ばひは貝の字の義なるべし、よみてかひといへれば蛤螺の惣名となりぬ。このかひは淺洲に生じ、形たにしに似て長く、地色は黄にして古銅色の點あり。皃貝は白きにむらさきの星あり、和哥の浦にてこれを島ばひといふ。享保の比來りし唐人は黄螺といふといへり

○たにし九

順抄にたつび、東雅にたつぼといふ、畿内にてたのし、たんしなどゝいふといへり。殼の小にしてきいろなるはおかし。いと小なるは物あらがひに似たり

○朝顔貝十

桔梗がひ、るりがひともいへり。形はたにしのからにひとしく、はた薄く、裏もうはべも紫なり。げに朝良きちかうの花の色に似たり。和哥の浦にて旋後の尖たる朝顔といひ、まろきをるりといへり。また一種から厚く、表は藤いろにして、内の濃紫なるを俗に紫保ら、また裏むらさきなどゝいへり。この二種はおなじ品なるべし

○きさご十一

あるひはちさごこもいへり。いこ小なるをせゝがひといふ。紅碧の二色のしぼりあるを、いろきさご、また華布きさごこいふ。一種大なるをおほきさご、まただんべいきさごといふ。かたつぶりの殼の如くにして海津ものなり。その白く曝たるを銀きさごといふ。濱田にて玉貝といふ。此たぐひを俗にしたゞみといふはたがへり

○白菊　是もまたきさごのるいにして、いとこまかにひらく、白きつやありてあやなし。またくるまがひの小なるにも似たり

○くるまがひ十二

大小こもにきさごに似て扁く、章紋はこまやかなり。表は樺色に濃色、くち葉の蛇腹文あり。裏は穿心にて蟠旋をあらはしたるものなり。大なるほどめてたし。小にして銀色なるを、和哥の浦にて、こもへだひといふ。またぶだういろなるを、御所ぐるまこいふ。一種からかたつぶりに似て、裏にうつろあるを山ぐるまがひこいへり

○かたつぶりがひ十三

おほきさごの如く、殻うすく、薄黄色にして艶なく、あるひは鐵色の線をまとひたるもあり。
かたつぶりとはその殻にすむ虫の名なり。別錄に蝸牛といふ、其からを俗に眉螺といふ、爾雅に蚹蠃とみえたり　寂蓮の哥に「牛の子にふまるな庭のかたつぶり角あるとても身をや頼まじ

〇つめたがひ　十四

また薩摩がひ、形正圓く扁平にして旋に稜なし。表は樺色あり、銅色あり。裏はしろし。兒貝のなべて白を白玉といふ、紫なるを朝顔といふ、極て小なるに白質にうつり文あるを萩の露貝（の黄なるもまたかくいへり）幾世がひなどゝいへり。また更に白色の寶光あるを着綿といふ。少し長きを和哥の浦にて白鼠といふ。その鷹脊色なるを鼠がひといふ。また一種旋後の尖て殻厚く、潔白雪の如きを富貝（家形がひをもまた富貝といふ。いづれを本とすべきにや）猫がひなどゝいへり。げに白猫の屈て臥たるに似たり。今の唐人はつねにみつるつめたを酥螺といふといへり。復言にみえたり。俗につめたの大なるを、紙すりがひといへり。こはたがへり

〇裏雲珠　十五

きさごの類にして底ひらく旋後直にとがり斜正なる貝なり。裏に雲珠の如くべにくち葉、あ

るは淺葱、あるは虎班色などあり。底の廓に粟粒の如き稜點ありて聚なくめぐりたり。夫木集敦忠の哥に「田鶴さわぐあしのもと葉をかき分てうらうつがひを拾ひつるかな。一種稜點のなきのみにしてうす色と濃色とのくちばまだらありて、旋文もまだらもいとこまやかなるを、えびすがひといへり

○夏桃がひ　また桃貝ともいへり。前のえびすがひの如くにして、旋文に尖あり、質に魚の子をしき、紅くち葉のめぐりに正しき黑星をまとへり

○石だゝみがひ　また眞虫がひ、えびすがひといふ。裏雲珠に似て底少しうづ高く、表に黑白のひとしき間采の章あり、くち繩の表文に似てあり、そのまたく黑きをくろみな、黑玉などゝいふ。大なるを俗にがんがら、また腰高などゝいふ。久しく浪の洗ひ曝たるを銀さゞえといふ。福州府志に云馬蹄螺是なめり

○鶉貝　十六

またやしろがひといふ寄代がひといへるもこれなるにや　形ちはつめたがひに近く、殼うすく、まきどめ小にしてふところ潤し。表裏ともに龜通りて齊く整てめぐれり。質は白く、くち葉の星まだらあり。

大なるは潤光なし。小なるをめでたしこせり。あるひはうつせがひなどゝいふはあしゝ

○津がひ　また片つがひこもいへり。おもふにこは名のみだれたるなり。片こいふをみるに、片し殻のみなるをいふなるなり。海道記長明が哥に「たのみつる人は渚のかたつかひあはぬにつけて身をぞ恨る。此哥にてしるべし。この貝の形は鶉がひに似て地白く、細き線文そろひめぐりたるものなり。あるひは飴貝こいふ、俗態の稱呼なり。一種青白のうつりあるを俗にぶたうといひ、釜貝といへり

○椎貝十七

うづらがひに似て殻厚く艶なく、立に白きに濃色朽葉の縞(しま)すぢあり、また礒貝の厚うして白きに、紅のうつりあるをもかつらがひといへどたがへり

○家形貝十八

また富貝ともいへり　つめたにも此名あり　鶉貝に似て豐に隆く、殻はいと薄くめぐりに横たはり、黒きかすりありて、立にふときみつの白脉(すぢ)あり。その皃がひを鹿の皃といへり。一種おなじ貝にしてたゞ黒きかすりあるものを御簾がひといへり

○百重貝　十九

京貝に似て稜なく、また金絲貝に似て横にふとき浮脉あり。そのすだれんじやくがひの脉に似たり。艫の間はくちば色に錦紅（ニシキ）の章あるゆゑに蜀江螺こもいへり。大小ともにつねにまれにして、いとめづらしきものなり。和哥のうらには折ゝいづこいふ

○山烏貝　二十

唇螺しとろがひ、きりぐす、誰袖、なたきりなどゝいふ。京貝に似て狹く、旋後の疣瘖（イボ）高くおこり、唇外へそりて、表はこき色くち葉と古銅（トビ）色こ二種あり。白地にくち葉の斑あるもまたおほし。山烏の名はその斑によるなり

○銀杏貝　廿一

また松賀貝といへり或は松川がひとも云、松賀のたがひにや、京貝、山烏貝などに似て旋文をつらぬき、兩邊に鰭をはり、げにいてうの樹の葉に似たり。その色は牙白（ウスカキ）色なり。雪白なるをよしとす

○芭蕉貝　銀杏貝にひこしく三方に鰭をはりたるものなり。いかではせをの稱を負しにや

○惡鬼貝　また天狗貝、九輪貝といふ。つくしにてつるべがひといふ。體は長にしの如くに

して、嘴より旋後まで三道に硬刺を生じ棘(イラ)の如きかひなり

○瓔珞貝　また菱貝といふ。京貝の体に近く、首尾迫て旋文をつらぬき、四方に鰭を生じ、その鰭或は屈縮て鉾葺の葉ひらに似たり。また菱角にも似たり。なべて褐色なり。一種色の赤きを金魚貝といふ

○鸚鵡貝　廿二

かたちあふむの鳥のはしに似て、旋後は内にありて外にあらはれず、よて不結がひともいへり。そのめぐり九の重になりて、ひとへごとにこまかなる孔あればまた九穴のかひともいへり。表の色はうす樺にくち葉の虎斑あり、大小ともにすくなし。俗の習に妊婦この殼にて水を飲ば安産すといひつたへて、いつしか兒寧がひともいへり。格古要論に鸚鵡螺、清異錄に九曲螺、復言に九孔螺ともみえたり

○多股舟　廿三

あふむがひに似てまた旋後なし。殼薄く狭き波の如き皺ありて、表裏ともにひとしく絹の縮たるが如し。相州の浦にてめがひを多股舟といひ、雄貝を寒貝といふ。雄貝の方は唇の端要

方へ突起て、二葉草の葉に似たる故に葵貝といへり。雌雄大小ともにいと鬆かひなり、坤輿外記に魟魚といへるはこの貝の事なりといへり

○琵琶貝廿四

また尾上貝、あるひは鶉がひ、芋貝などゝいへり。殼薄く唇にいたりて漸くほそく、卷仰(まきかへり)て中央より旋結は肥豐(ふとり)たり。げに琵琶の形に似たり。地に布理ありて、黄くち葉色の内に竊黑(ウス)又は鳶色のまだらあり

○れんじやくがひ廿五

鳴戸保らに似て稜なく、唇そりかへり、脊に一道のふとき立すぢありて、旋文はかすかにのこれり。脣は寶貝などに似てなめらかなり。一種只立すぢなきものを金絲貝といひ、またむかし袂はしこみなどゝいへり

○脊子貝廿六

京貝の類にしてかどなく、地白く黄に黒をかねたる線脈(いとすぢ)そろひめぐりて、めでたきかひなり

○松塔(カサ)がひ廿七

松のみどりに似たり。また京貝にも似て、粗き魚の子あり、紅くち葉色にして光潤あり。またむしろ理に似たるもあり、是をむしろがひといへり。小なるをみのがひといふ。また一種松虫がひに似て、少し大なるに、魚の子のあるをもみのがひといへり。また一種褐色にしてめぐりに理のそろひたるを花むしろといふ

○あられがひ　廿八

松かさがひの別種にして、立にあられ星の並よくそろひて、こすぢあまりあるものなり。色はくり色も薄樺もあり

○綾巻がひ　廿九

海雀貝に似て、首尾ともにひとしく旋稜なく、紅くち葉の鶺鴒の羽の斑に似たり。質も章ありてこまやかにまとひてめでたく巧めるかひなり。こは遠つ國の印度とやらんいふところより來れるとぞ

○したゝみ　三十

神武紀に「神風のいせの海のおひいしにやいはひもとへる之多儀瀰とみえたり。順抄に食經

を引て、小蠃子貌螺に似て細小、口に白玉の蓋あるものなり。漢語抄に細螺をしたゝみと讀たり。拾遺集に「あづまにてやしなはれたる人のこはしたゝみてこそ物はいひけれ。此哥を引はいかゞ、西行の哥に「海士人のいそしきかへるひじきものたにしはまぐりからなしたゝみ。按にこの貝はさゞえの兒貝に似て、扁きものなり。あるひは平さゞえの兒がひにやあらん、和哥のうらにて鳳皇貝などゝいへり。口に白玉のふたといへるは、今いふ醋貝の事なり。この貝を都元敬が鐵網珊瑚に長生螺、顧岕が海槎錄に相思螺といふ、その蓋を本草に郎君子、閩部疏に雌雄石といふ

〔朱〕游清案にこは一種の物之

校云、此附箋游清筆

〔朱〕壬生忠岑
塩なき衣したみあえて人のいひければ「しほこいへばなくてもからき世の中にいかにあえたるたゝみなるらん
たるの二もしはにしの書あやまりなるべし

○松虫貝 卅一

珠子ほどにして白きに鐵色の羅紋あり、また黄色なるもあり、一種くり色にして章なく、潤色あるものを椎の實貝といふ。その紫なるを紫貝といふ、少し大にして紫葡萄いろに白きく、りすぢあるを俵がひといふ。黄色にして唇の少しひらきたるを袂がひといふ。から薄く稜なく黄黒なるを螢がひといふ。旋に稜ありて細點高くおこりたるを懐がひといふ。その點のくろきを竹の子がひと云。げに竹筍のねかぶに似たり

○椎がひ　卅二

かやの實の形に似て、はだへはすぢほらの如し。一種大にして殼薄く、くち葉色にして卷理あるを和哥の浦にて龍宮螢貝といふ、似付ざる名なり

圖 文貝 琉球國志略

○玉簾　卅三

松虫がひの体にして豐隆なり、から薄く旋文正しく、質膚は白雪の如く、いさゝきやかなる筋理ありて、立横に紅線をまとひ、めづらしくあてやかなるかひなり。和哥のうらにてはべにしぼりといへり

○しらけがひ　卅四

げに精たる米粒の如し。おもふに松虫の兒貝なり 按に寶貝の兒貝をもしらげ貝といへり 紅なるを和哥のうらにてますほといふ。紫なるを螢貝といふ。五色まじはりたるを思ひがひといふ。なべて小貝ともいへり 蛤類の兒貝のまじはりたるも小貝といふ 山家集に「なには潟塩干にむれていで立んしらすのさきの小貝拾ひに。師光の哥に「いせの海きよき渚に駒とめて都のつとに小貝ひろはん

○いつまでがひ 卅五

また千日がひともいふ。佐渡の國よりいづるかひなり。たにしの兒貝に似て、章も艶もなく、茶色なるものなり。物にたくはへてさし經たるも、水に入るればまた活かへりて蚑行ものなり。證類本草蝸螺とみえたり 按にたにしもとしをへていきかへるものなり

○物あらがひ 卅六

是もまたたにしの兒貝に似て、少し唇の方尖、から薄く水黄色なり。いと小なるはたにしの兒貝にまぎれて分ちがたし。後撰集に「蓮の葉の上はつれなき下にこそ物あらがひはつくといふなれ。あるひはわれからとおなじものといひなせるはかうがへをうしなへり

○われから 卅七

後に名義を考るに、此殻は甚薄してもろくもくだくるものなれば、わるゝからといへるこゝろなるべし
かたつぶりの小なるにひとしく、黄あり、黒あり、白あり。藻にすむ虫のわれからといへるも
のなるべし

附【游清言】
齋宮の女御集にしらなくにわするゝ物はおぼつかな藻に住虫の名にこそ有けれ　御かへし
わするらん藻に住虫の名をとはゞ貝もあるぞとあまはつげまし

○山椒貝 卅八
形は正しく山椒の實の如し、黄なるあり、紅なるあり。いと小なるかひなれど、堅固なるもの
なり。つくしの玄海の濱におほしとぞ

○要貝　さんせうがひに似て少し扁し。色黒くげに扇の機心に似たり

○葡萄貝 卅九
また蘡薁貝ともいへり　げに蘡の實に似たり。また色も形も君遷に似たり。殼うすく、ぶだ
う色なるもあり。その小にして琥珀の光あるをこはくがひといふ。白きを關守と云、あるひ

は飼兒貝こいへどあしゝ。うす葉なるを火垂貝こいふ これをほたるがひの本とすべし。外はかりの稱なり 桃色なるを枸杞貝と云、薄むらさきに濃色のうつりあるをかいきがひこいへり

○岩にし四十

松虫がひの類にして色黒く、旋にしたがひこまかなる疣あり、一種から厚くつやなく、色は土ぐれの如くなるをもいはにしといへり

○千種貝四十一

裏うつに似て小なり。また山椒貝にも似て、少し大なり。表にあやなく、紅白こ紫の則なきまだらあり。華布のもやうに似たり。夫木集に「君が代のためしもみゆる長濱に千くさの貝の數もつきせじ 古今集に「君が代はかぎりもあらじ長はまのまさごのかずはよみつくすとも。この哥にいへる長濱はいせの國なり。また越中にも、能登にもあり。万葉集にみえたり。また遠江にもあり。新拾遺集聖武天皇御制の前書に、大原櫻井遠江佐に侍りける時、そのはつかりのたよりにも奏しける所かへし、御哥に「おふの浦その長濱による波のゆたにぞ君をおもふこのごろ こはいろ／＼の貝を讀たるなるべし。この哥をあかしとせしはいかゞ。一種黄にしろきまだらあるを千世の花がひといふ。こはちり／＼にする千代の花がひこよめる詞をみだりにこりたるなり 此哥は花がひのもとにのせたり。また雪がひの兒がひをも千代の花がひといへどいぶかし 赤樺色に白き星あるを紅梅ほらこいへり

○袖貝四十二

また根付がひ、あるひは鼠がひといへり おもふにねつけといへることのあやまりて、ねつみといひしにや、いぶかし つめたに似て、立に長く、旋後小にして口廣く、ひろ口袖に似たり。色白くつやありて見事なり。一種白く朽葉の羅紋あるものをもいへり。是松むしがひの大なるものなるべし

○がうながひ四十三

がうなとは河みなといへる事なり。順抄に、みなと注せり。俗に蜷の字用ふるはたがへりといへど、そのかみ用ひ習はせり。今はみなをになひなゝど、いへり。是河水におふるかひなり。形は竹の子がひに似て、旋おほく、末尖り、腹に魚の子あり。はじめは黒く、曝てはいろ〳〵に章ありて殊体にかはれるものなり。一種唇の外へそりたるをからすがひといふ。別錄に蝸嬴といふ。海にあるをほうさいといふ。皆竹の子貝のたぐひなり

○にがにし四十四

圖 玉がつらといふは[illegible]の[illegible]にて[illegible]

革にし、磯貝など、もいへり。京貝に似て疲たり。旋理に疙瘩つらなりて、褐色のいやしきかひなり。曝たるは薄くち葉にして稜なく厚きかひなり。本草に蓼螺といふ

○巻筆貝 四十五

てうつくし和訓菜

にがにしに似て、稜高く、いとそは〱しきかひなり。いろはうすくち葉と白きあり

○巻物貝 四十六

がうなに似て白く豐なり。質に聚なき繊文をまとひ、いとみごとにしてすなほなるかひなり。あるひは巻貝、綾貝などといへり。是を百重貝といふはあし、

○竹の子かひ 四十七

がうなに似て巻稜なく、白地に玳瑁のまだらあるをよしとせり。大なるほどめでたし。その色は白あり、黒あり、くち葉あり、薄青のうつりあるもあり。いと小なるを巻小竹、千とせがひ、はしがひなどゝいへり。小にして尖たるを錐貝といふ。ともに常熟縣志に鑽螺といへるものなるべし。一種絲かけに似て、たゞ魚の子のみありて、薄樺色なるを絹ほらといふ。一種形のなのめにして稜たち、水色なるを海老貝といふ。げに糠蝦の如し。一種竹の子の魚の子ありて脣尖口は内へそり入て切たるが如く、薄くち葉なるを和哥のうらにて口切がひといへり

○絲懸貝 四十八

また捻貝といふ、がうなの膜たるに似たり。また卷物がひに似て、黄と白あり。立に白緑を引はへたるが如く、一種少しつまりて小なるを闕守と云。また鴎の爪がひともいへり。その引はへたる線すぢに細とあらきあり、質の樺色なるを絹ほらといふ（按に闕守、絹ほらは皆みだれたる名なり） 地黄色にしてこはくの光ありて、緑のみ白を旋環といひ、また呉織(くれは)といふ

○海筆貝 四十九

殻あつく、時鳥貝に似て、旋文の別れなく、椎の實がひの大なるにひとし、色鳶色なり。一種紅海筆といへるは松笠貝に似て長く旋理(まきめ)わかれ、なゝこの理ありて色赤し

○きせるがひ 五十

また川蜷と云。たけの子がひに似て色黒く、旋文なだらに分り、その口はげにけぶりを吐くきせるの火皿に似たり。白くされたるを忍貝といふ。あるひはいふ朽たる樹のうつろに生ぜしものなりとぞ。されば禪官に六木螺なり

○折入ほら 五十一

百重貝に似て、立すぢの稜あらく起、くち藁色にして、つやなく横に介(さかへ)の脈なし

〇結貝　五十二

またゆひがひこいふ。絲かけがひに似て旋のすぢく丶りたるが如く、草石蚕といへる草の根なる珠のごとし

〇身なしかひ　五十三

つとがひ、いもがひともいへり。唇の先とがりて旋底はたひらかにして、たとへば鹿の角先をきりたるにひとし。軸より外へ巻つめたるかひなれば、身の置所なき故にむなしき名を得たり。その章は一様ならず、質白く鐵色なるふぢの花形あるをふぢの花こいふ。紅點あるをはるしやがひこいふ。黄線の羅紋あるもあり、雲珠巻たるもあり。また更に章なくして五色こもにあり、白きに薄紅のうつりあるを裂鈴（サクロ）がひこいふ。いと小なるを麦がひこいふ。げに麦粒のごとし。高倉院二品親王の哥に「かみ島の磯まの浦によるかひの身はいたづらになりはてぬはた云々（かみしまは万葉集に備後の神島の濱とみへたり。續拾遺建久大嘗會備中「神島の波の白ゆふかけまくもかしこきみよのためしとぞおもふ）此哥をしるしこせり。されど此哥は、されたるうつせのかひをなべてよみたるなり。證哥こはなしがたし

〇まくらがひ　五十四

また玉くし箭薩摩雞こいへり。から厚く少し寶貝に似て長く、旋結小にして片方は卷入、片方は唇なり。その章はきくちば褐色鐵色などの羅理あり。大江千里の哥に「舟こむるいその浪しのまくら貝かひある夢にあはざらめやは。一種黄色にして狹ゝ波のもやうあるを玉虫貝といひ、更に白を飼蠶かひこいへり

○蜻蛉貝 五十五

枕がひに似て、からはいこ薄く、旋後は尖、唇は稍にいたるに隨ひ開て水黄色なり。色も形もげに客蟬の羽に似たり。こゝに秋つの名をかりたる、ゆゑなきにしもあらず

○杼かひ 五十六

和哥の浦にて絲卷、放梭、兩口などゝいふ、小なるを絹つゝみこいへり。形は機織の梭の如く、兩唇正しくそろひたり。中央はひこしく豐に隆く、寶貝の脊に似て片方は卷入たり、片方は唇なり。その兩端につらなることまたひとし。色はゆふ日にうつる虹のごこく、いこめでたき寶光あるかひなり。一種兩端に唇をはらずして痩たるものあり、色はうす紅こ白こあり、和哥のうらにてぶごふの小海兎といひ、また絹卷こもいへり ぶどふの兒貝をもかくいへり。いづれを本とすべきにや この三種

一類にしてみごとなるかひなり。そのいさ小なるを氷柱がひといふ。げに垂氷のごとく玲瓏わたるものなり

○寶貝　五十七

また兒寧がひといふ。ある哥に「海士少女ともなひきつゝ海きはにとりあげみればこやすがひかな。竹取物語に、つばくらめのもたるこやすのかひといへるは、このかひとも思はれず、なでふものをいへるにや。こゝにいふ寶貝の大なるは、掌にみてるもあり。小なるはうなるごの指のはら斗なるもあり、その兩端ひとしく對ひ並て齒あり、よて齒貝とも云。文采類色はあまたしあれば筆にしるすよしなし。そが中に白地に紫の星あるものをめでたしとす。これを星寶、ほしがひなごゝいふ。またみごりにくち葉のうつりあるをかいき貝といふ。和哥の浦にてちりめんがひ、丹敷貝などゝいへるは、そのもやうによりていへり。あるひはまたかすみがひ、画貝、紙すり貝、八丈がひ、易貝なごゝいへり按にあだしくににて、いにしへはこの貝を寶として物にかへたれば、その義のこゝにうつりてやうがひといへり。易はかへるといふこゝろなれば、その字音をいへりまたなべて卷貝ともいふ、他國にてはいにしへ專らこの貝をのみ貝といへり。琴高といへる人此かひの事をしるせし相貝經といへる一書あれど、其說いとあ

やしく覺つゝ故にこゝにもらしぬ

○海兎 五十八

たからがひに似て薄く中高く豐なり。兩脣內へ卷入て齒なく、また首尾なきが如なれどおのづから旋結と脣角あらそ(ママ)の色は皎雪の如く、白玉の寶光あり。まれにりうきうよりもたらし來ることあり。小なるはたまく〵きの國の海よりもいづるといへり。宋の可洪龍が文房圖贊に、光祿の官に拜せしめて貝光祿となんいへる

片し貝類

○あはび一

萬葉集に「いせの泉郎の朝魚ゆふ菜にかづくこふ鰒の貝の獨念にして。書記に海神の持くる白玉こいへるも此かひの腸よりいでし珠なり。赤人の哥に、淡路の〻島の海子の海底奥津いくりに鰒玉さはにかづきて船なめてつかへまつりしかしこさみれば、こよめり。いにしへはこの玉を寶こなしてさゝげ奉りし物なるべし。今にしてはこゝかしこにてこりつごへ、醫師の用にのみなせり。その殼の大なるをあはびといひ、小なるをとこぶしといへり。他の國にても別錄に石決明といふは大なるものをさしていへり。後漢書の伏隆が傳に鰒魚といへるは小なるをいへる也

○礒貝二

萬葉集に「水沫る玉にまじれる礒貝のかた戀のみにこしはへにつゝ。後花園院の御製に「我袖はいつかひがたのかたしがひあふてふことも浪にしをれて。夫木集に「いせ嶋やふた見の

浦のかたし貝あはで月日を待ぞつれなき。是礁石(かくれいは)またなべて海つ物によりておひける片しの貝なり。脊は笠の如なるからを負て、内に身あり。その殻の形になだらかなるもあり、鳥のはしのやうに勾りて尖りたるもあり。またその色も章もあまたたぐひあれば、人のみるめによりて稱呼もまた多し。その稱によりておのづから形も色も思ひしるべし。かしら尖たるを小鷹、濱千鳥、その白きを雪雀、雀貝などゝいへり。良子内親王家哥合、大江の匡重の哥に「波よする竹の泊の雀がひうれしき世にもあひにける哉こゝに云竹の泊は越前にあり、能因哥枕には能登、名寄には加賀に入たり　少し毛のおひたるをみのがひといひ、なだらに淺きを嫁が皿嫁が笠、また笠を緣にして御幸などゝいへり。内に黄がね白がねの光あるを金皿銀皿といふ、楓の葉また紅葉に似たるをばその稱をいへり。頂の白を雪家隆の雪などゝいふ。淺く横に長を少女の笠といへり。皆閩書に云石䗩なり

〔楽〕游清銀塩尻てふ事は考ありて別にしるし置ぬ

○ふぢ壺　また塩尻がひさいふ。礒貝の一種にして脚高く、頂うつろなるものなり。閩書に蛾といへり。あるひは是をうつせがひといへるはあしゝ

○桐壺　また蓬生ともいへり。俗にくじらがきといふ。鯨の脊につきて生ず、かたちふし壺

の如にしていと大なり、色はなべて白くつやなし

○柳貝三

また孔雀がひといへり。あはびの兒貝に似て孔なし。また太刀貝に似てみじかく、内に青翠の光をふくみ、表は鐵色にして膚うるはし。つくしにてしよがひといふといへり。他し國に青螺といへるもの是なりといへり

○蜑貝四

是もまたあはびの兒貝に似て、表は波間がしはのはだへに似たり。内は淺く棚ありて小舟の形に似たり。色はうす紅と白あり、風雅集に「みつはさすしほひにあさるあまがひは思ひもよらずわかの浦かな。また舟がひともいへり。夫木集に「こゝ人も便によする舟貝は吹くる風やつなぐなるらん。一種いと淺て色白きを和哥のうらにて白玉椿といふ（白玉椿はもときせ綿かひの事なり）

○螢がひ　またゐんこがひ、あるひは若衣といへり。海士がひに似て棚なく、またあはびの兒貝に似て孔なく、表は紅にして内はみごりなり。更に白をひとへがひといへり

○駒のつめがひ　和哥の浦にて海士小舟といふ、海士貝に似て深くまたあつし、表は螺の類に

近く、裏は人の爪甲の如く、中央に介あり、色は白きに青色のかすり、あるひはまだらなるもあり、鐵色に檜垣の模様あるもあり、あるひは吾嬬がひ、松貝などゝいへり、また一種松むしに似て、からうすく脣ひろく、蘆の葉のやうに青色の章あるをも海士小ぶねといへり

○ゑぼしがひ 五

また鷲の爪つめがひ、鳥がひ、冠貝などゝいへり。これまた物によりて生ず、かたち龜のあしの如くにいでゝ、その上に鳥の爪の如きからを生ず、大小によりて稱をことにせり。順抄に尨蹄子をせと訓たり。また萬葉集に石華をせとよみたり、ともにこゝにいふゑぼしの事なり。本草に石蜐といへり

殊体類

○露貝　一

形ち菠薐菜の實に似て、細粒にして、げに秋の野におきたる露のごとし。その色の黄なるをば、いかにしてかさゝの露、また萩のつゆといへり、少し大なるを龜貝といふ

○はまかづら　二

かづらのまとひたるが如きものなり。白く小なるをよしとす。あるひはまがりがひなごゝもいへり。本草に石蛇とみえたり

○甲がひ　三

はじめは栗の毬に似て刺あり、その刺をはらへば正圓にして扁く魚の子あり、一種星かぶとゝいふは、かぶとの星の如くにそろひたるものなり。順抄に蠡蠃子をうにと訓たり、俗に雲丹と書り。催馬樂の譜に、みさかなは何よけん、あはびさだをかせよけん、といひつゞけたるかせといへるも抄にいふうになり、閩書に海膽といふ

○棘螺四

是うにの一種にして殻うすく刺もやはらかなり、あるひは福州府志の石樁なりといへり

○角貝五

形ちまさしく角の如にし牙の如にして、海底の石につきて生ずる貝なり。長きものは四五寸計にして、くち薬色のうつりあり。内はうつろなり

○砥草かひ六

これまた石上に付て生ずるものなり。牙の如くそりてまた砥草のやうに線楞立て程もおなじ、色はなべてしろし

○寒菊がひ七

これは螺類の唇角くだけたるものなり。されば蚍がひとも、われがひともいふべし

○破貝八

夫木集に「わかの浦にふるきくだけのわれがひも拾へば数にまたまじりぬる

○蚍貝九

夫木集に「與謝の海の汐干にかたのまさご路をゆけばきずがひありといふなり

胃稱類

○桔梗貝 一

また多股舟、花筐(カタミ)、總角、圓坐貝、編笠貝などゝ云。是は海紅葉といふ虫の甲骨なり。烏賊の甲のごとし。本草に海燕といふ、その骨を本草原始に海盤車といふ

○香はし貝 二

棘螺の刺あり

○傀儡貝 三

或は蔦家貝、茗荷貝とも云。まふきとひらきによりて稱をことにす。是は菊銘石の苗なり。

本草に石梅といふ

○茗荷貝 四

いと小なるを千鳥がひといふ、是はさゝえわりといへる蝋の顱をきりはなしたるものなり

○塩家貝 五

あみ貝ともいふ、花の形をなしたるを牡丹貝といふ、是は中山傳信錄にいふ石華にして、また貝にはあらず

○蟬貝　六

瀬虫のかれたるものなり。蛤類に同名あり

○葵がひ　七

また蟬の羽がひと云、螺の蓋なり。螺類に同名あり

附錄みぬめのにしき

岩籠貝　すだれがひの理に似て狹く長し、から厚く表赤く、褐色の横すぢありて、裏白しといへり

こゞろ貝　ほら貝に似て長くあつしといへり。按にしごろ貝の誤たるにや、しごろは山鳥貝なり

めくさり貝　からの外赤く横に白すぢありて内の廓はうす紫なりといへり

さゝら貝　ある書に關東の海におほくあり、ふたつ合て殻は聲あり、編木をならす音に似たりといへり。是塩貝、おきしゞみのたぐひにや

宮代貝　まろくして色も章もせゝがひに似て大なるものなり。七八寸計なるもあり、また青縹のうつりあるもありといへり

ひらんがひ　肥前の大村の海にありて玉を含といへり。袖がひのたぐひにや、いぶかし

わにがひ　大にして疣瘡あり、赤褐色、和哥の浦にありといへり

羽貝　蚌類にして潔白なりといへり。たひらかひなるべし

九穴貝　いたらがひをいふといへり。いといぶかし。九穴はもとあふむがひの事なり

末廣貝　帆立貝にゝて厚しといへり。媼貝にや

きよくよう貝　編笠貝に似ていろ黑く、月日に白きまだらありといへり

みるがひ　蚌類にして水鳥の如し、かしらに兩羽あり、尾のかたは羽あがり、色白くつやはなしといへど、めづらしきかひなりといへり

松風がひ　色白く立横に細くこまかなるすぢありてから薄きかひなりといへり、潮がひの事にや

みごりがひ　めくはしやの事にや

あのがひ

石陰（かげ）貝

土負（つちおひ）がひ

はたしがひ

はしらがひ

あかねさす日の光にはらめるかひつもの丶からを、濤にさらし、潮にそむるかずしげきは、しき島の、濱の眞沙にことならじ。　その名をたづぬるに、中つ世までの哥によみたるは、かぞふべけれど、今にしては、このみつごへる人の、いやましになりて、海士人などの、むらきものこ丶ろに任せて、呼ならはせる名のさわになりけらし。　そが中に、ひなびたるもあり、にげなきもありけり。か丶るくさ〴〵を、きはめ侍らむ事は、こやすのかひをもこめけるよりもかたかりき。みるめもからぬ浦風に、吹寄るたからのあとを書つきけれど、濱千鳥ふみたがへるなのめなるもあるべけれ。　また玉ちらふ遠つ渚はのこしつ丶、わたつ海の千世のにしきをめでける人は、拾ひあはせて書そへ給へつれ

享和三年癸亥のとし九月もちの日書をへぬ　曾永年

國史草木昆蟲攷の奥に

曾槃の著國史草木昆蟲攷は寫本にて傳はれるものなるか其の原本は今世に傳はれりや否やを知らず。新村博士のすゝめより本會にて開版せばやと思ひたちて先づ其の寫本を借り出でんと本草の書どもにくはしき岡不崩君に交して持ち給はらば借し給へと申し遣はしたるに我が許には無けれど故白井博士の藏書中に有なる本なれば何とかして寫して借しまゐらせんと返りごと給ひつるうれしとも嬉しくぞ覺えき。さて程經て新に寫しとゝのへて送り來し給ひ、かつ此書誤り澤なりと見ゆればよく校訂しねとの事なりき。先づ一とわたり讀み見ろにげに誤脫すくなからじと見えつれば其上下に附箋しつゝ讀み試むるに張る處も無きまでなり。座右に有る本どもにて校合し訂正すべきは訂しつれど其書どもの手許に無きはすべき様もなくて困じはてつ。いかにせましと案じくらしつる末に大阪圖書館の本は此筆寫本の原本なれば其を借り出でゝ校合するが先づ第一ならめと思ひて大阪へ行きて長田館長、楠松司書にことの由申して其本を借り出でつ、大阪府立圖書館の本は勤王家青木秀枝の持たりし本にて秀枝の自から寫したる處も有り、極めて貴き本なり、此本にて一通り校合して余程よき本とはなりつれど猶原本より寫せる本ならぬ爲にや、通ぜざる處ども少からず、其より又京に上りて京都大學の久原文庫、今の古梓堂文庫と云へるに收藏せる木村正辭博士の舊藏本によりていぶかしと思ふ處々を引くらべ鈴鹿三七君にも力添へを乞ひて調べつれど猶いかにぞや思はるゝ處彼れこれあれど今はせんすべなくて斯く刷ま

きとなしつ、猶よき本見出でなば訂さまく思ふにこそ。

さて此書、題簽は一より九迄は國史昆蟲草木攷とありて内題は國史草木昆蟲攷とあり。こは目安からぬ事なれば世のなみに内題を本の名と定めて國史草木昆蟲攷となしおきつ、卷十は國史外品動植攷とあり、こは附錄やうの形となれるものならんとぞ思はるゝ。さて此著者の傳、座右の書どもに無し、田舍の事とていかにともなし難し、此人の著成形圖說と云ふを近頃新らに刷り出しつれば其には其傳もやあると、ふりはへて取りよせて見つれど其にも少しも其傳どもは見えず、出版の日もせまりつれば今は手だてもなし、此人鹿兒島藩の醫官にして本草には極めてくはしかりし人とて其名高きを其の傳を余の知らぬは恥かしききはみなれど、其もすべなし。名は永年、占春と號せり。著書はさま〴〵ありと見ゆれど今傳はれりや否やを知らず。白井博士の博物學年表に揭げられし記事を拔きいづるに

天明八年

曾占春其師多紀永壽院ノ依囑ニ應シ總房瀕海ノ地ニ杜松子ヲ採集シ底里亞迦製造ノ用ニ供ス

淸國蘇州府ノ藥材商呂宏昭長崎ニ來ル曾占春藥品ノ產地ニ關スル疑問七十餘條ヲ出シ其答書ヲ得テ「呂宏昭藥品答」ノ一卷ト爲ス

寬政四年

此夏曾占春東都ヨリ薩摩ニ往キ藩府ニ滯留ス

同六年
秋八月曾占春「農經講義」上下兩卷ヲ作ル（漢文寫本）
同八年
五月曾占春因定生「救荒本草和訓證」一卷ヲ作ル
同九年
薩藩侍醫曾占春「無人島談話」三卷ヲ著ハシ鳥島ノ地形、物産等ヲ圖說ス、其目次左ノ如シ、漂流紀聞、地形、方位、氣候、物産、洞穴、食料、
同十年
曾占春「本草綱目纂疏」二十卷ヲ撰述シ先ツ其三卷ヲ上木ス
同十一年
薩藩醫曾占春、灘江氏カ蝦夷ヨリ採集シ來ル所ノ草木腊葉ヲ分類整理シ「蝦夷草木志料」一卷ヲ作ル
同十二年
立春前一日曾占春「本草綱目纂疏」二十卷修正ノ業成ル
享和三年
曾占春「渚の丹敷」二卷ヲ作リ介類ヲ圖說ス、又人參培養法及製造法ヲ記述ス

文化元年

薩侯曾槃、白尾國柱等ニ命シ「成形圖説」百卷ヲ撰述セシム。此年其三十卷ヲ上木ス

同三年

三月四日江戸大火高輪泉岳寺門前ヨリ出火市中大抵燒拂フ、高輪薩州藩邸亦全燒ス、此時同藩藏版「成形圖説」ノ版木原稿共ニ烏有ニ歸ス依テ編輯局ヲ廢シ編輯局員白尾國柱等ヲ歸國セシメ更ニ曾占春一人ニ命シテ菌部以下ヲ續輯セシム

同六年

八月曾占春「占春齋魚品」三卷ヲ著ハシ、有鱗魚八十種、無鱗魚五十二種、異魚二十六種ヲ記載シ、和漢名ヲ考證ス、八月二十三日下筆九月二十四日收筆スト云フ

同九年

冬日曾占春「頭書釋藥」一卷ヲ作リ又「辨物産之道」「辨本草之道」ノ二文ヲ作ル

同十一年

薩藩侍醫曾槃「水草識略」ヲ作リ水草一百三十餘種ヲ記載シ又「藥性證」一册ヲ作ル

曾占春「禽識」四卷ヲ作リ水禽、原禽、林禽、山禽、百二三十種ヲ記載ス

同十二年

十月曾占春武州荏原山莊ニアリ「橘黃閑記」三十卷ノ編輯ニ着手ス

同十四年

曾占春「藥性討源」上下兩卷ヲ作ル

薩州醫學院ノ藥園生醫師澀江東嶺大島山中ニ於テ一種ノ香木ヲ得テ其枝科及葉腊ヲ携ヘ歸リ之ヲ東都ニ傳致シテ曾占春ヲシテ審定セシム曾氏之ヲ記シテ曰ク、其葉ハ槲葉ニ似テ大ニ又椿葉ニ似テ小ナリ、其片梟ノ文理ハ緻密纖細其質柔軟其色ハ牙白、檀色ノ片段相交ハル、其朽路腐爛シ枝節壞坎ノ處ニ香ヲ結スルコト南越志ノ言ト相同シク燒テ其烟ヲ聞クニ卽チ沈香ナリ、又嚼テ其味ヲ試ルニ苦ク微ク甘シ、記ニ云、其樹皮ヲ島中ニテ紙ニ抄スト、是亦嶺表異錄ノ說ト相符合ス（成形圖說）ト云云

文政十一年

七月、本間游淸占春ヨリ「呂宋照藥品答」及「質問木略」「中山草木」ノ三書ヲ借リテ之ヲ手寫ス

同十二年

春三月東都桐原ヨリ火起リ曾占春ガ明石橋ノ家ニ延燒シ藏書及歷年ノ著述悉ク燒失ス

天保二年

曾占春「成形圖說菌部」以下十三冊ヲ續輯シ藩主ニ呈ス

同五年

二月二十一日曾占春歿ス年七十七、江戸深川富吉町正源寺ニ葬ル著ハス所「成形餘志」二十卷「暇積抄」五十二卷「橘黄閑記」三十卷「國史草木昆蟲考」十二卷「藥物俗名集」四卷「藥品異名集」五册「本草綱目纂疏」十三卷「藥補損餘」二册「水草識略」一册「皇和蕈譜」一册「占春齋魚品」「同禽識同介誌」「百馬皮相考」「神農本經講義」「人參識」等甚多シ

以上其のあらましなり。「紙譜」など著はしつること本書のうちに見えたり。

植著書屋圖書目錄に見えたるものにて白井博士の年表に見えざる著書に

草隱枕譚　寫一册　年代不詳

日本百花寫眞圖　刊一本　天保二辛卯年版　亦名を百卉存眞圖とも云ふ

春野なゝくさ　刊一本　寛政十二庚申版

など見ゆ。成形圖說百卷本は燒失せるならめど、岩崎家の靜嘉堂文庫に刊本以外の稿本ありとの事なり。其のことに就きては土屋喬雄氏新刊の成形圖說の卷頭の文に

「國書解題」を見ると「其の三十一卷後は草稿のまゝ今、傳へて岩崎家にありといふ」とある。島津家には岩崎家所藏本の寫しゝか傳へられてゐないといふことであるから、私は「國書解題」の指示に隨つて、岩崎家の靜嘉堂文庫を訪れた。同文庫には彩色圖入の刊本三十卷のほかに「原稿」卷三十一より卷四十五迄が藏せられてある。それはもと重野安繹博士の藏本であつた。いまその各卷の表紙題目と各卷第一頁の題目とを對

照し列擧すれば、左の如くである

表紙題目		各卷第一頁題目		
三十一	菌	菌部		
三十二	山草一	藥草部	第三	山草類
三十三	山草二	藥草部	第四	山草類
三十四	山草三	藥草部	第五	山草類
三十五	山草四	草部	第六	山草類
三十六	芳草	藥草部	第六	芳草類
三十七	毒草	草部	第八	毒草類
三十八	隰草一	草部	第九	隰草類
三十九	隰草二	藥草部		隰草類
四十	水草	藥草部		水草類
四十一	蔓草	藥草部	第十一	蔓草類
四十二	香木	木部	第一	香木類
四十三	喬木	木部	第二	喬木類

四十四　灌木　　木部　第三　灌木類

四十五　果　　　果部　第一　五果類

右によれば、靜嘉堂文庫所藏のものは、既刊三十巻以外の全部七十巻でなく、十五巻に過ぎないが、しかもそれは必ずしも原本の第三十一巻から第四十五巻までの揃ひでもないことが推測される。……遺憾ながら今日恐らく完全には殘存しないであらうことを推定せしめる材料がある。即ち左の靜嘉堂文庫第三十一巻の序「成形圖說編次の因」天保二年曾槃記　がそれである

臣曾槃三十年前に

南山老公より此書編輯の命を蒙、文化丙寅のとしまでに凡三十巻をえらびて以往竹芝の西邸に編輯局をもうけ、木に付したり。如何そ文化丙寅のとし春三月高輪手のわたりよりかぐつちの神のあら火おこりて、竹芝の本邸西邸なべて延燒せり。是に於て有司の局事更に繁錯なれば編輯局を收玉ひぬ。されば同僚及び屬吏僉歸國せられて、臣槃一人にこの書の編輯を命ぜらる。謹んで命を奉じ門を杜、客を謝し、烏啼雀啾比より筆硯を事とし、底稿數十卷やゝなりて將に木に付むとす。當時臣槃が家は江戸大城の東なる明石橋邊にあり。嘆すべし、文政己丑の春三月柳堤よりあらひおこりて書庫焦亡し、歷年の自著悉く灰燼となる。けだし吳天醜を世に售ことを憫て煙火に歸するにや。頃に櫻田邸中に宿て竟にこゝに寓居し、舊命によりて編輯を顓務とす。今玆命を奉じて孤陋の裒錄をのぶることかくのごとし。ねがはくば後人の補正を俟のみ

天保二年六月　臣曾槃しるす

これによれば……彼は三度稿起して編纂に從ひ、二年の後天保二年に至つて、既述の十五卷を完成したものゝ如くである。……

帝室博物館には刊本三十卷の外寫本二十卷ある。それは鳥部で、卷之百一から百二十までである。それには特に美しく、細密な彩色の圖を多く挿入する。その序文は左の如く述べてゐる

成形圖說百卷、薩藩侍臣曾槃等所纂録、其五穀菜蔬十五卷、既刊行于世、開佗未脫稿、藥草部鄕校勘畢業、將上梓而罹災、某亦纔免、此二十卷、顧徒草稿中鈔出、而羽族凡三百餘品、名稱形狀、辨析臚列、及渾藩所齎、珍産異種咸丹青貌、莫有遺缺焉、則雖鈔本、世蓋有一、而未有二者、豈可弗寶玩哉、我　南山太公購得之、尊藏諸秘庫、命使臣實題數言、己酉孟夏龍華會日

臣　穗積實

臣　內野儀　拜書

この序文によれば、曾槃の歿後恐らく文政二年の火災に燒失を免れたる草稿中より拔萃して、鳥部二十卷を成したのである

以上は著者の傳を知る資料ともなり、かつ其大著成形圖說を知るたよりともなれば載せおくなり。此書を出版するに當り岡本[illegible]君のなみ〳〵ならぬ助力を得たるは前に云へるごとくなるが、其外に大阪府立圖書館の長田、植松の両君、京都の館員君たちの便宜を計り給ひしことを一言しるして深謝の意を表す

岡山萱木長齡攷の堀に

〇

渚の錦のなれる故虫は其の序跋にて明らかなり。國書解題などには圖あるやうに見ゆれど、わが藏書には圖譜添はず、本朝游清が書入及び押紙どもあれば彼の人の藏書なりきと見ゆ、游清と占春はしたしかりしと見ゆれば此書は原本より寫しつゝとおぼしく誤脱は稀なり。朱の傍訓は片かなを用ゐて墨の傍訓と分てり。

昭和丁丑三月　　正宗敦夫

國史草木昆蟲攷　下　日本古典全集之内

編纂者　正宗敦夫
東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
發行者　合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長嶋東一
東京市豐島區長崎東町三丁目一五八
印刷者　不二製版印刷所　髙瀬清吉
東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
發行所　合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二

昭十二年三月二十日印刷
昭十二年三月廿五日發行

【非賣品】